

# 荒砥諏訪西遺跡 I

昭和58年度県営圃場整備事業荒砥北部  
地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

《竪穴住居本文編》

2002

群馬県教育委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 荒砥諏訪西遺跡 I

昭和58年度県営圃場整備事業荒砥北部  
地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

《竪穴住居本文編》

2002

群馬県教育委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





赤城山南麓の地勢と荒砥諏訪西遺跡



3区36号住居出土土器



## 序

前橋市の旧荒砥地区では、昭和56年度から国道50号の北側地域を対象にした県営荒砥北部圃場整備事業が始まり、平成3年度まで行われました。圃場整備の対象になった地域は、県内でも有数の埋蔵文化財密集地で、多くの埋蔵文化財が記録保存の発掘対象となりました。

当事業団では昭和56年度から59年度に対象となった事業地内における埋蔵文化財の発掘調査を行いました。本来なら発掘調査後、直ちに報告書を刊行する予定でしたが、諸般の事情により、平成5年度から整理作業を開始し、これまでに5遺跡、7冊の調査報告書を刊行いたしました。

平成12・13年度には、昭和58年度に発掘調査を実施した荒砥諏訪西遺跡の整理事業を実施し、ここにその報告書を上梓することとなりました。

荒砥諏訪西遺跡は、古墳時代から中・近世にかけての複合集落遺跡で、検出した遺構・遺物は膨大な数量でした。そこで、整理作業を2年計画で行うこととし、まず第1年次は、古墳時代の竪穴住居とその出土遺物を対象に整理作業をおこないました。今回の報告では赤城山南麓地域における古墳時代前期の農耕集落の在り方を研究する上で貴重な資料を新たに加えることとなりました。

発掘調査から報告書刊行まで、群馬県農政部土地改良課、前橋土地改良事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、一方ならぬご指導、ご協力を賜りました。厚く感謝の意を表します。

最後に、本報告書が、地域の歴史解明のため、多くの人々によって有効に活用されることを願い序といたします。

平成14年10月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 小野宇三郎





# 例 言

1. 本書は1983（昭和58）年度の県営園場整備事業荒砥北部地区に伴う荒砥諏訪西遺跡の発掘調査報告書である。本書はその第1分冊であり、2003年に第2分冊の刊行を予定している。
2. 荒砥諏訪西遺跡は、群馬県前橋市荒町899番地を中心としている。遺跡名は本遺跡に北接して、群馬県教育委員会が諏訪西遺跡を調査報告しているのを受け、遺跡のある旧村名である「荒砥（あらと）」に、字名の「諏訪西」を付して「荒砥諏訪西」とした。
3. 発掘調査は、群馬県農政部、前橋土地改良事務所・群馬県教育委員会の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査時の組織体制は次の通りである。

期 間 1983（昭和58）年10月4日～1984（昭和59）年3月24日  
管理・指導 小林起久治、白石保三郎、松本浩一、近藤平志、細野雅男  
事務担当 国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団職員  
野島のお江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子（同補助員）  
調査担当 鹿田雄三（同調査研究員、現 県立伊勢崎東高等学校教諭）、  
藤巻幸男、小島敦子、斉藤利昭、徳江秀夫（同調査研究員）
4. 発掘資料の整理および報告書の作成は、群馬県教育委員会の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書の作成期間・体制は次の通りである。

期 間 2000（平成12）年10月1日～2001（平成13）年8月30日  
管理・指導 小野字三郎、吉田 豊、赤山容造、住谷 進、水田 稔、能登 健、坂本敏夫、大島信夫、  
西田健彦  
事務担当 笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、森下弘美、片岡徳雄  
(同事業団職員)  
大澤友治（同嘱託）、並木綾子、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、  
本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、吉田 茂、藤原正義（同補助員）  
編 集 中沢 悟（現 調査研究部課長）、徳江秀夫（同事業団職員主幹）  
本文執筆 第4章中沢 悟、第4章を除いた全て徳江秀夫  
遺構写真 調査担当者  
遺物写真 佐藤元彦（同事業団職員主幹兼係長代理）  
遺物観察 中沢 悟、徳江秀夫  
保存処理 関 邦一（同事業団職員主幹兼係長代理）、土橋まり子（同嘱託員）、  
小村浩一、高橋初美（同補助員）  
器械実測 佐藤美代子、田中富子、富沢スミ江、小菅優子、矢島三枝子（同補助員）  
遺物整理  
図面作成 桑原恵美子、須田育美、小池 緑、新井雅子、嶋崎しづ子、田中富美子（同補助員）  
委託関係 (株)測研（トレース）
5. 石材鑑定にあたっては飯島静雄氏（群馬県地質研究会会員）にご教示を得た。

	誤	正
凡例 1 (3 行目)	東から西方向に 1 から 20 まで	西から東方向に 0 から 19 まで

6. 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご助言を得た。記して感謝の意を表したい。  
井上唯雄、鹿田雄三、関口巧一、前原 豊（敬称略）  
群馬県農政部土地改良課 群馬県農政部前橋土地改良事務所 荒砥北部土地改良区 群馬県教育委員会
7. 出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財センターおよび(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

## 凡 例

1. 本調査に用いたグリッドは、調査区全体をカバーできるように、100mの大グリッドを設定し、その中を5×5mの小グリッドとした。グリッドの呼称は100mの大グリッドを独立した単位とし、北西コーナーの交点をA-0とし東から西方向に1から20まで、北から南方向に0からtまでとし、Pa-1のように呼称した。
2. 本書における遺構番号は、調査時に付されたものをそのまま使用している。このため欠番が生じている。
3. 遺構図の中で使用した北方位は、すべて磁北を使用している。
4. 遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付した。

遺構図 住居 1 : 60 住居電 1 : 30

遺物図 土器 1 : 4

5. 遺物番号は本文・挿図・表・写真図版と一致する。
6. 図中で使用したスクリーン・インレットは以下とおりである。

(遺構)  焼土  粘土  灰  
○土器 ○石器 ○鉄

7. 面積は、住居の上端をプランメーターを用いて3回平均値で測定した。なお電を持つ住居では電を含めていない。
8. 方位は、北方向に最も近い壁の方向を計測した。
9. 付図中に表記した国家座標は日本測地系による。
10. 各地図・写真の使用は以下のとおりである。

第1図 国土地理院発行、20万分の1地勢図(長野・宇都宮)

第2図 前橋市土地改良事務所発行、県営圃場整備事業荒砥北部地区計画概要

第3図 『群馬県史』通史編1付図を簡略化した「荒砥上ノ坊遺跡1」第5図を修正して使用。

第4図・第8図・第9図 前橋市発行、昭和49年測図現形図47

第5図 国土地理院発行、2万5千分の1地形図(大胡)

第10図 前橋市発行、平成10年測図現形図47

PL1 国土地理院発行、空中写真

# 目 次

口 絵	
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	
写真目次	

第1章 調査に至る経過	
第1節 県営圃場整備事業と発掘調査の経過	1
第2節 調査に至る経緯	3
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 遺跡の位置と地形	4
第2節 周辺の遺跡	6
第3章 発掘調査の方法と経過	
第1節 発掘調査の方法	12
第2節 調査の経過	12
第3節 遺跡の基本土層	16
第4節 調査区の概要	16
第4章 検出した遺構と遺物	
第1節 古墳時代前期の住居	17
第2節 古墳時代後期の住居	121
第5章 調査成果と整理のまとめ	
第1節 荒砥諏訪西遺跡の集落変遷と占地	155
第2節 古墳時代前期の土器	157
第3節 古墳時代後期の土器	163
参考文献	166
写真図版	
遺構	P L 1～P L 21
遺物	P L 22～P L 54
報告書抄録	
別冊 土器観察表	
付図	

# 挿図目次

第 1 図	荒砥諏訪西遺跡の位置……………	1	第 39 図	3 区10号住居 (1) ……………	39
第 2 図	県営圃場整備事業荒砥北部地区と 昭和58年度工事区……………	2	第 40 図	3 区10号住居 (2) ……………	40
第 3 図	群馬県中部の地形と荒砥諏訪西遺跡……………	4	第 41 図	3 区12号住居……………	40
第 4 図	荒砥諏訪西遺跡周辺の地形……………	5	第 42 図	3 区12号住居出土遺物……………	41
第 5 図	荒砥諏訪西遺跡周辺の遺跡分布……………	7	第 43 図	3 区14号住居……………	41
第 6 図	弥生時代から古墳時代前期の遺跡分布……………	10	第 44 図	3 区14号住居出土遺物……………	42
第 7 図	古墳時代中・後期の遺跡分布……………	11	第 45 図	3 区17号住居 (1) ……………	43
第 8 図	荒砥諏訪西遺跡調査区の設定……………	12	第 46 図	3 区17号住居 (2) ……………	44
第 9 図	荒砥諏訪西遺跡調査区的位置 (調査時) ……	13	第 47 図	3 区17号住居出土遺物 (1) ……………	45
第 10 図	荒砥諏訪西遺跡調査区的位置 (現状) ……	14	第 48 図	3 区17号住居出土遺物 (2) ……………	46
第 11 図	荒砥諏訪西遺跡の基本土層……………	15	第 49 図	3 区17号住居出土遺物 (3) ……………	47
第 12 図	1 区 1 号住居……………	17	第 50 図	3 区17号住居出土遺物 (4) ……………	48
第 13 図	1 区 1 号住居出土遺物……………	18	第 51 図	3 区22号住居 (1) ……………	49
第 14 図	1 区 2 号住居……………	19	第 52 図	3 区22号住居 (2) ……………	50
第 15 図	2 区 1 号住居出土遺物……………	19	第 53 図	3 区22号住居出土遺物 (1) ……………	50
第 16 図	2 区 1 号住居……………	20	第 54 図	3 区22号住居出土遺物 (2) ……………	51
第 17 図	2 区 2 号住居出土遺物……………	21	第 55 図	3 区24号住居 (1) ……………	52
第 18 図	2 区 2 号住居 (1) ……………	22	第 56 図	3 区24号住居 (2) と出土遺物……………	53
第 19 図	2 区 2 号住居 (2) ……………	23	第 57 図	3 区25号住居……………	54
第 20 図	2 区 3 号住居と出土遺物……………	24	第 58 図	3 区25号住居出土遺物 (1) ……………	55
第 21 図	2 区 5 号住居……………	25	第 59 図	3 区25号住居出土遺物 (2) ……………	56
第 22 図	2 区 5 号住居出土遺物……………	26	第 60 図	3 区28号住居 (1) ……………	57
第 23 図	2 区 7 号住居出土遺物 (1) ……………	26	第 61 図	3 区28号住居 (2) ……………	58
第 24 図	2 区 7 号住居と出土遺物 (2) ……………	27	第 62 図	3 区28号住居 (3) ……………	59
第 25 図	2 区 8 号住居と出土遺物……………	28	第 63 図	3 区28号住居出土遺物 (1) ……………	60
第 26 図	2 区 9 号住居と出土遺物 (1) ……………	29	第 64 図	3 区28号住居出土遺物 (2) ……………	61
第 27 図	2 区 9 号住居出土遺物 (2) ……………	30	第 65 図	3 区28号住居出土遺物 (3) ……………	62
第 28 図	3 区 2 号住居……………	30	第 66 図	3 区28号住居出土遺物 (4) ……………	63
第 29 図	3 区 2 号住居出土遺物……………	31	第 67 図	3 区28号住居出土遺物 (5) ……………	64
第 30 図	3 区 4 号住居 (1) ……………	32	第 68 図	3 区29号住居 (1) ……………	65
第 31 図	3 区 4 号住居 (2) と出土遺物……………	33	第 69 図	3 区29号住居 (2) ……………	66
第 32 図	3 区 5 号住居……………	34	第 70 図	3 区29号住居 (3) と出土遺物 (1) ……	67
第 33 図	3 区 5 号住居出土遺物……………	35	第 71 図	3 区29号住居 (4) ……………	68
第 34 図	3 区 6 号住居と出土遺物……………	35	第 72 図	3 区29号住居出土遺物 (2) ……………	69
第 35 図	3 区 7 号住居出土遺物 (1) ……………	36	第 73 図	3 区29号住居出土遺物 (3) ……………	70
第 36 図	3 区 7・8 号住居と 7 号住居出土遺物 (2) ……………	37	第 74 図	3 区29号住居出土遺物 (4) ……………	71
第 37 図	3 区 8 号住居出土遺物……………	38	第 75 図	3 区29号住居出土遺物 (5) ……………	72
第 38 図	3 区 9 号住居……………	39	第 76 図	3 区29号住居出土遺物 (6) ……………	73
			第 77 図	3 区31号住居……………	74
			第 78 図	3 区31号住居出土遺物……………	75

第79図	3区32号住居(1)	76	第122図	荒砥諏訪西遺跡1・2区の住居	117・118
第80図	3区32号住居(2)と出土遺物	77	第123図	荒砥諏訪西遺跡3区の住居	119・120
第81図	3区33号住居(1)	78	第124図	2区4号住居と出土遺物	121
第82図	3区33号住居(2)	79	第125図	2区6号住居と出土遺物	122
第83図	3区33号住居(3)	80	第126図	3区1号住居と出土遺物	123
第84図	3区33号住居(4)と出土遺物(1)	81	第127図	3区3号住居(1)	124
第85図	3区33号住居出土遺物(2)	82	第128図	3区3号住居(2)	125
第86図	3区33号住居出土遺物(3)	83	第129図	3区3号住居出土遺物	126
第87図	3区33号住居出土遺物(4)	84	第130図	3区11号住居(1)	127
第88図	3区35号住居と出土遺物	85	第131図	3区11号住居(2)	128・129
第89図	3区36号住居(1)	86	第132図	3区11号住居出土遺物(1)	130
第90図	3区36号住居(2)と出土遺物(1)	87	第133図	3区11号住居出土遺物(2)	131
第91図	3区36号住居出土遺物(2)	88	第134図	3区13号住居と出土遺物	132
第92図	3区36号住居出土遺物(3)	89	第135図	3区15号住居出土遺物	133
第93図	3区37号住居	90	第136図	3区15号住居(1)	134
第94図	3区38号住居と出土遺物	91	第137図	3区15号住居(2)	135
第95図	3区39号住居出土遺物	91	第138図	3区16号住居出土遺物(1)	136
第96図	3区39号住居	92	第139図	3区16号住居出土遺物(2)	137
第97図	3区40号住居(1)	93	第140図	3区16号住居(1)	138
第98図	3区40号住居(2)	94	第141図	3区16号住居(2)	139
第99図	3区40号住居(3)	95	第142図	3区19号住居(1)	140
第100図	3区40号住居出土遺物(1)	96	第143図	3区19号住居(2)・20号住居	141
第101図	3区40号住居出土遺物(2)	97	第144図	3区19号住居出土遺物	142
第102図	3区40号住居出土遺物(3)	98	第145図	3区21号住居出土遺物	143
第103図	3区40号住居出土遺物(4)	99	第146図	3区21号住居	144
第104図	3区40号住居出土遺物(5)	100	第147図	3区23号住居	145
第105図	3区40号住居出土遺物(6)	101	第148図	3区23号住居出土遺物	146
第106図	3区41号住居(1)	102	第149図	3区26号住居	147
第107図	3区41号住居(2)と出土遺物	103	第150図	3区26号住居出土遺物	148
第108図	3区42号住居(1)	104	第151図	3区27号住居	149
第109図	3区42号住居(2)	105	第152図	3区27号住居出土遺物	150
第110図	3区42号住居出土遺物	106	第153図	3区30号住居	151
第111図	3区43号住居(1)	106	第154図	3区30号住居出土遺物	152
第112図	3区43号住居(2)と出土遺物	107	第155図	3区34号住居	153
第113図	3区44号住居	108	第156図	3区45号住居	154
第114図	3区44号住居出土遺物	109	第157図	荒砥諏訪西遺跡の整穴住居	156
第115図	3区46号住居	109	第158図	荒砥諏訪西遺跡古墳時代前期の土器(1)	159
第116図	3区47号住居	110			
第117図	3区47号住居出土遺物	111	第159図	荒砥諏訪西遺跡古墳時代前期の土器(2)	161
第118図	3区48号住居	112			
第119図	3区48号住居出土遺物	113	第160図	荒砥諏訪西遺跡古墳時代後期の土器	164
第120図	3区49号住居と出土遺物	114			
第121図	3区50号住居	115			

# 表 目 次

第1表 泉宮園地整備荒砥北部地区における昭和58年度埋蔵文化財発掘調査一覧……………3	第4表 古墳時代前期の住居一覧……………116
第2表 周辺遺跡の概要……………8	第5表 古墳時代後期の住居一覧……………129
第3表 各調査区の概要……………16	第6表 古墳時代前期住居出土の土器一覧……………162

# 写 真 目 次

PL1 荒砥諏訪西遺跡の位置	3 3区4号住居全景(南西から)
PL2-1 1区全景(東から)	4 3区4号住居遺物出土状況(南西から)
2 1区1号住居全景(北から)	5 3区5号住居全景(東から)
3 1区2号住居全景(南東から)	6 3区5号住居遺物出土状況(東から)
4 2区1号住居全景(北から)	7 3区6号住居全景(北から)
5 2区2号住居全景(南西から)	8 3区6号住居遺物出土状況(西から)
6 2区2号住居遺物出土状況(北西から)	PL7-1 3区7・8号住居全景(西から)
7 2区2号住居遺物出土状況(北から)	2 3区7号住居遺物出土状況(南西から)
8 2区2号住居遺物出土状況(南西から)	3 3区7号住居遺物出土状況(西から)
PL3-1 2区3号住居全景(北から)	4 3区8号住居遺物出土状況(西から)
2 2区3号住居遺物出土状況(西から)	5 3区8号住居炉(北から)
3 2区3号住居遺物出土状況(東から)	6 3区10号住居全景(北西から)
4 2区5号住居全景(西から)	7 3区9号住居全景(北から)
5 2区5号住居遺物出土状況(東から)	8 3区9号住居炉(東から)
6 2区5号住居遺物出土状況(北東から)	PL8-1 3区12号住居全景(北東から)
7 2区7号住居全景(東から)	2 3区14号住居全景(西から)
8 2区7号住居遺物出土状況(北東から)	3 3区14号住居遺物出土状況(南西から)
PL4-1 2区8号住居全景(西から)	4 3区14号住居遺物出土状況(西から)
2 2区8号住居遺物出土状況(南西から)	5 3区21・22号住居全景(西から)
3 2区8号住居遺物出土状況(西から)	6 3区22号住居炉(南東から)
4 2区8号住居遺物出土状況(西から)	7 3区22号住居遺物出土状況(西から)
5 2区9号住居全景(西から)	8 3区22号住居遺物出土状況(北東から)
6 2区9号住居遺物出土状況(北西から)	PL9-1 3区17号住居全景(北から)
7 2区9号住居遺物出土状況(北東から)	2 3区17号住居全景(北から)
8 2区9号住居遺物出土状況(西から)	3 3区17号住居遺物出土状況(北から)
PL5-1 3区調査区北半全景(北から)	4 3区17号住居遺物出土状況(南から)
2 3区調査区南半全景(北から)	5 3区17号住居遺物出土状況(北から)
PL6-1 3区2号住居全景(西から)	6 3区17号住居遺物出土状況(東から)
2 3区2号住居炉(東から)	7 3区17号住居土層断面(西から)

	8	3区17号住居炉(西から)	3	3区40号住居遺物出土状況(南東から)
P L 10-1	1	3区24号住居全景(北から)	4	3区40号住居間仕切り溝(南から)
	2	3区24号住居貯蔵穴(西から)	5	3区40号住居遺物出土状況(北から)
	3	3区24号住居炉(南東から)	6	3区40号住居遺物出土状況(北東から)
	4	3区28号住居全景(北から)	7	3区41号住居全景(北東から)
	5	3区28号住居遺物出土状況(西から)	8	3区41号住居炉(北東から)
	6	3区28号住居遺物出土状況(北東から)	P L 16-1	3区42号住居全景(北東から)
	7	3区28号住居遺物出土状況(西から)	2	3区42号住居炉(北東から)
	8	3区28号住居炉(南東から)	3	3区42号住居遺物出土状況(北西から)
P L 11-1	1	3区25号住居全景(南東から)	4	3区46号住居全景(南東から)
	2	3区25号住居遺物出土状況(北から)	5	3区43号住居全景(東から)
	3	3区25号住居遺物出土状況(南東から)	6	3区43号住居貯蔵穴(東から)
	4	3区25号住居遺物出土状況(東から)	7	3区44号住居全景(西から)
	5	3区25号住居遺物出土状況(南東から)	8	3区44号住居貯蔵穴(北西から)
	6	3区25号住居遺物出土状況(西から)	P L 17-1	3区47号住居全景(北東から)
	7	3区25号住居炉(北東から)	2	3区47号住居遺物出土状況(東から)
	8	3区25号住居遺物出土状況(北から)	3	3区48号住居全景(東から)
P L 12-1	1	3区29号住居全景(南東から)	4	3区48号住居遺物出土状況(南東から)
	2	3区29号住居全景(北西から)	5	3区49号住居全景(西から)
	3	3区29号住居遺物出土状況(西から)	6	3区49号住居遺物出土状況(北西から)
	4	3区29号住居遺物出土状況(南東から)	7	3区50号住居全景(北西から)
	5	3区29号住居遺物出土状況(西から)	8	3区50号住居全景(北西から)
	6	3区29号住居土層断面(南西から)	P L 18-1	2区4号住居全景(西から)
	7	3区31・32号住居全景(北から)	2	2区4号住居竈(西から)
	8	3区32号住居遺物出土状況(南東から)	3	3区1号住居全景(西から)
P L 13-1	1	3区33号住居全景(東から)	4	3区1号住居竈(西から)
	2	3区33号住居全景(東から)	5	3区3号住居全景(南西から)
	3	3区33号住居遺物出土状況(東から)	6	3区3号住居竈(南西から)
	4	3区33号住居遺物出土状況(南東から)	7	3区11号住居全景(西から)
	5	3区33号住居遺物出土状況(東から)	8	3区11号住居竈(西から)
	6	3区33号住居炉(東から)	P L 19-1	3区13号住居全景(北西から)
	7	3区33号住居土層断面(南から)	2	3区16号住居全景(西から)
	8	3区33号住居柱穴4(東から)	3	3区16号住居竈(西から)
P L 14-1	1	3区36号住居全景(南東から)	4	3区16号住居遺物出土状況(北西から)
	2	3区36号住居遺物出土状況(南東から)	5	3区15号住居全景(西から)
	3	3区36号住居炉(北から)	6	3区15号住居遺物出土状況(東から)
	4	3区36号住居貯蔵穴(東から)	7	3区15号住居竈(西から)
	5	3区35号住居全景(東から)	8	3区15号住居竈構築状況(西から)
	6	3区37号住居全景(南東から)	P L 20-1	3区19号住居全景(東から)
	7	3区38号住居全景(北から)	2	3区19号住居遺物出土状況(北東から)
	8	3区39号住居全景(北西から)	3	3区19号住居遺物出土状況(西から)
P L 15-1	1	3区40号住居全景(東から)	4	3区19号住居竈(東から)
	2	3区40号住居全景(東から)	5	3区21号住居全景(西から)

	6	3区21号住居遺物出土状況（西から）	P L 33	3区28号住居出土遺物（4）
	7	3区21号住居竈（西から）	P L 34	3区28号住居出土遺物（5）
	8	3区26号住居全景（西から）	P L 35	3区29号住居出土遺物（1）
P L 21-1	1	3区23号住居全景（西から）	P L 36	3区29号住居出土遺物（2）
	2	3区23号住居竈（西から）	P L 37	3区29号住居出土遺物（3）
	3	3区27号住居全景（西から）	P L 38	3区29号住居出土遺物（4）
	4	3区27号住居竈（北西から）	P L 39	3区29号住居出土遺物（5）
	5	3区30号住居全景（東から）	P L 40	3区31・32号住居出土遺物、33号住居 出土遺物（1）
	6	3区30号住居遺物出土状況（南東から）		
	7	3区34号住居全景（西から）	P L 41	3区33号住居出土遺物（2）
	8	3区45号住居全景（北東から）	P L 42	3区36号住居出土遺物（1）
P L 22		1区1号住居出土遺物、2区2・3号住居 出土遺物、5号住居出土遺物（1）	P L 43	3区36号住居出土遺物（2）
P L 23		2区5号住居出土遺物（2）、7～9号住居 出土遺物	P L 44	3区40号住居出土遺物（1）
P L 24		3区2・4～7号住居出土遺物	P L 45	3区40号住居出土遺物（2）
P L 25		3区8・14号住居出土遺物、17号住居 出土遺物（1）	P L 46	3区40号住居出土遺物（3）
P L 26		3区17号住居出土遺物（2）	P L 47	3区40号住居出土遺物（4）、41～43号住居 出土遺物
P L 27		3区17号住居出土遺物（3）	P L 48	3区44・47～49号住居出土遺物
P L 28		3区17号住居出土遺物（4）	P L 49	古墳時代前期土器の特徴
P L 29		3区22・24号住居出土遺物、25号住居 出土遺物（1）	P L 50	3区1・3号住居出土遺物、11号住居 出土遺物（1）
P L 30		3区25号住居出土遺物（2）、28号住居 出土遺物（1）	P L 51	3区11号住居出土遺物（2）
P L 31		3区28号住居出土遺物（2）	P L 52	3区15・16号住居出土遺物（1）
P L 32		3区28号住居出土遺物（3）	P L 53	3区16号住居出土遺物（2）、19号住居 出土遺物
			P L 54	3区23・26・27・30号住居出土遺物



## 第1章 調査に至る経過

## 第1節 県営圃場整備事業と発掘調査の経過

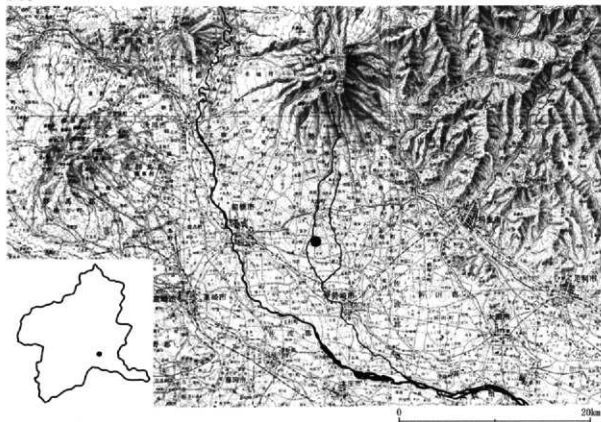
ここに報告する荒砥諏訪西遺跡は、群馬県前橋市の東南部、旧荒砥村地域で実施された県営圃場整備事業荒砥北部地区に伴って発掘調査された遺跡の一つである（第1図）。

荒砥北部地区において圃場整備事業が実施されたのは1981（昭和56）年から1991（平成3）年にかけてのことであり、その範囲は、旧荒砥村地域の内、荒口町、荒子町、泉沢町、下大屋町、西大室町、二之宮町にまたがる地域で、総事業量の対象面積は821haに及んだ。

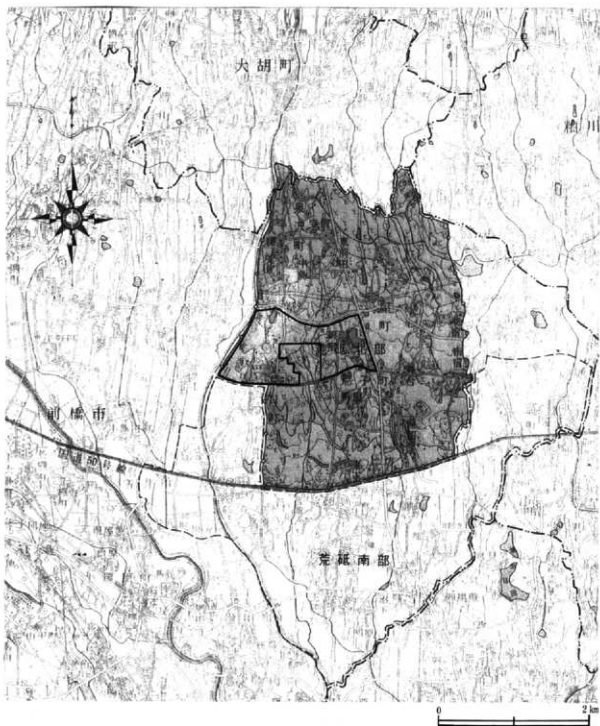
圃場整備事業の対象地内には多数の古墳群や女堀遺跡をはじめとした周知の遺跡が多数存在し、古くから考古学的に著名であり、注目されてきた地域である。

荒砥北部地区の圃場整備事業が実施されるにあたっては、群馬県農政部と群馬県教育委員会との間で、文化財の保護を前提とした協議がなされた。その結果、埋蔵文化財の包蔵地が圃場整備事業の対象区域から除外することが不可能であり、かつ、事業の実施により埋蔵文化財が破壊される区域においては、事前に発掘調査を実施することとなった。これらの地域における発掘調査は、原則として、新たに計画される道・水路や低・台地の切土部分を対象とすることで合意された。

発掘調査は1981（昭和56）年度から1984（昭和59）年度まで群馬県埋蔵文化財調査事業団が対応してきたが、調査量の増加に伴い、1982（昭和57）年度以降の発掘調査は事業団と群馬県教育委員会が分担し、1984（昭和59）年度以降の調査は、群馬県教育委員会と荒砥北部遺跡群調査会に引き継がれ、1991



第1図 荒砥諏訪西遺跡の位置



第2図 県営圃場整備事業荒砥北部地区と昭和58年度工事区

(平成3)年度で全て終了した。

荒砥課訪西遺跡を調査した昭和58年度は、県営圃場整備事業荒砥北部地区の第4工区、荒口町・荒子町地内が事業対象地域であった(第2図)。この年は、第1表に記したとおり、荒砥課訪西遺跡のほか荒砥宮田遺跡、荒砥課訪遺跡、課訪遺跡、課訪西

遺跡、柳久保遺跡、川籠菅戸遺跡、堤東遺跡が発掘調査されている。本書で報告する荒砥課訪西遺跡は古墳時代から中・近世までの複合集落遺跡である。調査は、切り土部分・新設の道水部分を対象とした6箇所(調査区)で、その面積は、試掘調査分の5,700㎡を含め、36,620㎡で実施されている。

群馬県埋蔵文化財調査事業団は調査をした8遺跡について群馬県教育委員会の委託を受け1993(平成5)年度から整理事業を実施し、1999(平成11)年度までに5遺跡7冊の発掘調査報告書を刊行している。本年度はその第8年次にあたる。

## 第2節 調査に至る経緯

調査を開始するに先立ち、工事行程との調整を図り、発掘調査区とその対象面積を確定することを目的に分布調査を実施した。

分布調査は5月から7月に調査担当3名が第4工区全域を踏査し、遺物分布の地点、密集度、種類、時期などを記録した。

次に分布調査の成果をもとに試掘調査が実施された。荒砥川に面したA・B・C工事対象地では広範囲にわたり古墳時代の土器片の散布が見られ、集落の存在が充分想定された。このため、後に荒砥諏訪西遺跡の2区、3区として調査を実施した地点は切り土工事対象地であったので、20mに1箇所の割合で東西方向に平行するトレンチを配置し、大型掘削重機による試掘調査を実施した。調査にあたっては遺構および遺物包含層の有無、遺構確認面の深さ、軽石を主とした土層の堆積状況を把握、記録した。

その結果、表土下に堅穴住居あるいは溝、土坑などの諸遺構、あるいは浅間B軽石の堆積が確認された。また、遺構未確認部分については調査対象地か

ら除外した。

これらの事前作業を基礎資料として前橋土地改良事務所と協議を重ねた。結果、当初予定していたA・B・C工事区内の全ての調査対象地域について事業団の体制だけでは終了できない状況が生じた。そこで、A工事区については群馬県教育委員会文化財保護課が担当し、B・C工事については事業団が対応した。1983(昭和58)年度の調査担当は第1表の通りである。

最後に遺跡名の命名について記したい。

発掘対象地区は圃場整備以前の番地で、前橋市荒口町字諏訪西899番地を中心としている。調査時の遺跡名は遺跡地のある荒口町の旧村名である「荒砥(あらと)」に字名である「諏訪西(すわにし)」を付して「荒砥諏訪西遺跡」とした。このため発見届をはじめとした事業団取り扱い文書など一切において前記遺跡名で表記してきた。その後、同一遺跡と考えられる北側調査区の調査を担当した群馬県教育委員会は1998年刊行の報告書で当該調査区について「諏訪西遺跡」として報告している。両遺跡は立地・遺構の内容をみても同一の遺跡名と考えられる。実際は、同一の遺跡名でA地点、B地点とともすべきであろうが、「荒砥諏訪西遺跡」としての遺跡名が周知され20年近くになり、多くの調査報告書や刊行物に同名で記載が行われている事を重視し、表記遺跡名で正式報告を行うこととする。

第1表 県営圃場整備荒砥北部地区における昭和58年度埋蔵文化財発掘調査一覧

工区	遺跡名	調査主体	調査担当者	面積	期間
7-1区	荒砥荒子遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・相京健史・中沢 哲 小島敦子・菊池 実・斉藤利昭	9,800㎡ 前年度含	1983(昭和58)年4月1日 ～1983(昭和58)年5月10日
4区	荒砥宮田遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・藤巻幸男・小島敦子 徳江秀夫・斉藤利昭・細野雅男 下城 正・相京健史	29,265㎡	1983(昭和58)年8月23日 ～1984(昭和59)年3月24日
4区	荒砥諏訪西遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・藤巻幸男・小島敦子 徳江秀夫・斉藤利昭	36,620㎡	1983(昭和58)年8月23日 ～1984(昭和59)年3月24日
4区	荒砥諏訪西遺跡	群馬県埋蔵文化財調査事業団	鹿田雄三・藤巻幸男・小島敦子 徳江秀夫・斉藤利昭	1,930㎡	1983(昭和58)年8月23日 ～1984(昭和59)年3月24日
4区	諏訪西遺跡 諏訪西遺跡	群馬県教育委員会 文化財保護課	井上唯雄・徳江 紀・神保信史 西田健彦・松田 猛・調査補助 員松村和男	9,300㎡	1983(昭和58)年12月1日 ～1984(昭和59)年2月28日
4区	柳久保遺跡	群馬県教育委員会 文化財保護課	徳江 紀・神保信史・西田健彦 松田 猛	1,200㎡	1983(昭和58)年12月1日 ～1984(昭和59)年2月28日
4区	川籠吉野遺跡 進車遺跡	群馬県教育委員会 文化財保護課	徳江 紀・神保信史・西田健彦 松田 猛・調査補助員松村和男	10,500㎡	1983(昭和58)年12月1日 ～1984(昭和59)年2月28日

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の位置と地形

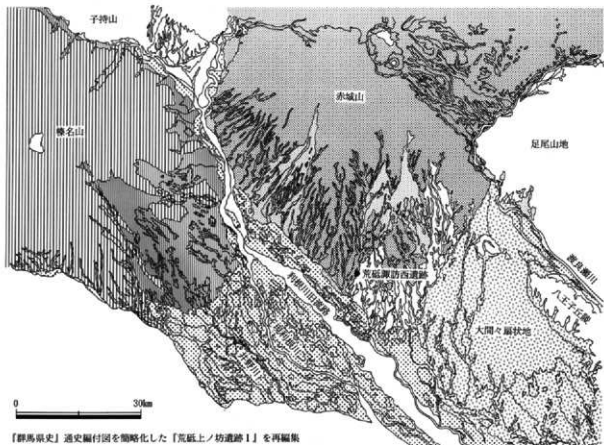
荒砥諏訪西遺跡は、群馬県前橋市の東南部、荒口町に位置し、JR両毛線の駒形駅から北北東に約3.7kmの距離にある。

本遺跡は、群馬県の泉央部東側に位置する赤城山南麓に形成された火山麓扇状地端部にあたる。山麓を流下する荒砥川、神沢川、宮川、江龍川などの河川や台地端部からの湧水により火山麓扇状地に樹枝状の開析が進み、台地と沖積地が複雑に入り込む地形が形成されている。特に荒砥北部地区では帯状の沖積地が発達し、起伏に富んだ地形が広がっている。荒砥川以西は同じ赤城山の山体でも基底に大胡火砕流が堆積する面である（第3図）。

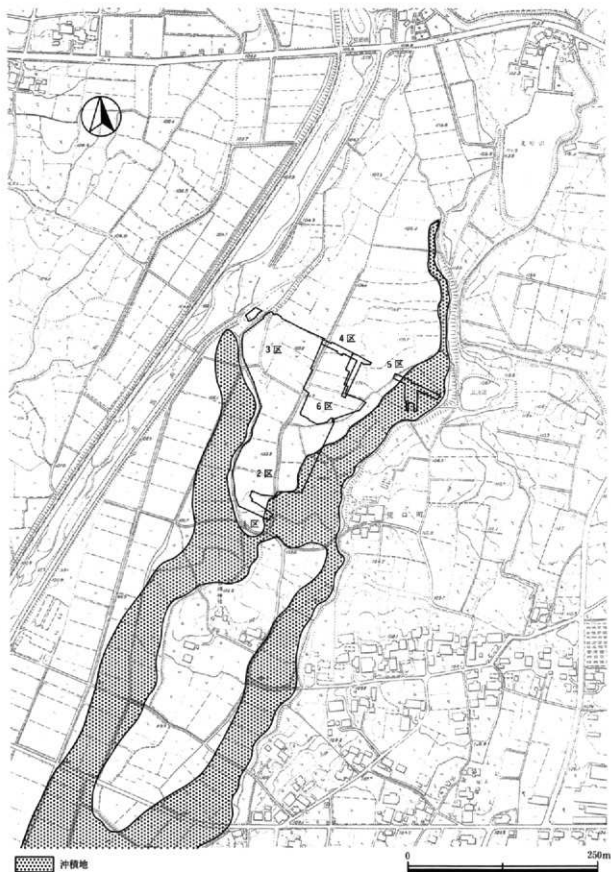
本遺跡周辺の基盤層は赤城山起源の泥流層である。

地表面はローム台地の原形面、砂壤土からなる微高地、沖積地に分類される。ローム台地に付随するように存在する微高地は、縄文時代早期から前期にかけて、赤城山の山体が降雨災害等によって崩壊し、河川の運搬作用の結果、流速が衰える山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。

また、本遺跡は利根川の支流、荒砥川の左岸に位置する。遺跡はすぐ南側に位置する荒砥宮田遺跡が半島状の延びたローム台地上に位置するのに対し、二次堆積の砂壤土の堆積により形成された微高地にある。標高は102~104mを測り、南側に向かって緩やかに傾斜している。今回の調査区は微高地の南端から中程にあたる。遺跡地の東西両縁には沖積地が延びている（第4図）。



第3図 群馬県中央部の地形と荒砥諏訪西遺跡



第4図 粟碓諏訪西遺跡周辺の地形

## 第2節 周辺の遺跡

ここでは荒砥諏訪西遺跡で検出された遺構・遺物を理解するために古墳時代に重点をおき、周辺の歴史的環境についてふれておきたい。概観する範囲は、荒砥地域とこれに隣接する大胡町南部、荒砥川右岸の柱置地域の一部を含めるが、荒砥川以西については現時点では地域内の遺跡分布の在り方をを正しく反映させるほどの調査事例がない(第5図)。

弥生時代中期後半の住居は、荒砥前原遺跡、荒砥島原遺跡、頭無遺跡、荒砥北三木堂遺跡、荒口前原遺跡の5遺跡で検出されている。後期になると、荒砥前原遺跡、鶴谷遺跡群B区、梅木遺跡、北山遺跡で住居の検出が報告されている。これら弥生時代の遺跡は、沖積地を臨む台地縁辺や微高地上に立地している。この時期には居住域に接した沖積地の一部を生産域とする小規模な集落が形成されていたと考えられる(第6図)。

古墳時代初頭から前期の集落は、弥生時代後期の遺跡分布からは一転、きわめて濃密な分布状況を示す。集落遺跡の分布は荒砥地域のほぼ全域におよんでいる。その分布は大胡町域にもみられ茂木山神II遺跡、上ノ山遺跡、中宮閑遺跡などが調査されている。それらの立地は、小河川の流域ごとにはほぼ一定の間隔をおいて集落が形成されている。これらは、小河川に沿って、あるいは小河川の合流点を臨む台地縁辺や沖積地の谷頭周辺に立地している。小河川の流水や谷頭からの湧水に依拠して生産域を維持していたと思われる。

本遺跡の周辺では近接して、荒砥宮田遺跡(集落、方形周溝墓1基)、諏訪遺跡(方形周溝墓群)、荒砥諏訪西遺跡(方形周溝墓群)が分布する。上流域に北原遺跡、丸山遺跡が、下流域に荒砥前田II遺跡、荒砥北原遺跡が、対岸には宮下遺跡があり、まとまった数の住居が検出されている。

この他、多数の住居が検出された遺跡としては、江籠川上流域では熊の穴・熊の穴II遺跡、大道遺跡、東原A・B遺跡、村主遺跡、明神山遺跡、小船荷遺

跡などがある。江籠川下流域には荒砥上ノ坊遺跡がある。宮川上流域では柳久保遺跡がある。荒砥川右岸では宮下遺跡が大規模集落である。大泉坊川流域には富田西原遺跡や富田高石遺跡がある。

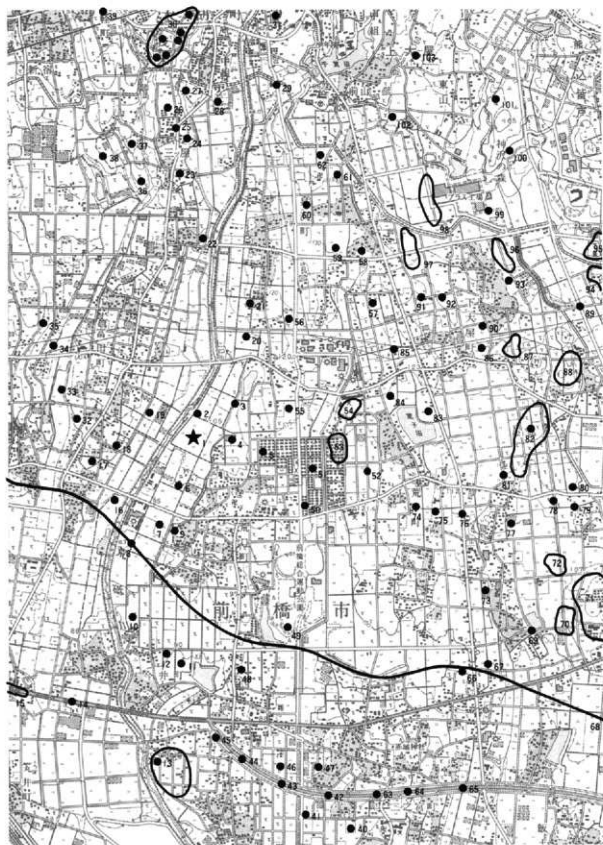
二之宮千足遺跡や二之宮宮下東遺跡では浅間C軽石に埋没した水田が検出された。また、荒砥天之宮遺跡G区や荒砥宮川遺跡の微高地上では浅間C軽石を鋤込んだ畠が確認されている。荒砥上ノ坊遺跡では浅間C軽石に埋没した畠が検出されている。

この時期の集落には近接して周溝墓が築造される事例が多い。前述の諏訪遺跡や荒砥諏訪遺跡のように居住域とはその占地を区別し、群在する状況が普遍的に見られる。その中、上綱引遺跡1基、阿久山遺跡1基、堤東遺跡1基、中山A遺跡1基、東原B遺跡4基の合計8基、前方後方形周溝墓が検出されている。この他、荒砥川以西の富田高石遺跡でも前方後方形周溝墓1基が検出されている。

上記のように、荒砥地域における前期の集落や周溝墓の検出例は、他地域に対して遜色のないものではないが現在のところ前期古墳の存在は知られていない。前橋天神山古墳や華蔵寺裏山古墳が本地域を包括しえる地点にある主要古墳といえようか。本地域における前方後円墳の出現は5世紀後半の今井神社古墳の築造を待たなければならない。

このような遺跡分布傾向に対し、この時期の土器は複雑な様相を呈している。弥生時代後期の赤井戸式土器や樽式土器の系譜を引く文様施文の土器群はこの時期まで残存し、土師器と共存する。S字状口縁甕をはじめ北陸や南関東など他地域の土器の影響を受けた外来系の土器が荒砥上ノ坊遺跡や荒砥前原遺跡から出土している。本遺跡においても甕はS字状口縁台甕・単純口縁台甕・折り返し口縁台付甕、平底甕が共存している。

前期の集落のうちの多くは中・後期に継続し、「伝統集落」となる。中・後期になると前期からの集落は占地の範囲を多少変えながら継続する。諏訪西遺跡も群馬県教育委員会調査部分で居住の継続性が認められている。それとともに新たな地点に「第一次



第5図 北磁探訪西通駅周辺の遺跡分布



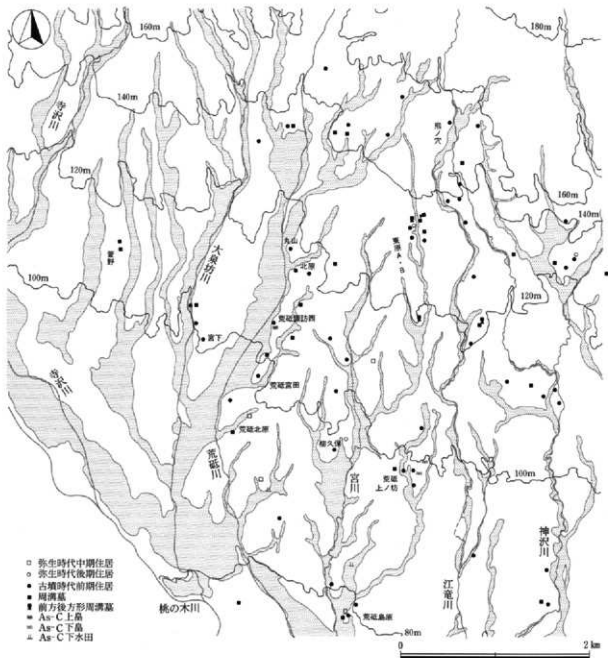
第2表 周辺遺跡の概要

No.	遺跡名	弥生		古墳		奈良		平安		中世		近世	その他の遺構	遺跡の概要	
		中後	前	前	中	後	住	住	住	住	世				世
1	瓦葺諏訪西遺跡		○	○	○	○							溝、土坑	本報告書の遺跡 瓦葺諏訪西遺跡に北接 泉教委調査方形周溝墓13基 瓦葺諏訪西遺跡東側台地上 前橋市教委調査	
2	諏訪西遺跡		○	○	○								時期不明古墳2		
3	諏訪遺跡		□										As-B以前の溝		
4	瓦葺諏訪遺跡		□										As-B以前の溝		
5	諏訪遺跡												As-B以前の溝		
6	瓦葺宮田遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	縄文前期住居		
7	瓦葺前田遺跡												□		
8	瓦葺前田II遺跡		○	○									○		
9	瓦口前原遺跡	○											○		
10	瓦葺北原遺跡		□	○	○								縄文前・中期住居、 As-B土畚 中世墓坑		
11	瓦葺北三木堂遺跡		○										○		
12	瓦葺北三木堂II遺跡		○										○		
13	今井神社古墳群			○	○								○		今井神社古墳他、古墳3調査 古墳時代中期の方形区画溝
14	今井白山遺跡		○										○		
15	瓦井八日市遺跡			○	○								○		
16	富田稲田遺跡												□		
17	宮下遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	富田宮下遺跡とほぼ同一遺跡 古墳11	
18	東原遺跡												○		
19	おとうか山古墳			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
20	北原遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
21	丸山遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
22	稲荷前遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
23	山神遺跡												○		
24	小林遺跡												○		
25	茂木山神II遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
26	諏訪東遺跡												○		
27	西小路遺跡												○		
28	上ノ山遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	古墳7	
29	下宮開遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
30	天神風呂遺跡群			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	縄文前期住居 旧石礮 平安復連工房跡、竈跡 古墳住居3 縄文中期住居 縄文中期住居 縄文中期住居 古墳7 縄文前・後期住居	
31	中宮開遺跡		○										○		
32	富田西原遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
33	富田高石遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
34	富田榊田遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
35	富田下大日遺跡												○		
36	稲荷窪A地点遺跡												○		
37	稲荷窪B地点遺跡												○		
38	大日遺跡												○		
39	茂木大道下遺跡												○		
40	瓦葺天之宮遺跡			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	畑井 古代小殿治、中世墓坑 奈良源井、特殊井戸 平安小殿治、中・近世 道路踏込遺跡	
41	瓦葺宮川遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
42	二之宮千足遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
43	二之宮洗橋遺跡												○		
44	二之宮各地遺跡												○		
45	今井道上道下遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
46	瓦葺洗橋遺跡												○		
47	瓦葺宮西遺跡												○		
48	瓦葺大日塚遺跡												○		
49	鶴ヶ谷遺跡群	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
50	下鶴ヶ谷遺跡												○		
51	柳久保遺跡群		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	中世墳墓 「竈 縄文前期住居、古代炭 旧石礮、縄文早期 旧石礮	
52	須無遺跡		○										○		
53	中鶴ヶ谷遺跡												○		
54	瓦子小学校校庭遺跡												○		



No	遺跡名	弥生 中後	古墳			奈 住	平 住	中 世	近 世	その他の遺構	遺跡の概要
			前 住墓生	中 住墓生	後 住墓生						
55	大久保遺跡										
56	新山遺跡		□	○	○	○	○				方形周溝墓2、古墳3
57	向原遺跡				○	○	○				
58	東原西遺跡			○							
59	東前田北遺跡			○					中・近世塚		
60	寺前遺跡			○							
61	寺東遺跡			○							
62	谷津遺跡			○	○			○	縄文中期住居		方形周溝墓2、泉沢谷津遺跡 と同一遺跡
63	二之宮宮下西遺跡				○	○	○	○	中・近世墓坑		
64	二之宮宮下東遺跡		□		○	○	○	○			
65	二之宮宮東遺跡						○	○	古代小鍛冶		Hi-FA下水田以降7期の水 田
66	荒砥上ノ坊遺跡		□	○	○	○	○		縄文前期住居、As-B 上島		方形周溝墓4
67	元屋敷遺跡							○	古墳住居16		
68	女堀							○	古代未完成用水路		
69	麻沼遺跡							○			
70	上野沼遺跡								弥生住居1、古墳住居 15、古墳1		
71	天神山古墳群							○			古墳39を調査
72	西大室丸山遺跡							○			古墳時代巨石祭祀
73	瓦紙先子遺跡			○				○			古墳時代中期居宅
74	荒砥中屋敷I・II遺跡		○		○			○	平安小鍛冶、As-B以 前の溝		
75	荒砥下押切I・II遺跡				○	○		○			
76	舞台西遺跡							○			古墳4、埴輪円筒棺1、甕棺 1
77	舞台遺跡			○	○						舞台1号墳を含む古墳3
78	稻荷山II遺跡							○			
79	地田栗田遺跡		○	○	○	○					
80	富士山I・II遺跡				○	○		○	近世塚		直径38mの円墳
81	下境I・II遺跡		○	○	○	○		○	中世寺院、中世墓		古墳22調査
82	阿久山古墳群				○				平安小鍛冶		方形周溝墓2(前方後方形1)
83	堤東遺跡		□					○			
84	川籠告戸遺跡		西								
85	上西原遺跡							○	基壇建物、掘立柱建物		勢多郡衙と付属寺院と推定さ れる遺跡
86	北田下遺跡		○					○			
87	明神山遺跡		○								
88	伊勢山古墳群		○		○						伊勢山古墳を含む古墳16
89	水口山遺跡		□		○						方形周溝墓2、古墳11
90	中畑遺跡							○			
91	村主遺跡		○		○			○			
92	中山A・B遺跡		○		○						方形周溝墓2(前方後方形1)
93	阿弥陀井戸遺跡		○								
94	大稻荷遺跡								古墳住居10		
95	小稻荷遺跡		□		○						
96	山王遺跡		○					○			
97	東原A・B遺跡		○		○						方形周溝墓17(前方後方形4)
98	上諏訪山A・B遺跡							○			
99	大道遺跡		○		○						
100	上横俣遺跡		□		○				「縄 文後期住居・配石遺 跡」		方形周溝墓6、古墳27
101	熊の穴・熊の穴II遺跡		○		○			○	平安史跡		古墳17
102	上大屋下組遺跡		○		○			○	旧石器、縄文前期住居		
103	上大屋天王山遺跡		○					○	縄文前期土坑		

住は住居、墓は墓域、生は生産域を表す。古墳の項、墓の□は方形周溝墓、西は円形周溝墓、○は古墳を、生の○はAs-C下の島を表す。  
平安の項、生の□はAs-B下水田、西は818年洪水層下の水田、○は島を表す。



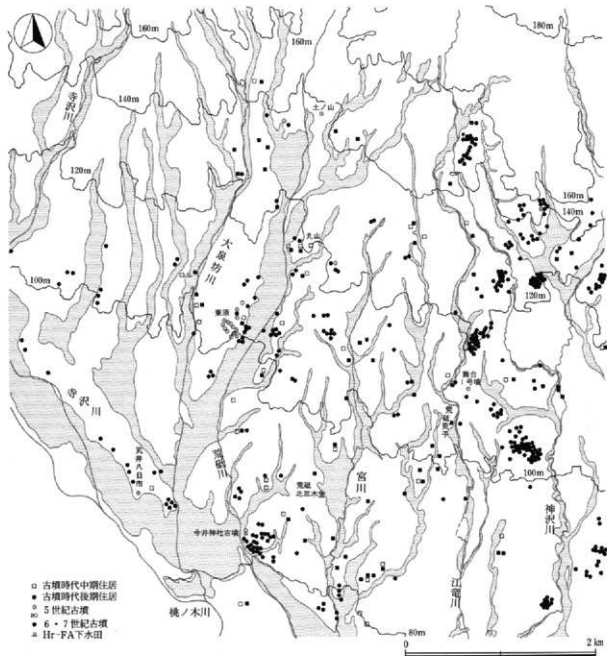
第6図 弥生時代から古墳時代前期の遺跡分布

新開集落」の形成がなされる。荒砥天之宮遺跡や荒砥北三木堂遺跡などに代表される集落である。こういった集落変遷の背景には従来からの河川灌漑の整備とともに荒砥天之宮遺跡で検出された稲井の掘削に見られる湧水を人為的、かつ積極的に利用するといった灌漑土木技術の導入とそれに支えられた生産域の拡大があったと考えられる。

中期の集落としては宮川上流域に丸山遺跡、北原

遺跡、柳久保遺跡群が、荒砥川流域に荒砥宮田遺跡、荒砥前田Ⅱ遺跡がある。これらは前期から継続する遺跡である。宮川下流域では荒砥北三木堂遺跡や荒砥天之宮遺跡があるが、これらは5世紀後半になってから集落の形成が開始された遺跡である。

また、荒砥荒子遺跡や梅木遺跡、丸山遺跡で検出された方形区画遺構は、5世紀代、首長層の居宅と考えられるが、このような遺構の存在は古墳に見ら



第7図 古墳時代中・後期の遺跡分布

れる被葬者の多層性が居住施設にも現れたものと思われる。

荒砥諏訪西遺跡では6世紀の集落を検出しているが本遺跡の周辺で同時期の集落が形成された遺跡としては荒砥宮田遺跡、荒砥北原遺跡、柳久保遺跡群、大久保遺跡、北原遺跡、丸山遺跡、新山遺跡などをあげることができる。古墳時代前期の集落は各河川の上流域に多く展開していたものが、中期になると上流域では減少、下流域の増加がみられ、居住域の

範囲も拡大しているとの指摘がある。その傾向は6・7世紀になるとさらに強くなるという。宮川下流では荒砥洗橋遺跡、荒砥宮西遺跡、二之宮谷地遺跡などで6世紀になり集落の形成が開始される。

古墳の動向をみると、6世紀になり、前二子古墳に代表されるよう前方後円墳が数基ずつ築造されるようになる。小円墳は5世紀後半に群集墳の形成が始まり、6世紀、7世紀と小地域ごとに立地、形成内容を変化させながら群集化が進行している。

## 第3章 発掘調査の方法と経過

### 第1節 発掘調査の方法

#### (1) グリッドの設定

調査の実施にあたっては第8図に図示したよう荒砥宮田遺跡を含めた調査区全体を一辺100mの方眼でカバーし、南側から北側に向かってA区、B区と順次R'区まで合計19区画の大グリッドを設定した。今回報告の荒砥諏訪西遺跡にかかわる区画はKからR'区に相当する。

大グリッド設定の基点には荒砥宮田遺跡1区内にあった圃場整備の工事用杭を利用した。南北基本線には新設道路支道34号の西縁を、これに直交する東西基本線には耕道25-1の北縁を充てている。南北基本線と国家座標の南北ラインとの偏角は東に約26度である。

大グリッドの中には一辺5mの方眼を設定、これを小グリッドとした。

グリッドの呼称は、大グリッドを独立した単位とし、北西隅に基点を設定し、その点をa-0とし、小グリッドは東西軸にアラビア数字を付し、西側から0から19まで、南北軸にアルファベットを付し、北側からaからtまでとし、第8図の凡例のように大グリッド（アルファベット）小グリッド（アラビア数字）でBa-0のように呼称した。

#### (2) 遺構・遺物の記録

各整穴住居については20分の1の平面図を平板測量によって作成した。溝・土坑はグリッド杭を利用して調査区を割り付け20分の1の平面図を作成した。各遺構の埋没状況については土層確認を行い、適時断面図を作成した。

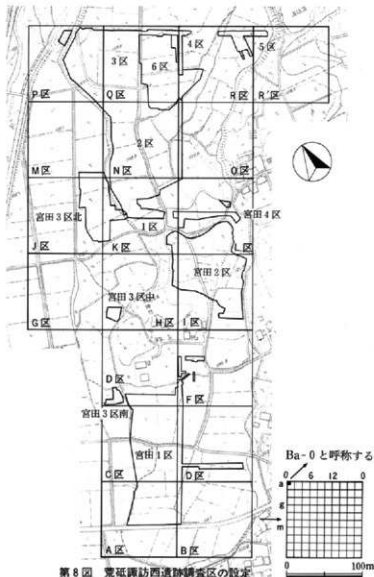
遺構写真は35mmモノクロフィルムとカ

ラスライドフィルムおよび、ブローニーモノクロフィルムを用いて地上撮影した。

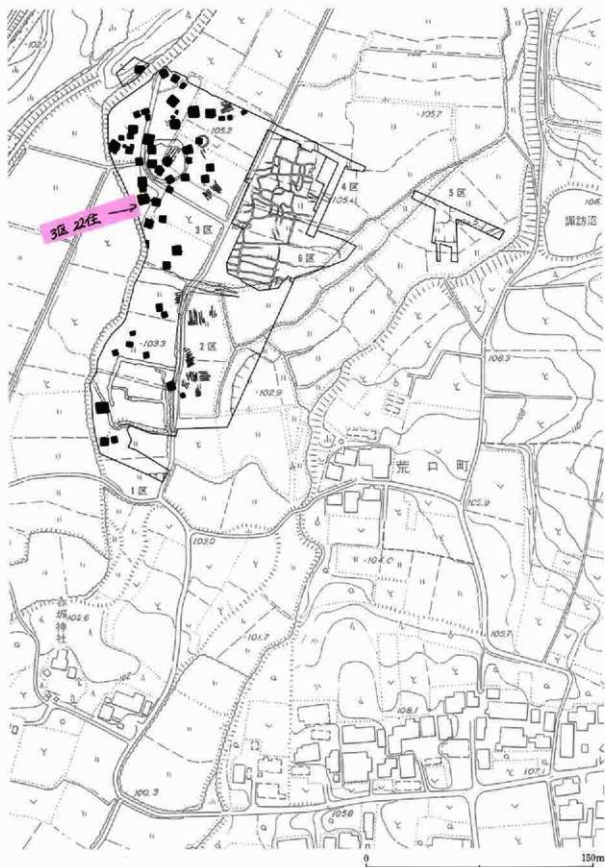
### 第2節 調査の経過

1983（昭和58）年度の荒砥北部圃場整備事業に係わる埋蔵文化財調査は、荒口町、荒子町にわたる第4工区が対象となった。

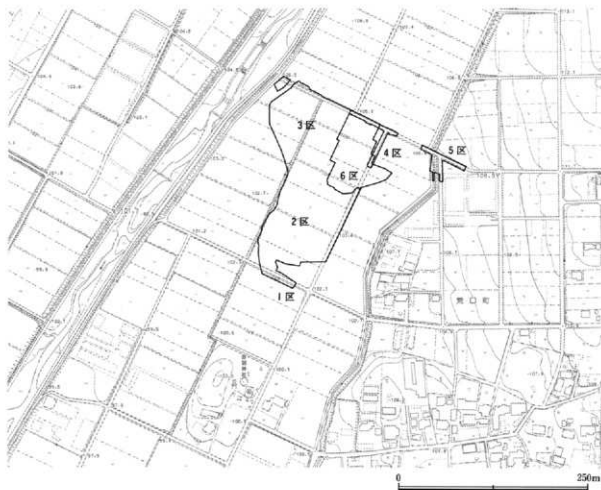
前年度の実態を踏まえ、本格的な調査実施前に、



第8図 荒砥諏訪西遺跡調査区の設定



第9図 発掘調査西遺跡調査区的位置（調査時）



第10図 荒砥諏訪西遺跡調査区の位置（現状）

分布調査、試掘調査を計画・実施し、工事行程と埋蔵文化財調査の進捗が整合性を有し、双方が円滑に進行するよう協議が重ねられたが、圃場整備対象面積が95.5haと膨大であったことなどの諸要因が重なり、充分な環境の中での調査実施には至らなかった。

なお、経過は、同時進行で調査を実施した荒砥宮田遺跡、荒砥諏訪遺跡（第2分冊で報告予定）とあわせて記述する。

5月11～17日 前橋土地改良事務所から提示された施工計画に基づき、第4工区の圃場整備対象地内全域の分布調査を実施する。

5月下旬～7月上旬 分布調査の成果を整理、報告する。土地改良事務所、荒砥北部土地改良区、群馬県教育委員会文化財保護課、事業団で調整を重ねる。先行して試掘調査の実施を確認。

7月8日 調査事務所設置。調査器材の搬入。調査担当3名で対応。

7月13～8月2日 調査区確定のため、第4工区A・B・C工事対象地の試掘調査実施。

8月2日～8月15日 試掘調査の記録・成果、整理。その結果、A・B・C工事対象地における要調査対象面積は、約13万7千㎡が

見込まれた。

8月23日 A工事（荒砥宮田遺跡）表土掘削・除去作業開始。合わせて、工事区南端（荒砥宮田遺跡1区）から調査開始。

9月19日 表土掘削除去作業、宮田遺跡2区へ。

9月29日 今年度、事業団はA・B工事対象地の調査に対応することが決定される。要調査対象面積は約7万㎡。

10月1日 B工事対象地（荒砥諏訪西遺跡）表土掘削・除去作業開始。

10月6日 宮田遺跡1区水田部分調査開始。2区の遺構確認作業開始。調査担当5名の体制に。

10月8日 宮田遺跡3区の調査開始。

10月21日 諏訪西遺跡、調査開始。2区・3区で鳥を抽出。以後、11月24日まで宮田遺跡と諏訪西遺跡を併行して調査する。

10月24日 2区住居・溝・土坑等調査。

10月27日 2区と3区の調査区境界にあてた大溝調査。

10月28日 荒砥諏訪遺跡、試掘調査開始。以後以後、3遺跡を併行して調査する。

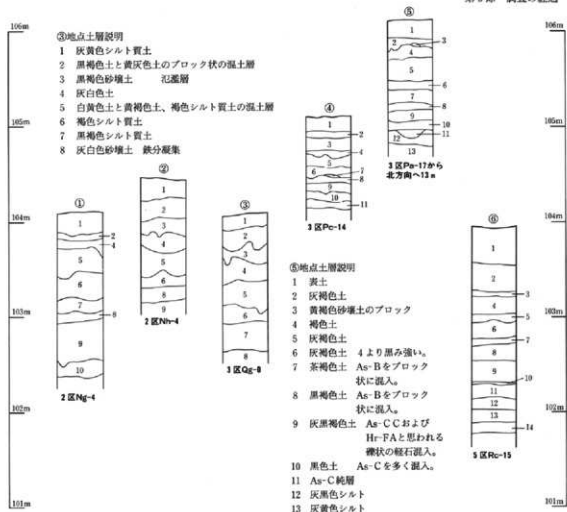
11月5日 諏訪西遺跡6区、As・B下水田の調査開始。11月30日まで継続。

11月9日 諏訪西遺跡、1区調査。

12月9日 諏訪西遺跡、2区Sライン以南までの調査終了。土地改良工事側に引き渡し。

12月12日 諏訪西遺跡3区、4区遺構確認作業。引き続き調査継続。

12月15日 諏訪西遺跡5区、諏訪遺跡調査終了。



第11図 荒延諏訪西遺跡の基本土層

12月23日 土地改良工事の行程に間に合わせるため、調査体制を増強。宮田遺跡1区を別班で対応開始。1月以降は、担当者8名の体制に。

1月10日 諏訪西遺跡4区、調査終了。

1月27日 諏訪西遺跡3区、Jライン以南の調査終了。

1月28日 宮田遺跡2区、調査再開。

2月3日 諏訪西区の調査、全て終了。以後、調査体制の全てを

宮田遺跡1区の調査に投入する。

2月13日 宮田遺跡1区、調査終了。宮田遺跡の調査を全て終了する。

2月21日 調査器材の搬出、調査事務所の撤収。

2月14日～3月24日 記録図面・写真整理、土器洗浄・注記等の整理作業を実施。

3月24日 記録類、出土遺物、事業団へ搬出。

## 第3節 遺跡の基本土層

第2章でも記したように調査区域はその大半がロームの二次堆積である砂壤土性の微高地上にあたるが、1・2区の東辺部および5区は台地縁道を南流する湖水起源の無名河川によって形成されたと考えられる沖積地に分類できる。微高地の標高は102から104m、沖積地は1区で102m、5区で102mであった。

微高地 調査時点での地目は畠・桑園・水田であった。耕作による土壌攪乱は下位におよび、遺構の確認は6区のAs-B下から検出した水田面を除き各調査区とも古墳時代から近世にいたるまで、黄褐色土上面一面であった。各調査区における土層の状況は第11図中の説明のとおりであるが、①・②地点の5・6層、③の3層では泥炭層が堆積、その下位に縄文土器包含層である灰白色土と黒褐色土の交互層（④⑤地点の8層）が堆積していた。

沖積地 調査時の地目は水田であった。

土層の堆積は⑥地点の土層柱のようである。テフラは上層から浅間A軽石、FA、浅間C軽石の3層が確認できた。いずれもその下に黒色粘質土が堆積していたが水田・畠の存在は確認できなかった。

## 第4節 調査区の概要

今回の発掘調査によって古墳時代から中・近世にかけての遺構が検出された。調査面積はトレンチ調査分の5,700㎡を含め36,620㎡である。

竪穴住居は1から3区の微高地西側を中心に古墳時代前期43軒、後期17軒の合計60軒を検出した。この他の遺構として掘立柱建物1棟、井戸29基、墓坑2基、土坑517基、溝89条、円形周溝1基が検出され

た（調査区別の数量は第3表参照）。これらの遺構については次年度以降整理作業が予定されているが、石造物や石製品などの出土があることからその大半は中・近世の所産と考えられる。畠は2・3区の11地点で畝間の掘り込みと考えられるサク状遺構を検出した。層層は掘り込みの埋没土中に浅間C軽石を含むことから古墳時代前期の住居群との関連が考えられる。また、微高地の東側部分、6区では浅間B軽石の直下から水田面と畦畔を検出した。5区では土層中に浅間B軽石、Hr-FA、浅間C軽石がそれぞれ堆積する埋没谷および旧河道を検出した。この他に遺構を伴わない遺物として縄文土器・石器が出土している。

調査で出土した資料は60×37×15cmの遺物収納箱に59箱、68×48×34cmの収納箱に9箱、57×35×30cmの収納箱に5箱である。

本報告の中で資料化し、本文中に掲載した資料は658点である。資料の内訳は土器635点、鉄器1点、石器22点（うち3点は縄文時代の所産）である。

第3表 各調査区の概要

区	竪穴住居	掘立柱建物	井戸	土坑	溝	畠	水田	古墳	その他
1区	2	0	0	33	5	0		0	As-B堆積38㎡
2区	9	0	15	249	26	7地点		0	As-B堆積272㎡
3区	49	1	14	233	41	4地点		3	円形周溝1、墓坑2、As-C下ビット群
4区	0	0	0	2	6	0		0	
5区	0	0	0	0	0	0		0	As-B埋没谷、旧河道
6区	0	0	0	0	11	0	As-B下 5,060㎡	0	
合計	60	1	29	517	89	11地点 720㎡	As-B下 5,060㎡	3	



## 第4章 検出した遺構と遺物

## 第1節 古墳時代前期の住居

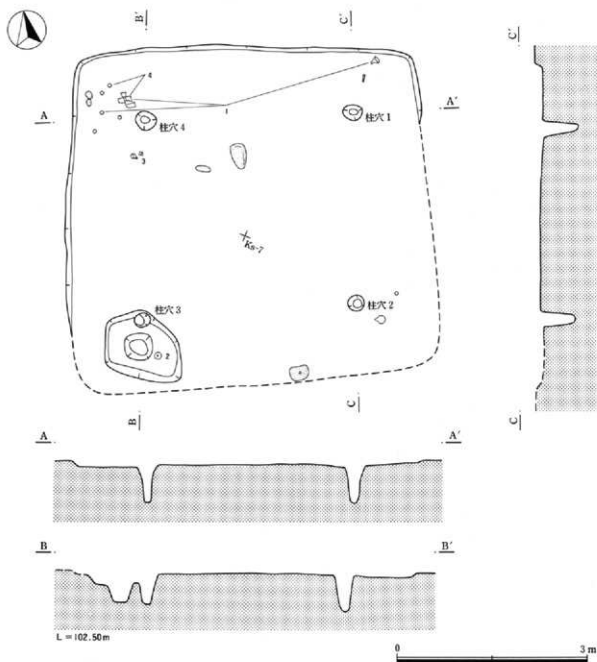
I区 I号住居 (第12・13図 P.L.2・22)

位置 Ki-j-6・7グリッド

重複 なし

形状 南東の約半分の残りが悪く、壁面と住居の床面が残っていなかった。そのため形状は明らか

でない。残っていた4本の柱穴の位置関係からみて、正方形に近いがやや東西方向に長い形状が考えられる。規模は、東西方向が北壁面付近で5.5m、南北方向は不明であるが、柱穴の位置関係から推定すると5.4m前後であろう。

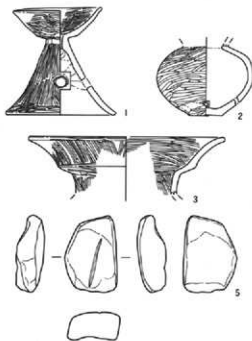
面積 推定28.9m<sup>2</sup> 方位 N-14°-E

第12図 I区 I号住居

壁・床面 残りが悪いために遺構確認面から5cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。炉 炉は不明である。炉が造られたであろう位置に、大きな石があるが、石が焼けた痕跡は無い。床面が焼土化していた部分も確認できなかった。

周溝 掘られていなかった。

柱穴 4本掘られていた。柱穴1は長径30cm短径27cm、床面からの深さ58cm。柱穴2は直径25cm、床面からの深さ52cm。柱穴3は直径25cm、床面からの深さ47cm。柱穴4は直径32cm、床面からの深さ57cmであった。



第13図 I区1号住居出土遺物

I区 2号住居 (第14図 P.L.2)

位置 Kh・i-7グリッド

重複 南側で25号土坑と重複しており、この土坑により床面を約90cmほど掘り込まれている。また土坑近くの床面も攪乱をうけており、全体に残りの悪い住居である。調査できたのはわずかな部分であった。

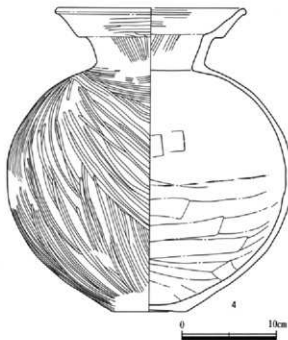
形状 住居の一部の調査であり不明。

面積 不明 方位 N-12'-E

小穴 柱穴3の南に床面から約15cmほど掘り下げた1m前後の浅い掘り込みがあり、その中央に柱穴または貯蔵穴とも思える小穴が掘られていた。径は45cm深さ41cmである。

遺物 北壁際の床面から壺(二重口縁)(4)、器台(1)が、小穴内から壺(2)が出土している。また、柱穴1の北側から炭化物の小片が出土している。埋没土中から(軽石製品)(5)が出土している。(観P1)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



壁・床面 遺構確認面から41cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

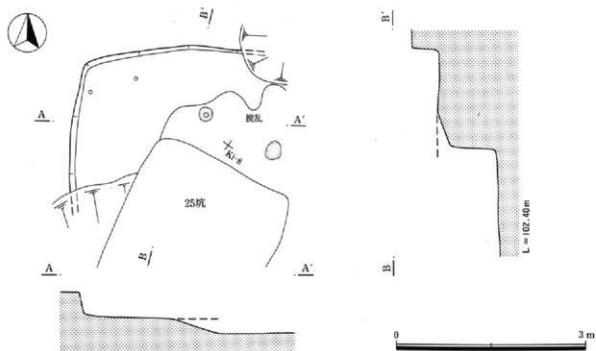
炉 炉は不明である。

周溝 掘られていなかった。

柱穴 不明

遺物 埋没土中から高杯・甕の口縁部破片・台付粟脚台部等が出土する。

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第14図 1区2号住居

## 2区 1号住居 (第15・16図 P.L.2)

位置 Ns-11・12、Nt-11グリッド

重複 住居中央を南北方向に掘られている1号溝により、床面下まで深く掘り込まれている。また、住居北西部分の壁面と床面の一部を掘り込んで6号井戸が掘られていた。柱穴と貯蔵穴以外に小穴が掘られているが、本住居に伴うものか不明である。

形状 南北方向にやや長い長方形である。規模は南北方向5.9m、東西方向5.4mである。

面積 推定30.6㎡ 方位 N-10°-W

壁・床面 遺構確認面から33cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

炉 炉は不明である。

溝 掘られていなかった。

柱穴 3本確認されている。北西部分の柱穴は6号井戸により掘られ残っていない。柱穴1は直径30cm、床面からの深さ63cm、柱穴2は直径43cm、床面からの深さ73cm、柱穴3は直径45cm、床面からの深さ41cmであった。

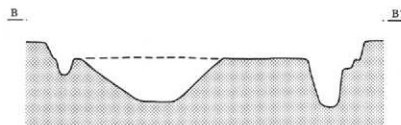
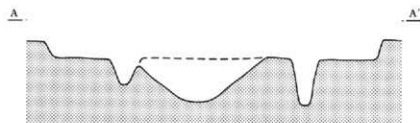
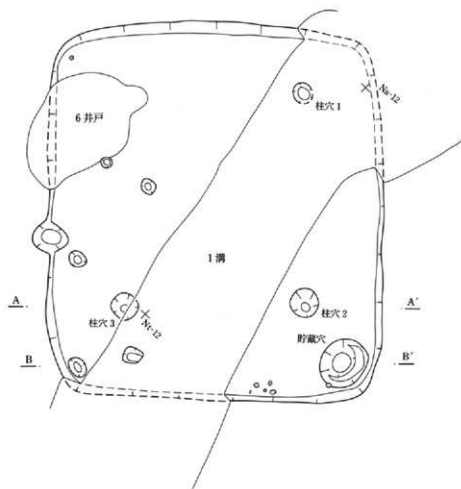
貯蔵穴 南西コーナー部分に貯蔵穴が掘られていた。直径80cm、床面からの深さ73cmであった。

遺物 埋没土中から甕(1)、台付甕(S字状口縁)(2)が出土している。南東隅から砥石が出土しているが現在所在不明である。(観P1)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第15図 2区1号住居出土遺物



L = 102.60 m



第16図 2区1号住居

2区 2号住居 (第17~19図 P.L. 2・22)

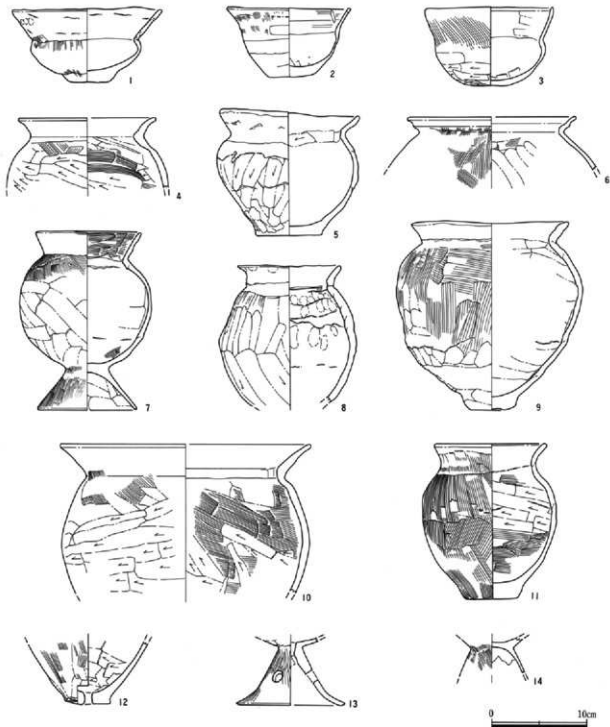
位置 Ke・f-4・5グリッド

重複 床面中央南側7号土坑と北西部分を234号土坑により、また、東側を5号溝により床下部分まで掘り込まれていた。

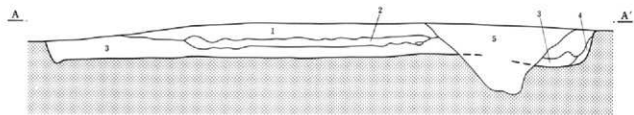
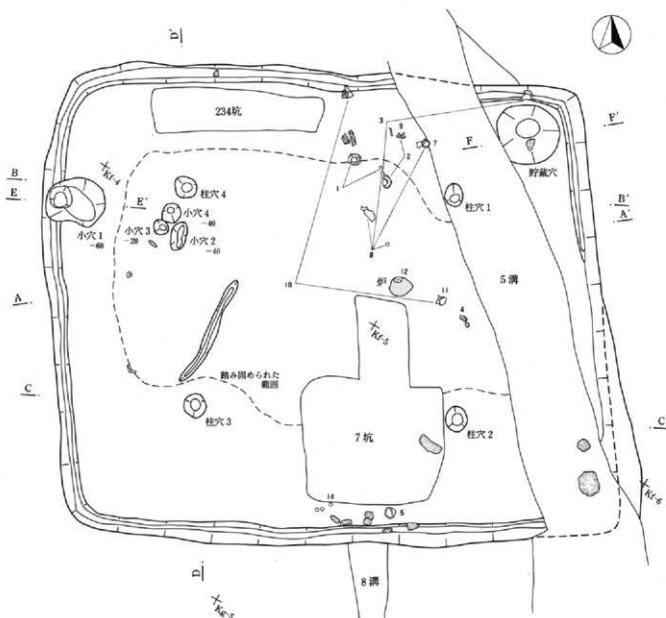
形状 東西方向にやや長い長方形である。規模は東西方向が8.7m、南北方向が7.5mである。

面積 推定53.6㎡ 方位 N-2°-E

壁・床面 壁面は東側付近の残りが良く、遺構確認面から53cmである。床面はほとんど平坦であった。



第17図 2区2号住居出土遺物

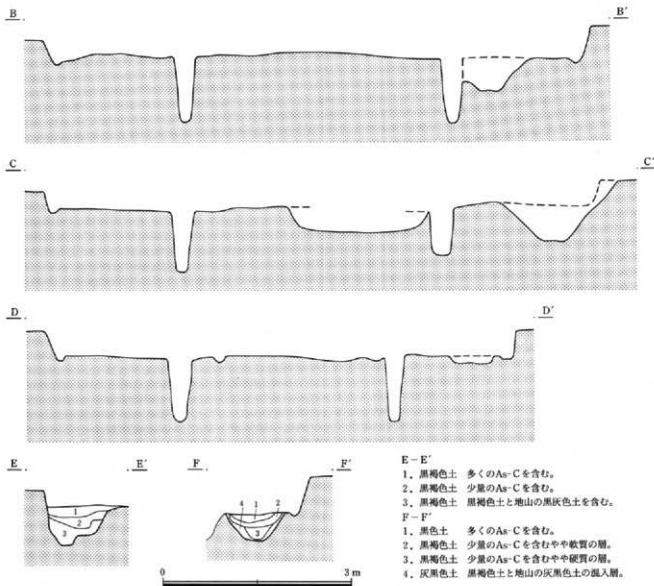


L = 102.30m

1. 暗褐色土 少量のHr-FAを含む。
2. 暗褐色土 多くのHr-FAを含む。
3. 黒褐色土 少量のAs-Cを含む。
4. 暗褐色土 黒色が強くやや固い層。
5. 5号溝埋没

0 3m

第18図 2区2号住居(1)



第19図 2区2号住居(2)

4 柱穴内側部分が踏み固められた床面となっていた。

炉 中央の床面に少し焼土が確認された。明確ではないが、炉と考えたい。炉の大きさは長径36cm短径30cmである。

周溝 壁面下ほぼ全面に掘られていたようである。規模は幅20cm前後深さ3~6cmである。

柱穴 4本掘られていた。柱穴1は直径30cm、床面からの深さ104cm、柱穴2は直径35cm、床面からの深さ75cm、柱穴3は直径35cm、床面からの深さ99cm、柱穴4は直径35cm、床面からの深さ102cmであ

った。

小穴 柱穴4の南に小さな小穴が3個、その西側に壁面を一部掘り込んで小穴が1個掘られていた。用途は不明であるが、埋没土の観察からみて住居に伴う可能性がある。床面からの深さを図上に数字で示した。

遺物 北壁寄りから甕(8)、鉢(1・2)、南壁際から甕(5)がそれぞれ出土している。また、北壁寄りから炭化物の小片が散見された。(観P1・2) 所見 出土遺物から、4世紀中頃~後半の住居と考えられる。

2区 3号住居 (第20図 P.L. 3・22)

位置 Ns・t-13グリッド

重複 なし

形状 南北方向にやや長い長方形である。規模は東西方向が3.3m、南北方向が3.5mである。

面積 11.1㎡ 方位 N-17°-W

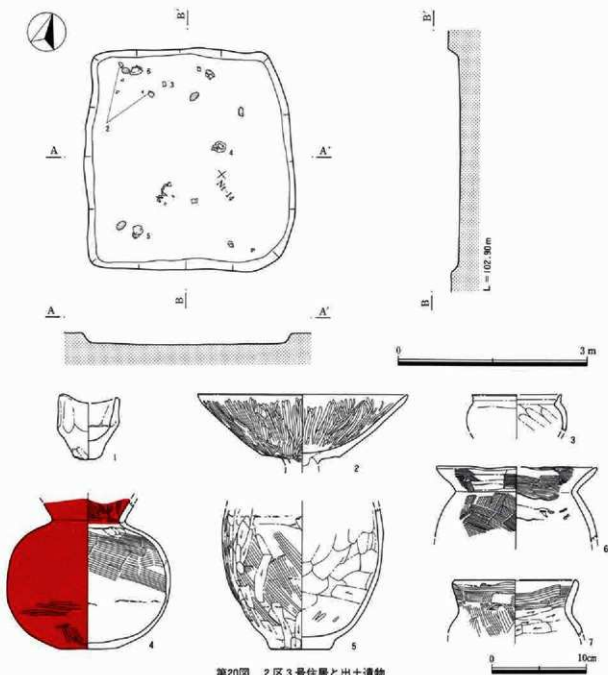
壁・床面 壁面は北東コーナー付近の残りが良く、遺構確認面から23cmである。床面はほとんど平坦であ

った。

炉 炉は不明である。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

遺物 北西隅から高杯の杯部(2)が、中央部やや東壁寄りから壺(4)が出土している。手捏ね土器(1)は埋没土中からの出土である。(観P 2・3) 所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第20図 2区3号住居と出土遺物



2区 5号住居 (第21・22図 P.L.3・22・23)

位置 Np・Q-4グリッド

概要 北壁の一部が北に張り出したような不自然な形をしている。写真観察と遺物出土状態から見て、張り出し部分は掘り過ぎの可能性が考えられる。本来の住居範囲と推定される範囲を点線で示した。中央床面に浅い方形の土坑が確認された。埋没土は多くの軽石を含む黒褐色であり、底面は踏み固められていた。このような状況から、この土坑は住居に伴う可能性が考えられる。

重複なし

形状 東西方向に長い長方形をしている。規模は東西方向が4.8m、南北方向が西側で3.5mである。

面積 推定16.4㎡ 方位 N-10°-E

壁・床面 壁面は残りの良い北西壁面で、遺構確認面から33cmである。床面は多少凹凸であった。北側の床面が踏み固められてあった。

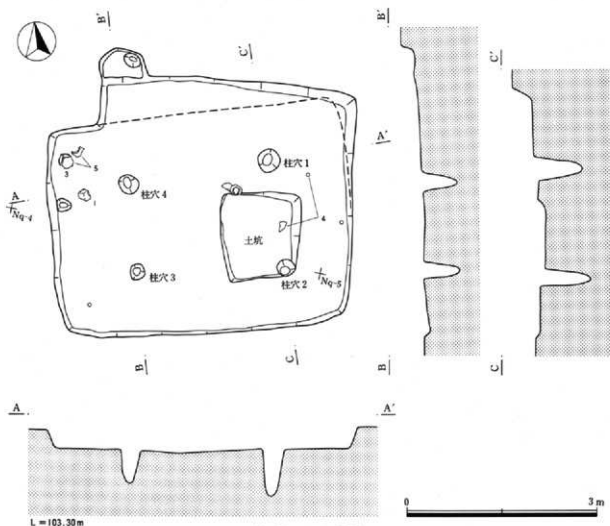
炉 確認できなかった。

周溝 掘られていなかった。

柱穴 4本掘られていた。柱穴1は直径38cm、床面からの深さ73cm、柱穴2は直径28cm、床面からの深さ85cm、柱穴3は直径24cm、床面からの深さ56cm、柱穴4は直径26cm、床面からの深さ52cmであった。

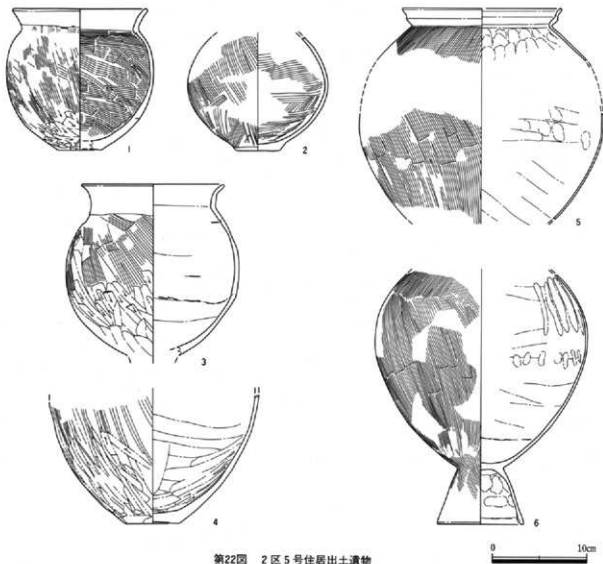
遺物 いずれも埋没土中の出土であるが、台付甕(S字状口縁)(5)は比較的床面に近接しての出土である。(観P3)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第21図 2区5号住居

第4章 検出した遺構と遺物



第22図 2区5号住居出土遺物

2区 7号住居 (第23・24図 P.L.3・23)

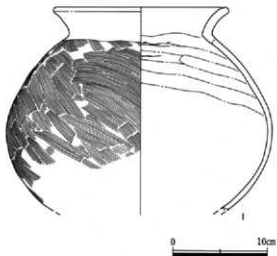
位置 Nq-6グリッド

概要 住居の大部分は、多くの土坑により壊されており北東部分がわずかに残っただけである。そのために住居の形や規模等ほとんど不明である。

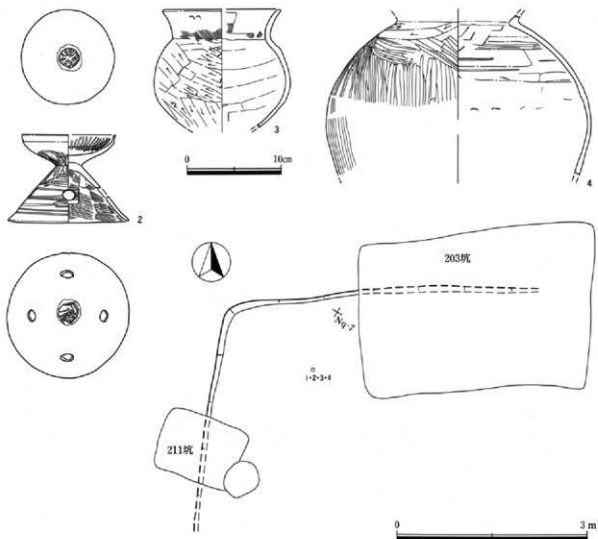
遺物 器台(2)、壺(1・3・4)が出土しているが、いずれも床面から15cm離れた出土である。

(観P3・4)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第23図 2区7号住居出土遺物(1)



第24図 2区7号住居と出土遺物(2)

## 2区 8号住居 (第25図 P.L. 4・23)

位置 Nk-6・7グリッド

概要 均整のとれた残りの良好な住居である。住居の埋没土はAs-Cを多量に含む黒色土であり、床面に近づくにつれて茶色が濃くなっている。住居は暗褐色粘質土上面まで掘り込まれていた。

重複 南壁面東寄りでは15号井戸と重複しており、新しい井戸により、掘り込まれている。

形状 東西方向に長い長方形をしている。規模は東西方向が4.4m、南北方向が西側で3.9mである。

面積 17.0㎡ 方位 N-7°-W

壁・床面 壁面は残りの良い北壁面で、遺構確認面

から33cmである。床面はほぼ平坦である。

炉 確認できなかった。

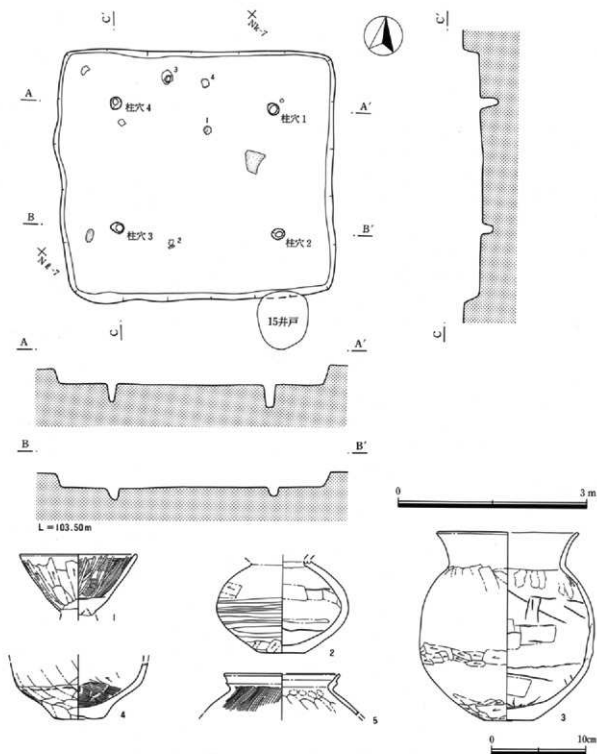
周溝 掘られていなかった。

柱穴 4本掘られていた。柱穴1は直径17cm、床面からの深さ34cm、柱穴2は直径17cm、床面からの深さ12cm、柱穴3は直径16cm、床面からの深さ19cm、柱穴4は直径17cm、床面からの深さ25cmであった。

遺物 北壁際から甕(3)が出土した他は埋没土出土である。また、中央やや東壁寄りの床面からは長さ33cmの石が出土している。(観P4)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。

第4章 検出した遺構と遺物



第25図 2区8号住居と出土遺物

2区 9号住居 (第26・27図 P.L. 4・23)

位置 Nj-5・6、Nk-6グリッド

概要 浅くて残りの悪い住居である。南西部分に浅い土坑状の掘り込みがあるが、そこより出土して

いる遺物の高さは他の床面から出土した遺物の高さとはほぼ同じであることより、この土坑状の掘り込みは、住居使用時には平坦になっていた可能性が考えられる。この土坑状の掘り込み部分には、柱穴1本

が掘られていたと思われるがここに柱穴を確認できなかった。

重複 なし

形状 南北方向に長い長方形をしている。規模は東西方向が4.8m、南北方向が5.3mである。

面積 23.6㎡ 方位 N-0°-E

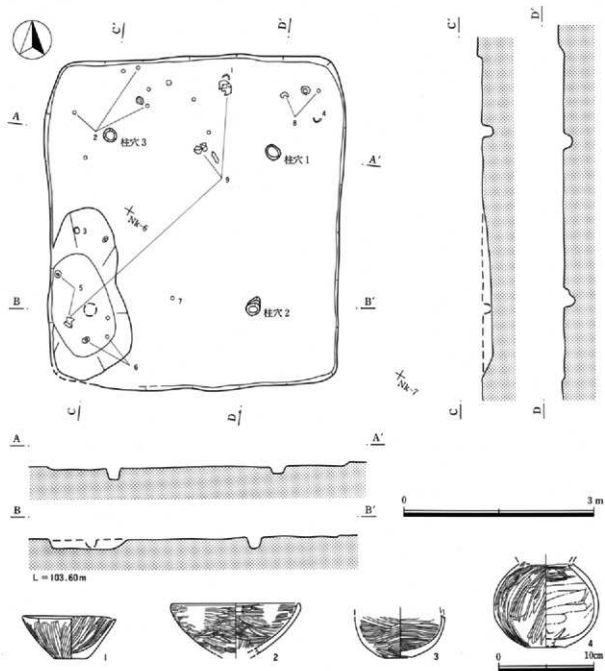
壁・床面 壁面は残りの良い北壁面で、遺構確認面から9cmと浅い。床面はほぼ平坦であった。

炉 確認できなかった。

周溝 掘られていなかった。

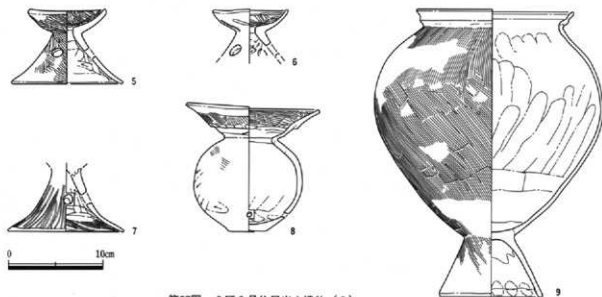
柱穴 3本掘られていた。柱穴1は直径21cm、床面からの深さ10cm、柱穴2は直径23cm、床面からの深さ15cm、柱穴3は直径21cm、床面からの深さ18cmであった。

遺物 北壁寄りを中心に出土した。器台(7)、鉢(1・2)、壺(4)が床面から出土した。(観P 4・5) 所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第26図 2区9号住居と出土遺物(1)

第4章 検出した遺構と遺物

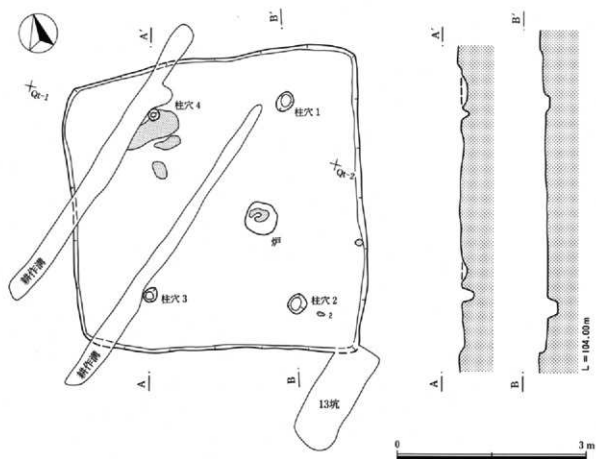


第27図 2区9号住居出土遺物(2)

3区 2号住居(第28・29図 P.L.6・24)

位置 Qs・t-1グリッド

概要 2本の耕作溝と13号土坑により床下部分まで掘り込まれている。浅く残りの悪い住居である。



第28図 3区2号住居

埋没土はAs-C混じりの暗褐色土である。炉が住居中央東寄りに、また別に北西の柱穴4の内側に炉と同じように床面が焼土化した場所が3箇所確認された。用途は不明である。

形状 わずかに東西方向に長い長方形をしている。規模は東西方向が4.7m、南北方向が4.6mである。

面積 21.2㎡ 方位 N-11°-E

壁・床面 壁面は残りの良い東壁面で、遺構確認面から12cmと浅い。床面は多少凹凸であり、若干踏み固められていた。

炉 住居中央東寄りの床面上に造られていた。馬蹄状に焼土化しており、焼土化していない炉の中央と周辺は特に黒色の強い土となっていた。

周溝 掘られていなかった。

柱穴 浅い柱穴が4本掘られていた。柱穴1は直径32cm、床面からの深さ12cm、柱穴2は直径28cm、床面からの深さ26cm、柱穴3は直径23cm、床面からの深さ20cm、柱穴4は直径18cm、床面からの深さ13

### 3区 4号住居 (第30・31図 P.L.6・24)

位置 Qn・0-0グリッド

概要 古墳の下に位置する住居である。

重複 3号墳と重複している。この古墳は大部分削平されており、本来存在したであろう石室は全て削られ残っていない。周堀も上部が削られ残りが悪かった。この古墳と4号住居は大部分重複しており、住居の北側は墳丘の下となり、南側の埋没土上層は周溝により削られていたが、住居の掘り込みは周堀より深いために、確認面以下の住居は削られていなかった。東側は砦をした50・51号土坑により床下まで深く掘り込まれている。埋没土はAs-C混じりの黒褐色土、下層が暗褐色土である。

形状 東側の残りが悪いが、ほぼ方形と思われる。規模は東西南北方向とも5.4mである。

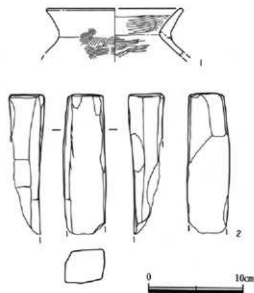
面積 26.9㎡ 方位 N-13°-W

壁・床面 残りの良い北側壁面部分で45cm前後と比較的残りが良い。床面はほぼ平坦で特に固い面はな

かった。

遺物 南東隅から磁石(2)が出土した。土器は埋没土中から破片が出土している。(観P5)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第29図 3区2号住居出土遺物

かった。

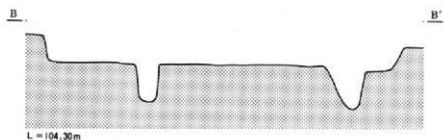
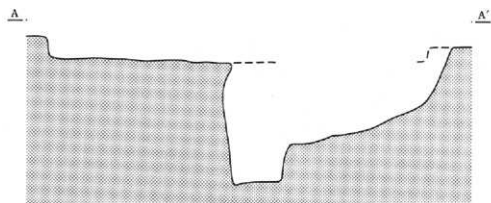
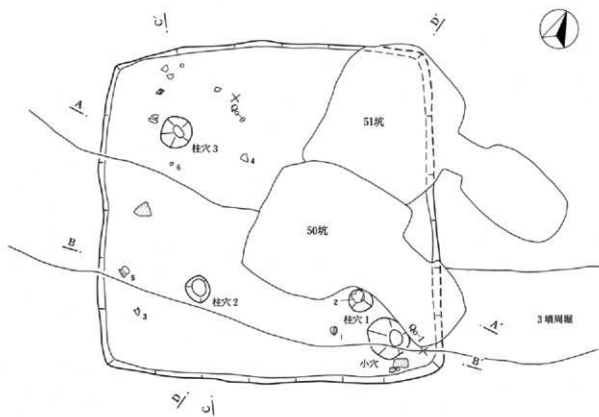
炉 不明である。

周溝 掘られていない。

柱穴 柱穴は4本掘られていたと思われるが、1本は51号土坑により掘り込まれて残ってなかった。柱穴1は直径38cm、床面からの深さ76cm、柱穴2は直径40cm、床面からの深さ66cm、柱穴3は直径50cm、床面からの深さ55cmであった。柱穴1の南東に接して小穴が確認された。直径65cm、床面からの深さは79cmと深い。貯蔵穴の可能性も考えられるが明らかでない。

遺物 南東隅、柱穴4の西側から鉢(1)が、柱穴3周辺から壺(折り返し口縁)(4)、台付壺(擬S字口縁)(6)が出土した。また、柱穴1の掘り方内から鉢(2)が出土した。(観P5・6)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。

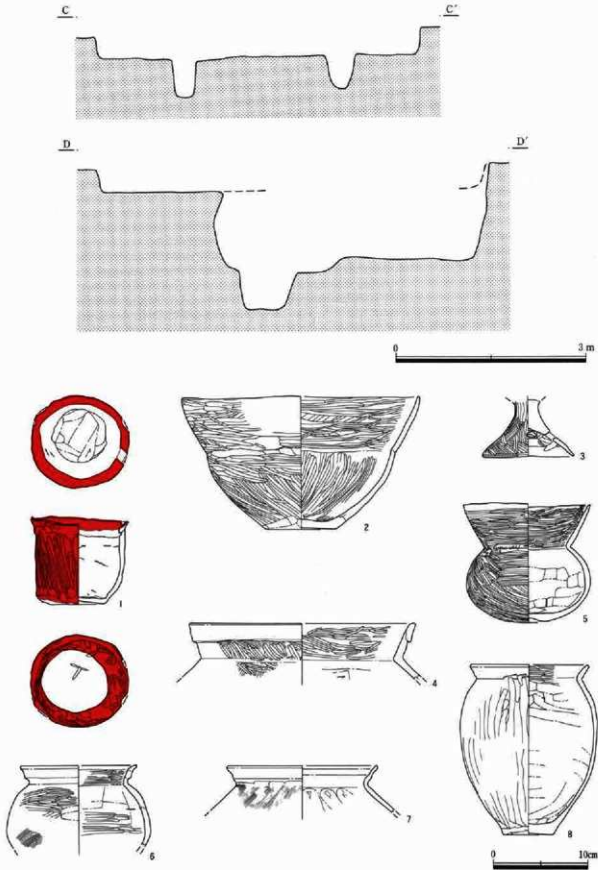


L = 104.30m



第30図 3区4号住居(1)





第31図 3区4号住居(2)と出土遺物

3区 5号住居 (第32・33図 P.L.6・24)

位置 Qj-0・1グリッド

概要 浅くて残りの悪い住居である。

重複 3号墳と西側で重複しており、3号墳により床下部分まで掘り込まれていた。東側中央部を102号土坑により床下部分まで掘り込まれていた。

形状 西側を3号墳により削られているために、全体の形状不明。規模は東西方向不明。南北方向5.8mである。

面積 不明 方位 N-15°-W

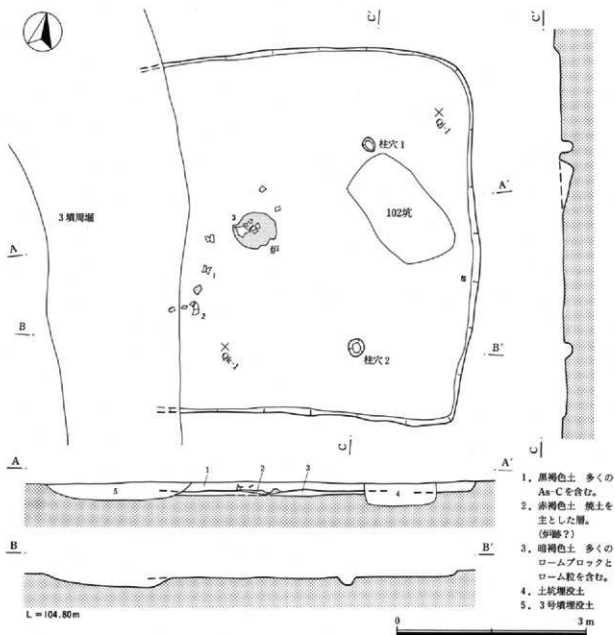
壁・床面 残りの良い東側壁面部分で14cm前後と残りが悪い。床面はほぼ平坦であった。

炉 中央で直径60cm前後の範囲で床面が焼けている部分がある。これが炉と思われる。

周溝 掘られていない。

柱穴 柱穴は4本掘られていたと思われるが、2本は3号墳により掘り込まれて残っていないかった。

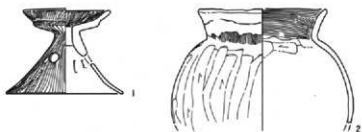
柱穴1は直径22cm、床面からの深さ11cm、柱穴2は



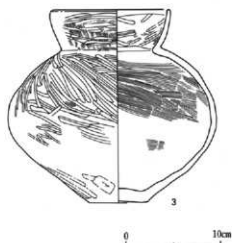
第32図 3区5号住居

直径28cm、床面からの深さ13cmであり、いずれも小さくて浅い。

遺物 炉の周辺から器台(1)、壺(3)が、これらより南壁寄りから甕(2)が出土している。(観P6) 所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第33図 3区5号住居出土遺物



3区 6号住居 (第34図 P.L.6・24)

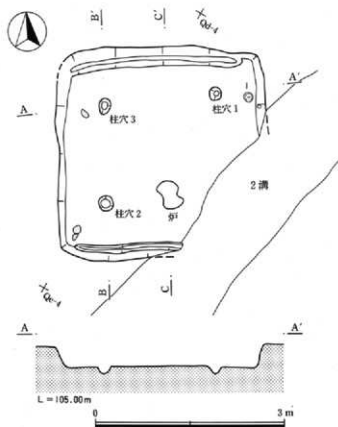
位置 Qd-3・4グリッド

重複 南東部分で2号溝・118号土坑と重複しており、その部分は2号溝により床下部分まで削り取

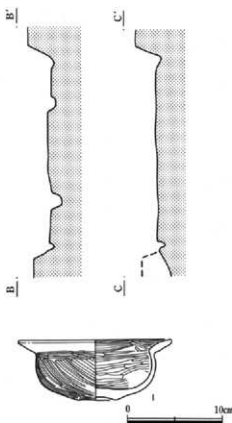
られている。

形状 南東部分は残っていないが、ほぼ正方形に近い。規模は東西方向3.3m、南北方向3.4mである。

面積 推定11.1m<sup>2</sup> 方位 N-4°-W



第34図 3区6号住居と出土遺物



壁・床面 残りの良い北側壁面部分で34cm前後と比較的残りが良い。床面はほぼ平坦であった。

炉 中央やや南の床面に、短軸35cm長軸45cmほどの範囲で黄褐色な部分が確認された。焼土化はしていないが、炉の可能性を考えたい。

周溝 北と南壁面の下に掘られていた。西と東壁面下では確認できなかった。幅は12~18cm、深さは3~10cmである。

3区 7号住居 (第35・36図 P.L. 7・24)

位置 Qk・1-1グリッド

重複 8号住居・3号墳・7号溝と重複している。本住居は同じ古墳時代前期の8号住居の南側を、約29cm掘り込んで造られている。西側では埋没土上面を3号墳の周堀により削られている。南西コーナー部分の埋没土上面を新しい7号溝により削られている。新旧関係は8号住居→7号住居→3号墳周堀→7号溝である。

形状 少し歪んでいるがほぼ長方形を呈している。規模は東西方向3.4m、南北方向2.5mである。

柱穴 柱穴は4本掘られていたと思われるが、1本は2号溝により掘り込まれて残っていなかった。柱穴1は直径21cm、床面からの深さ11cm、柱穴2は直径24cm、床面からの深さ19cm、柱穴3は直径20cm、床面からの深さ10cmである。

遺物 北東隅の床面からやや離れた位置から鉢(1)が出土している。(観P 6)

所見 4世紀中頃~後半の住居と考えられる。

面積 8.5㎡ 方位 N-5°-E

壁・床面 壁面は残りの良い南東コーナー部分で37cmと残りが良い。床面はほぼ平坦であった。

炉 確認できなかった。

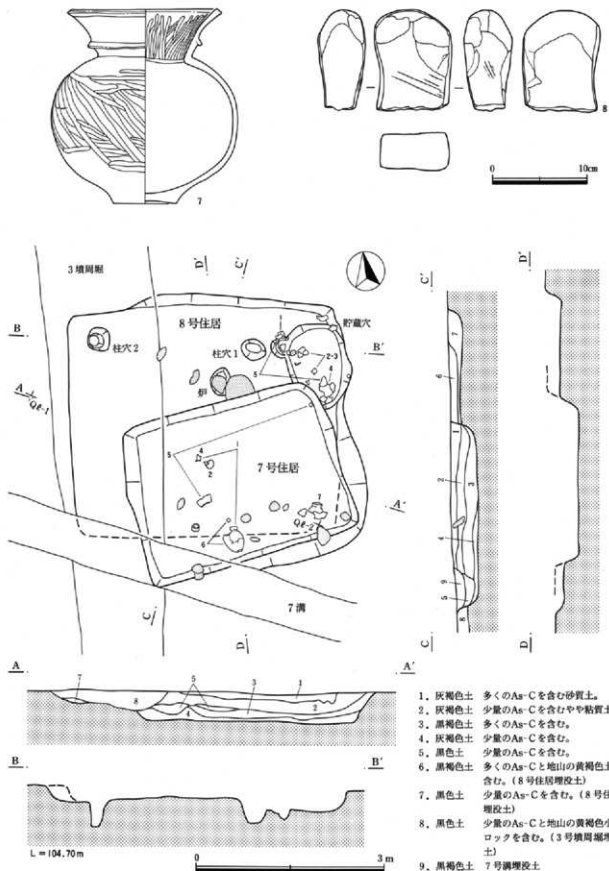
周溝・柱穴 掘られていなかった。

遺物 北西隅寄りから壺(4)が、南壁際出土の甕(6)が出土している。埋没土中から磁石(8)が出土している。(観P 6・7)

所見 出土遺物から、4世紀中頃~後半の住居と考えられる。



第35図 3区7号住居出土遺物(1)



第36図 3区7・8号住居と7号住居出土遺物(2)

3区 8号住居(第36・37図 P.L.7・25)

位置 Qk-1-1グリッド

重複 7号住居・3号墳・7号溝と重複している。本住居は同じ古墳時代前期の7号住居により南側を、掘り込まれている。西側ではほぼ床面近くまで3号墳の周堀により削られている。かろうじて土層の違いにより西側の住居範囲は確認できたが、南西コーナー部分は削られて残っていない。南西コーナー部分の上面には新しい7号溝が掘られていた。新旧関係は8号住居→7号住居→3号墳周堀→7号溝である。

形状 南側が明瞭に残っていないために、明らかでないが、ほぼ長方形を呈していると思われる。規模は東西方向4.3m、南北方向は明確ではないが、ほぼ3.7m前後を想定できる。

面積 推定16.0㎡ 方位 N-7°W

壁・床面 壁面は残りの良い北壁部分で23cmであった。床面は多少凹凸な部分があったが平坦な部分が多かった。

炉 中央付近の床面で、火を受けて焼土化した

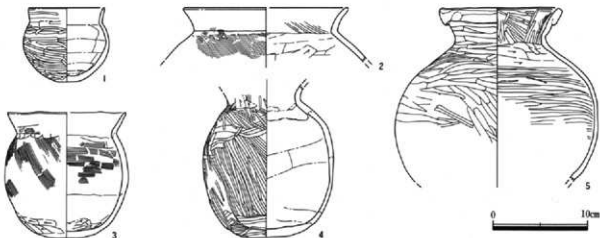
部分が3箇所確認された。最も南側の焼土は厚さ2cmほど焼土化していた。おそらくこの3箇所とも炉として一時期使用されていたものと思われる。

周溝 掘られていなかった。

柱穴 柱穴は4本掘られていたと思われるが、2本確認できただけである。南西部分の柱穴は不明で、南東部分の柱穴はおそらく7号住居により掘り込まれて残っていないものと思われる。柱穴1は長径40cm短径33cm、床面からの深さ38cm、柱穴2は直径38cm、床面からの深さ45cmである。

貯蔵穴 北東コーナー部分に大きな掘り込みがある。貯蔵穴には疑問であるが、仮に貯蔵穴と呼称する。規模は長軸136cm短軸98cm、床面からの深さ19cmである。多くの出土土器は、大部分床面に近い高さからで、貯蔵穴の中からの出土はほとんど無い。遺物 柱穴1際から壺(1)が出土している。貯蔵穴の範囲内からは、壺(4)、甕(2・3)が出土していたが、いずれも床面から離れたレベルでの出土である。(観P7・8)

所見 4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第37図 3区8号住居出土遺物

3区 9号住居(第38図 P.L.7)

位置 Qn-2グリッド

概要 残りの悪い住居であり、南東部分以外は残っていない。規模は不明であるが、東西方向3.5

m、南北方向2mの範囲まで確認できた。

面積 不明 方位 不明

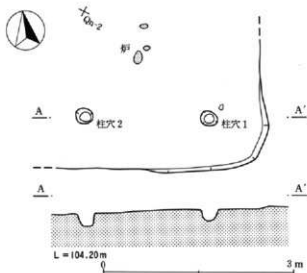
壁・床面 壁は南東部分で確認され高さは2cmであった。床面はわずかに確認でき、ほぼ平坦であった。

炉 中央付近で直径60cm前後の範囲で床面が焼けている部分が3箇所確認できた。炉と思われる。

柱 穴 柱穴と思われる小穴が2個確認された。柱穴1は直径25cm、床面からの深さ20cm、柱穴2は直径26cm、床面からの深さ29cmである。

遺 物 床面出土の資料は無かったが、埋没土中から刷毛目を持つ甕の胴部破片多数と大型丸胴甕の底部破片と直口壺の口縁部が出土している。

所 見 出土遺物から、4世紀後半の住居と考えられる。

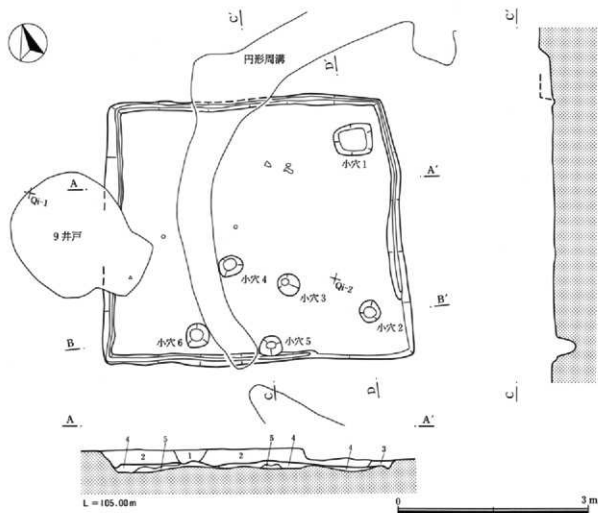


第38図 3区9号住居

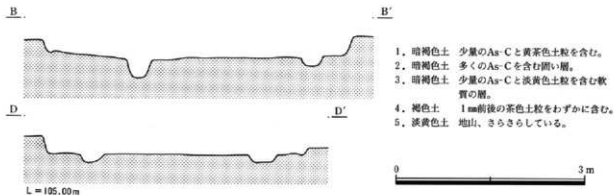
## 3区 10号住居 (第39・40図 P.L.7)

位 置 Qh-1、Qi-1・2グリッド

重 複 西側の壁面付近を9号井戸により深く掘り込まれている。また西側を円形周溝の周溝により、



第39図 3区10号住居 (1)



第40図 3区10号住居(2)

溝状に床面付近まで掘り込まれている。

**形状** 東西方向が少し広がっているが、ほぼ正方形に近い方形である。規模は東西方向が4.8m、南北方向が4.2mである。

**面積** 推定19.8m<sup>2</sup> **方位** N-10°-E

**壁・床面** 残りの良い南東コーナー部分で25cmである。床面はほぼ平坦であった。

**炉** 不明である。

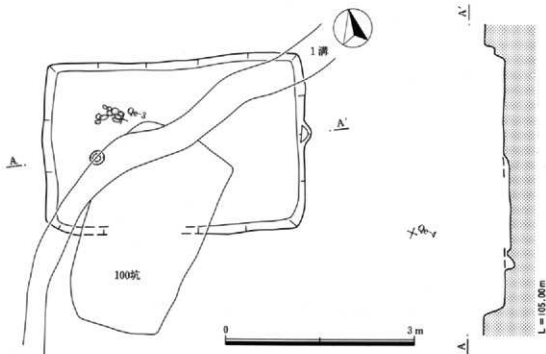
**周溝** 南東コーナー部分以外の壁面下に掘られていた。幅は13~15cm、深さは3cm前後である。

**小穴** 明らかな柱穴は確認されなかった。小穴が6個掘られていた。小穴1は方形を呈し貯蔵穴に似

ているが浅いために小穴とした。小穴1は長軸62cm短軸50cm、床面からの深さ12cm、小穴2は直径33cm、床面からの深さ14cm、小穴3は直径36cm、床面からの深さ30cm、小穴4は直径36cm、床面からの深さ24cmであった。小穴5は直径35cm、床面からの深さ33cm、小穴6は直径40cm、床面からの深さ35cmであった。

**遺物** 小破片が出土したが図示するに足る資料は得られなかった。

**所見** 出土遺物から、4世紀中頃~後半の住居と考えられる。



第41図 3区12号住居



## 3区 12号住居 (第41・42図 P.L. 8)

位置 Qd・e-3グリッド

重複 南側で100号土坑と重複しており、100号土坑により住居床下部分まで掘り込まれている。また埋没土上面を浅い1号溝により掘り込まれていた。

住居内に掘られている小穴は、住居周辺に多く掘られている小穴群中の1つであり、当住居に伴うものとは考えていない。

形状 ほぼ長方形を呈しており、規模は東西方向4.15m、南北方向2.8mである。

面積 推定11.4㎡ 方位 N-11°E

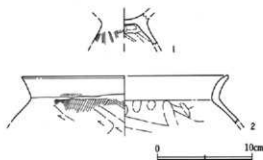
壁・床面 壁面は残りの良い北壁部分で40cmであった。床面は平坦であった。

炉 不明である。

周溝と柱穴 掘られていなかった。

遺物 埋没土中から破片が少数出土したのみである。北西隅寄りで、床面から約5~10cm離れ、長さ10~15cmの石が10個ほどまとめて出土した。(観P 8)

所見 4世紀中頃~後半の住居と考えられる。



第42図 3区12号住居出土遺物

## 3区 14号住居 (第43・44図 P.L. 8・25)

位置 P1・m-12グリッド

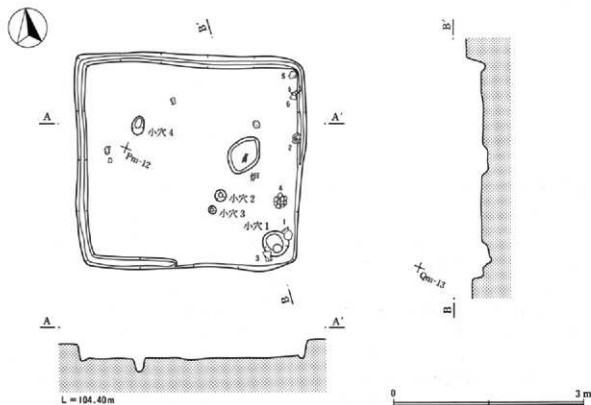
重複 なし

形状 東西方向の規模がやや大きいのが、ほぼ正方

形に近い。規模は東西方向が3.7m、南北方向3.4mである。

面積 12.2㎡ 方位 N-7°E

壁・床面 残りの良い北壁面部分で25cmである。



第43図 3区14号住居

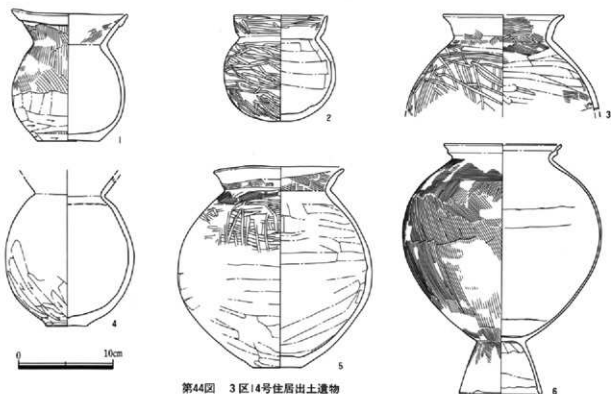
炉 床面中央東寄りに炭が出土し、その周辺が浅い土坑状になっている。明瞭な焼土が残っていないが、ここに炉があったものと思われる。大きさは長軸65cm短軸48cm、深さ5cmである。

周溝 南東コーナー部分以外の壁面下に掘られていた。幅は12~18cm、深さは3~5cmである。

小穴 明らかな柱穴は確認されなかった。小穴が4個掘られていた。小穴1は円形を呈し貯蔵穴に似ているが浅いために小穴とした。小穴1は直径41cm、

床面からの深さ12cm、小穴2は直径18cm、床面からの深さ15cm、小穴3は直径14cm、床面からの深さ12cm、小穴4は長軸29cm短軸19cm、床面からの深さ22cmであった。

遺物 南東隅寄り、小穴1の周辺から壺(1・3・4)が出土。北東隅の壺(5)、台付壺(S字状口縁)(6)は床面からやや遊離しての出土である。(観P8)所見 出土遺物から、4世紀後半の住居と考えられる。



第44図 3区14号住居出土遺物

3区 17号住居 (第45~50図 P L . 9・25~28)

位置 Qk-4グリッド

重複 南北方向に掘られている2号溝と重複し、2号溝により、住居中央西寄りの埋設土上面を削られている。

形状 ほぼ正方形に近い。規模は東西方向が5.1m、南北方向5.05mである。

面積 25.5㎡ 方位 N-4°-E

壁・床面 残りの良い西壁面部分で62cmである。

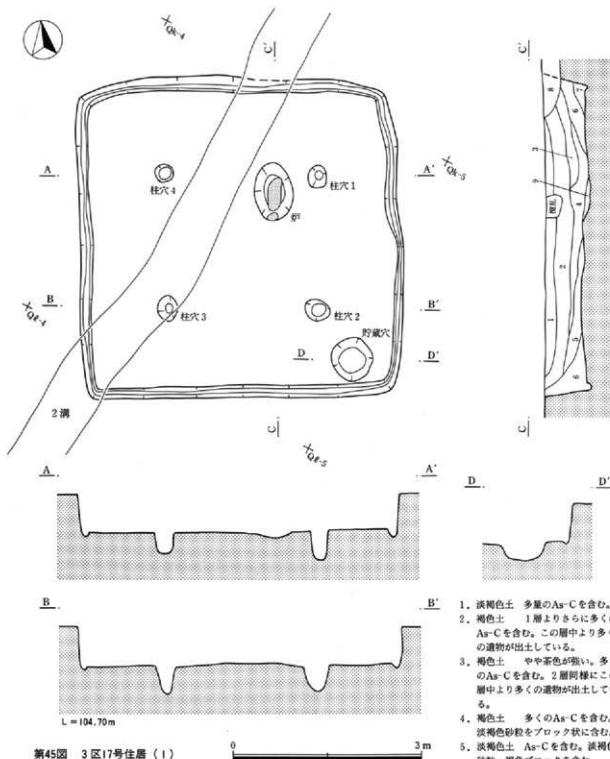
炉 床面中央北寄りて床面よりやや低く掘り込まれた部分があり、大きく焼土化していた。これが

炉と思われる。掘り込みの大きさは長軸方向90cm短軸方向63cm、深さ10cmである。

周溝 すべての壁面下に掘られていた。幅は15cm前後、深さは5cm前後である。

柱穴 柱穴が4本掘られていた。柱穴1は長径36cm短径30cm、床面からの深さ41cm、柱穴2は長径40cm短径34cm、床面からの深さ42cm、柱穴3は長径38cm短径30cm、床面からの深さ44cm、柱穴4は直径28cm、床面からの深さ35cmであった。

貯蔵穴 貯蔵穴が南東コーナー部分に掘られていた。少し歪んではいるがほぼ円形である。長径67cm



第45図 3区17号住居(1)

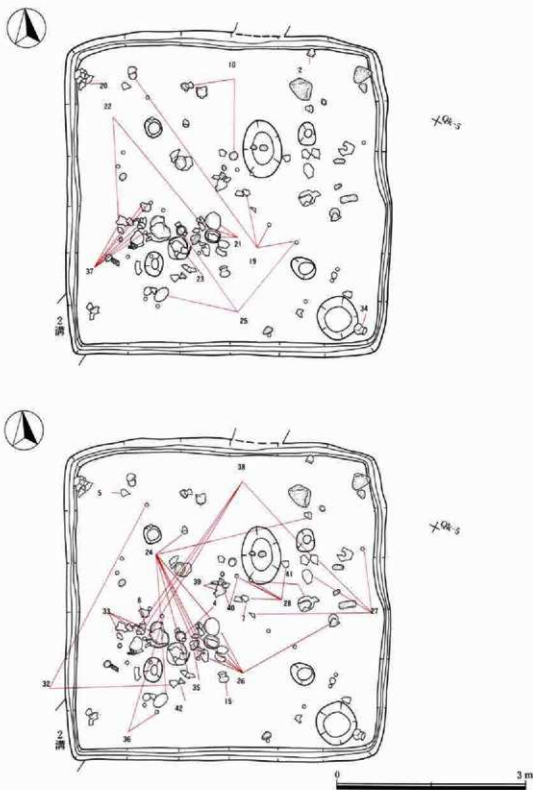
短径63cm、床面からの深さ27cmである。

遺物 貯蔵穴の東際から壺(輪積口縁)(34)が、北東隅壁際から鉢(2)が出土している他、中央部から壺(直口壺)(10)・壺(19~22)・壺(折り返し口縁)(24)が出土している。また、破片資料で多数が占め

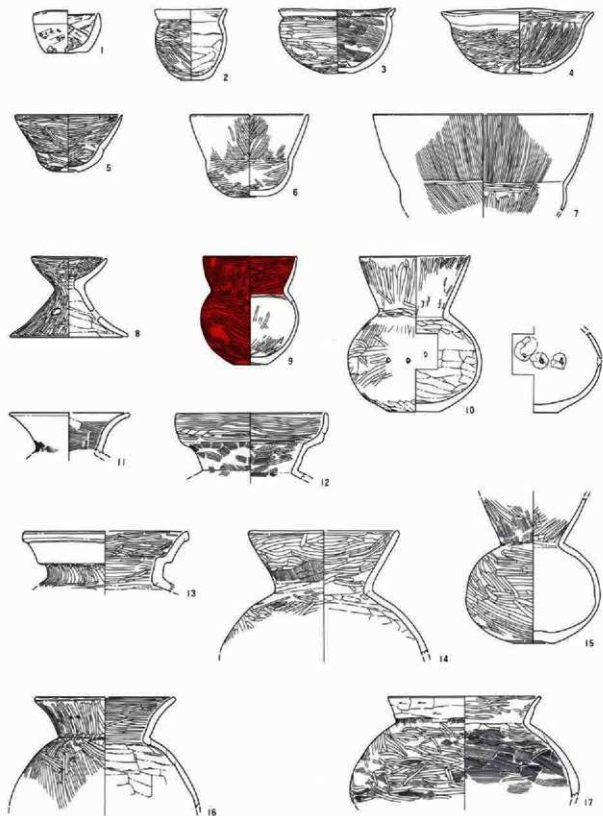
第4章 検出した遺構と遺物

られる中、埋没土からも手捏ね(1)、器台(8)、埴(5)、壺(折り返し口縁)(26)、甕(33)、台付甕(S字状口縁)(41)などの完形品が出土している。埋没

土中から砥石(43)が出土している。(観P9~12) 所見出土遺物から、4世紀中頃~後半の住居と考えられる。

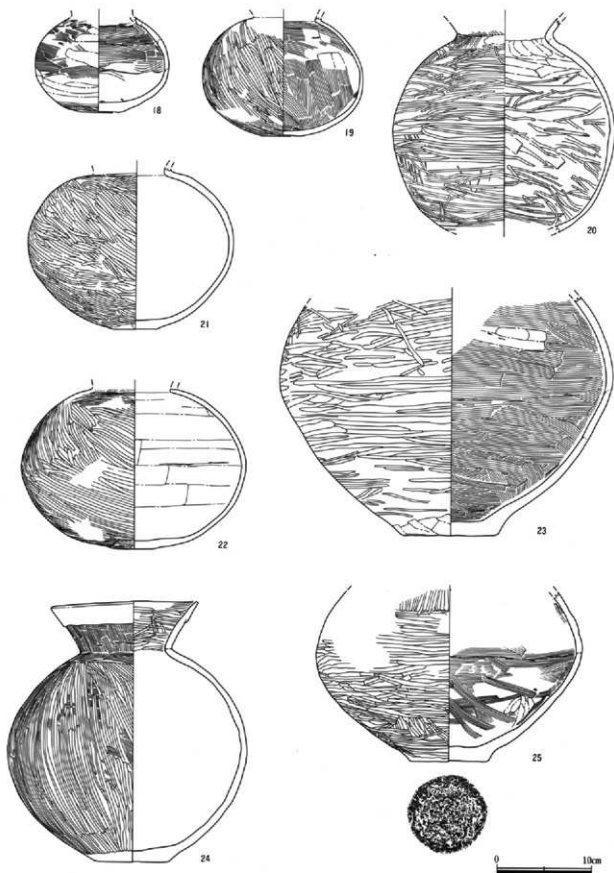


第46図 3区17号住居(2)

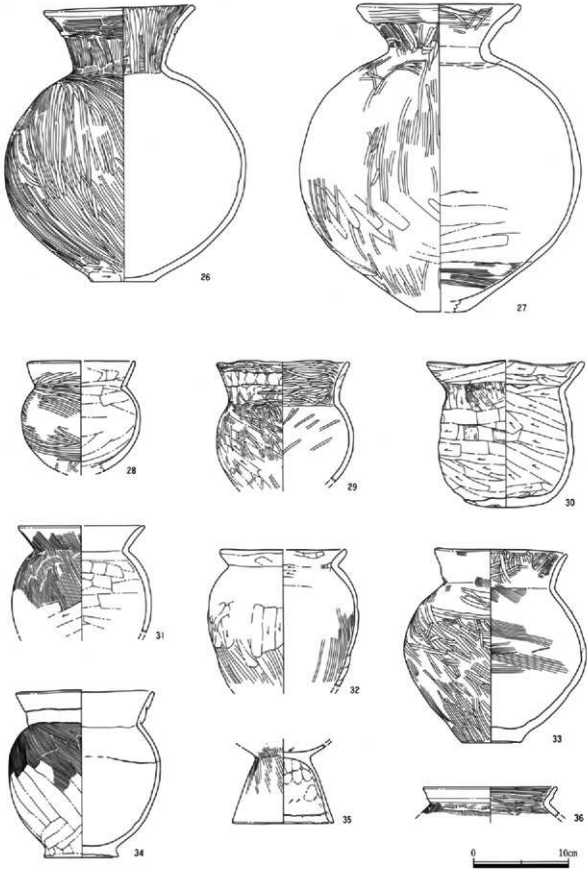


第47図 3区17号住居出土遺物(1)

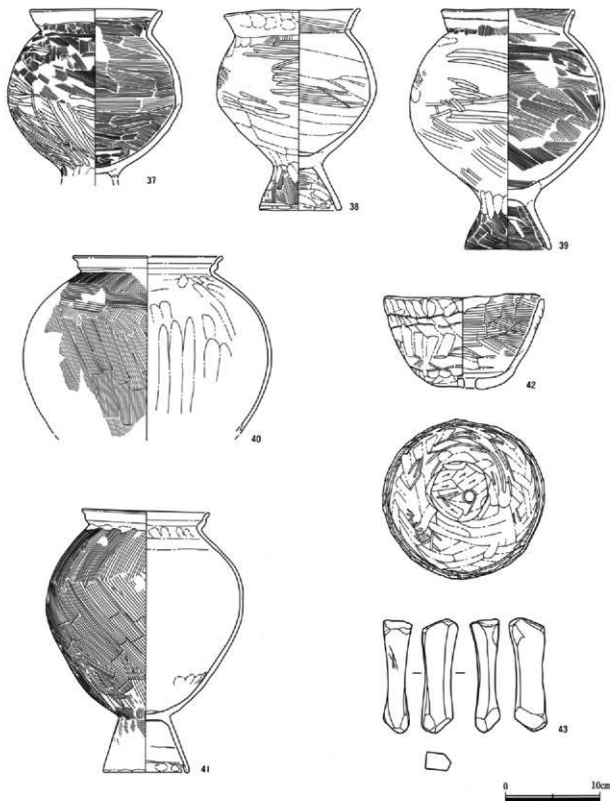
第4章 検出した遺構と遺物



第48図 3区17号住居出土遺物(2)



第49図 3区17号住居出土遺物(3)



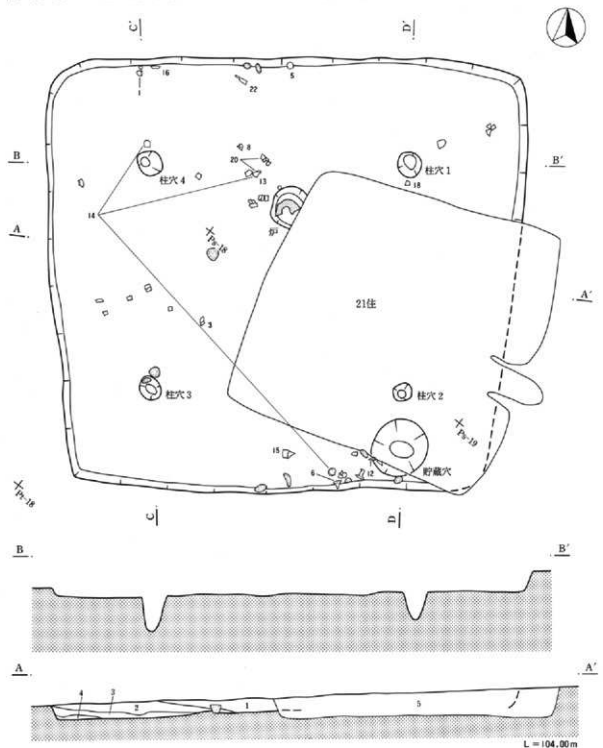
第50図 3区17号住居出土遺物(4)



3区 22号住居 (第51~54図 P.L. 8・29)

位置 Pr・S-17・18グリッド

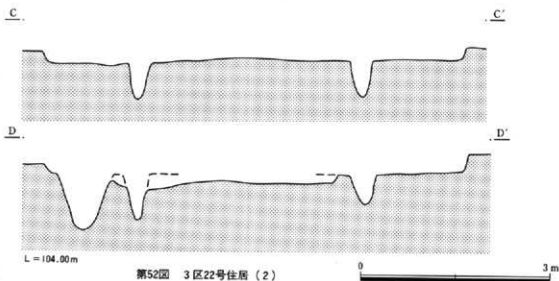
重複 南東部分で竈を持つ古墳時代後期の21号住居と重複しており、21号住居によりその部分は床下



1. 暗褐色土 多くのAs-Cを含みやや砂質。
2. 暗褐色土 多くのAs-Cと黄褐色の小ブロックを含む。
3. 暗褐色土 やや灰褐色・地山の暗灰褐色土をブロック状に含む。
4. 暗褐色土 やや茶色・地山の暗灰褐色土を少量含む。
5. 21号住居埋没土

0 3m

第51図 3区22号住居 (1)



第52図 3区22号住居(2)

まで掘り込まれている。床下部分から本住居の柱穴1個と貯蔵穴が確認された。

形状 東西の規模を比較すると、北側で7.6m、南側で6.6mと北側が1mほど広がっている。南北方向では6.7mである。やや台形になっている。

面積 推定43.5m<sup>2</sup> 方位 N-9°-W  
壁・床面 残りの良い北壁面部分で30cmである。床面は東側が固く踏み固められている。西側は軟らかかった。

炉 床面中央やや北寄りに、床面が幅約40cmほど赤く焼けていた部分がある。ここに炉が造られていたものと思われる。南東部分は21号住居により削られている。

周溝 なし。

柱穴 柱穴が4本掘られていた。柱穴1は長径42

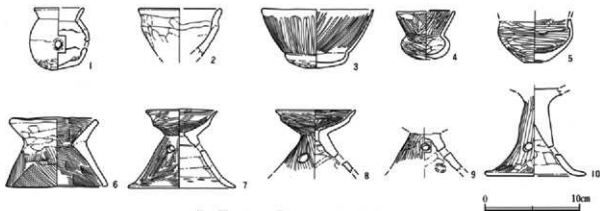
cm短径37cm、床面からの深さ43cm、柱穴2は直径27cm、床面からの深さ70cm、柱穴3は長径37cm短径31cm、床面からの深さ67cm、柱穴4は長径43cm短径37cm、床面からの深さ61cmであった。

貯蔵穴 南東部分で柱穴2の南で壁面に接して貯蔵穴が掘られていた。ほぼ円形をしている。長径92cm短径88cm、床面からの深さ86cmである。

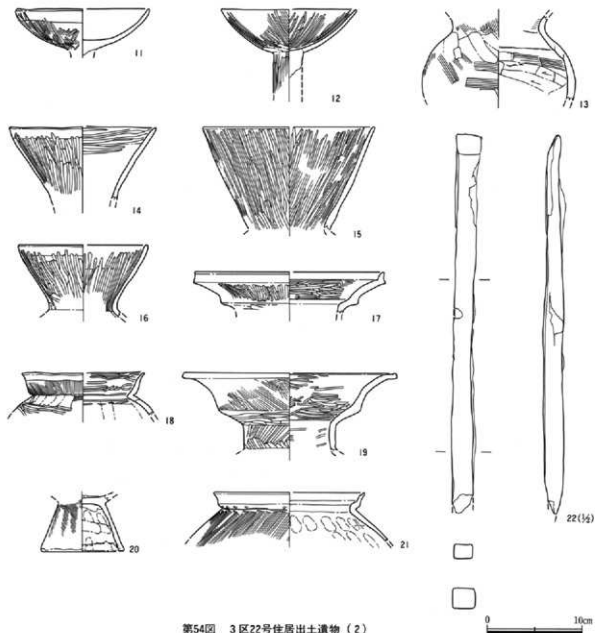
遺物 埋没土中、あるいは床面に接して多数の土器が出土したが大多数が欠損品、破片である。床面直上の資料では北西隅、壁際から手捏ね土器(1)が、南壁際、貯蔵穴寄りから器台(6)が出土している。また、北壁際、中央から壺(22)が出土している。

(観P12・13)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第53図 3区22号住居出土遺物(1)



第54図 3区22号住居出土遺物(2)

## 3区 24号住居(第55・56図 P.L.10・29)

位置 Pp・q-16・17グリッド

重複 住居の南側で古墳時代後期の23号住居と重複しており、本住居が23号住居により深く床下部分まで掘り込まれている。

形状 やや台形に近い。東西の規模を比較すると、北側で5.6m、南側で6.2mと南側が0.6mほど広くなっている。南北方向では西側で6.7m、東側で7mと東側が0.3mほど広くなっている。

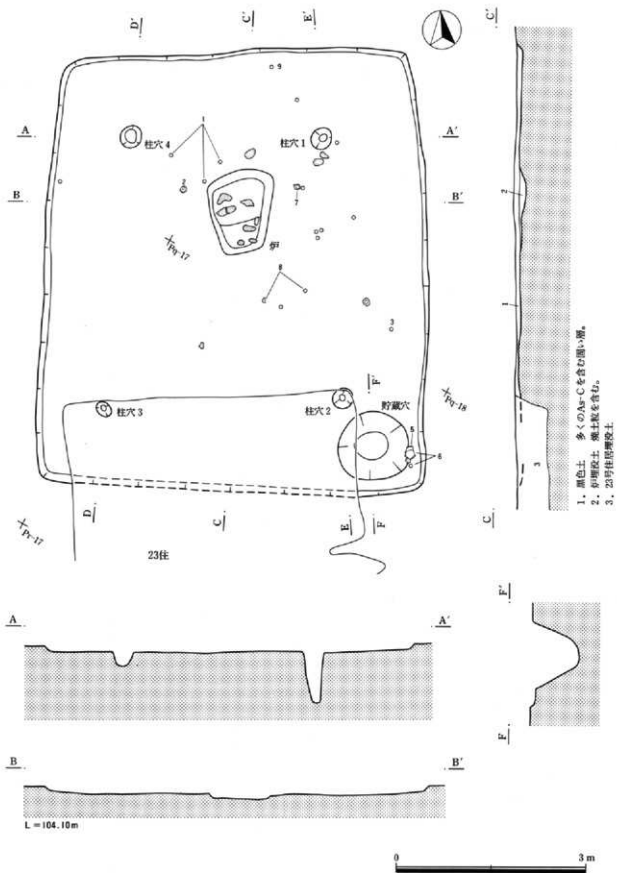
面積 37.4㎡ 方位 N-2°-E

壁・床面 壁面の高さは、10cm前後と低く全体に残りが悪い。

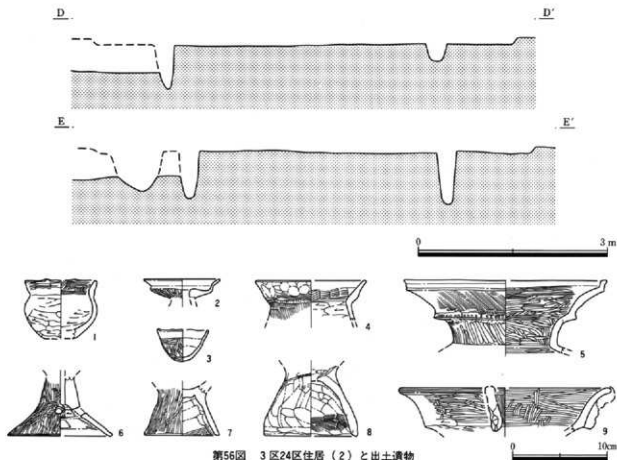
炉 床面中央付近やや北側に炉が造られていた。炉は床面より5～6cmほど深く掘られており、焼土が少し残っていた。また、炉の中に石が2個あり、炉に伴い使用されていた可能性が高い。

周溝 掘られていなかった。

柱穴 やや不規則であるが4本掘られていた。柱穴1は直径32cm、床面からの深さ80cm、柱穴2は直径33cm、床面からの深さ73cm、柱穴3は長径26cm短



第55図 3区24号住居(1)



第56図 3区24区住居(2)と出土遺物

径21cm、床面からの深さ70cm、柱穴4は直径34cm、床面からの深さ25cmである。

**貯蔵穴** 貯蔵穴が南東コーナー部分に掘られていた。ほぼ円形であり、直径110cm、床面からの深さ72cmである。

3区 25号住居 (第57～59図 P.L.11・29・30)

位置 Pn-18・19グリッド

**重複** 西壁南側付近で122号土坑、南東コーナー部分で121号土坑と重複しており、この土坑により重複部分は床下部分まで深く掘り込まれていた。

**形状** やや盃んだ台形に近い。南北の規模を比較すると、西側で5.4m、東側で5.5mと東側が少し広がっている。東西方向では南側で5.1m、北側で5.5mと北側が0.4mほど広がっている。

**面積** 28.6㎡ **方位** N-37°-E

**壁・床面** 壁面の高さは、残りの良い北壁面で30cm

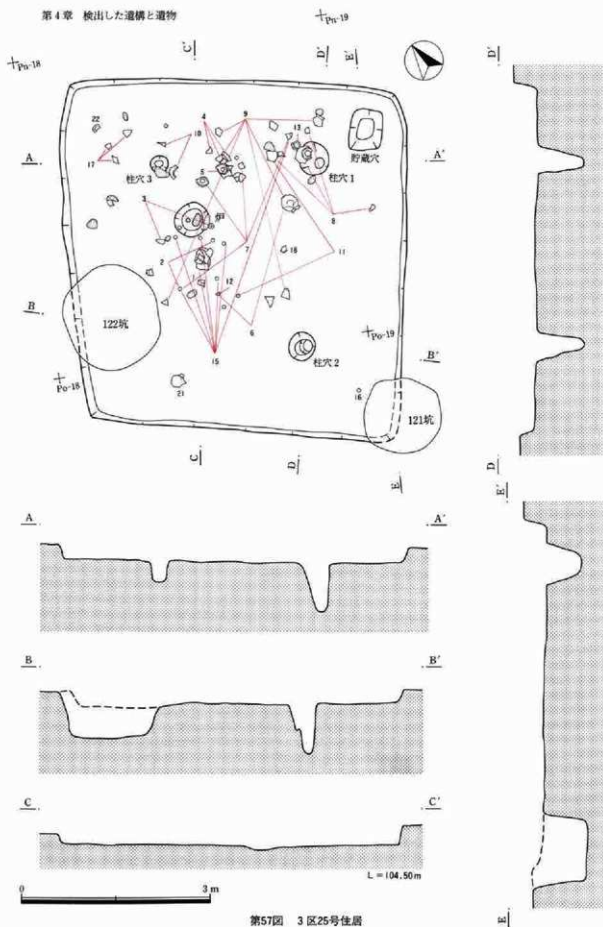
**遺物** 床面の各所、貯蔵穴内から土器が出土しているが、いずれも破片資料である。(観P13・14) **所見** 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。

あるが残りの悪い南西コーナー部分では5cm前後と浅い。

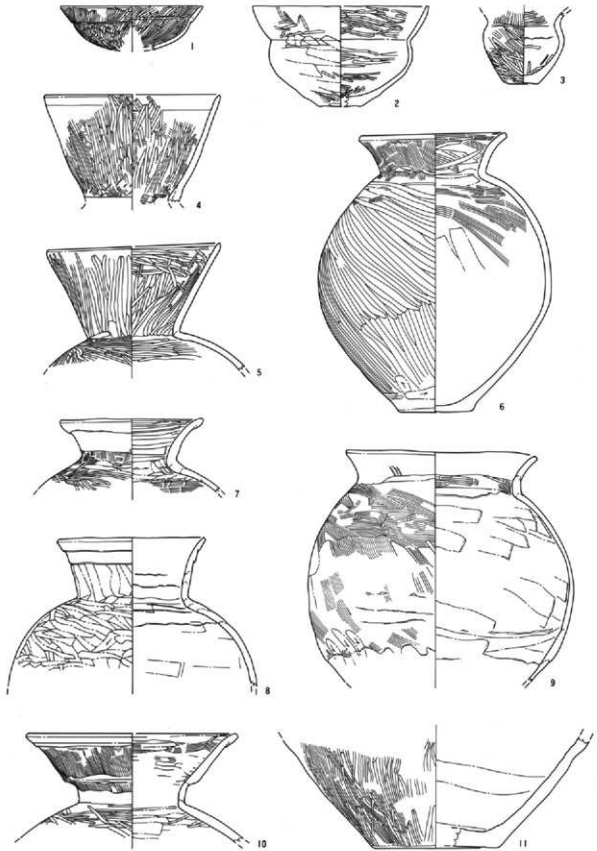
**炉** 床面中央付近やや西側に炉が造られている。炉は床面より3cmほど深く掘られており、焼土が少し残っていた。また、炉の南に石が炉面を2cmほど掘り込んで据えられていた。炉に伴い使用されていた枕石の可能性が高い。炉はほぼ円形であり、大きさは直径50cm前後である。

**周溝** 掘られていなかった。

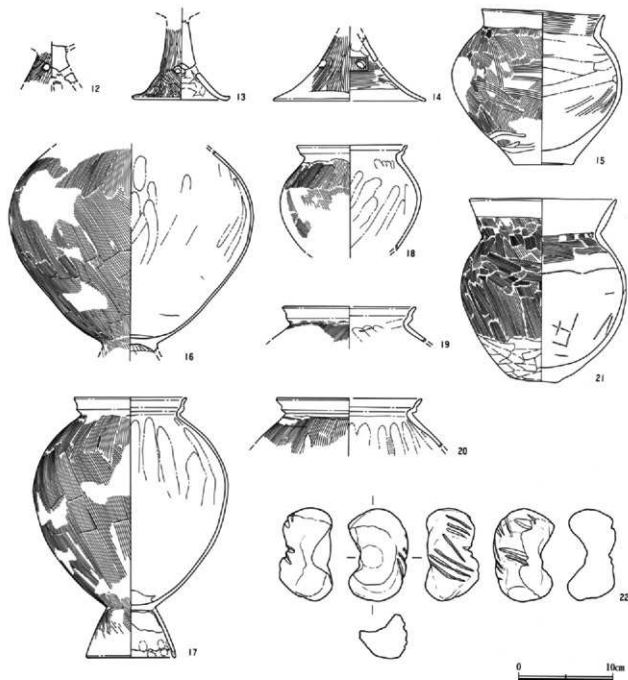
**柱穴** 本来4本掘られていたものと思われるが、1本は122号土坑により掘られていたためか3本確



第57図 3区25号住居



第58図 3区25号住居出土遺物(1)



第59図 3区25号住居出土遺物(2)

認めただけである。柱穴1は長径53cm短径49cm、床面からの深さ79cm、柱穴2は長径42cm短径40cm、床面からの深さ77cm、柱穴3は直径28cm、床面からの深さ30cmである。

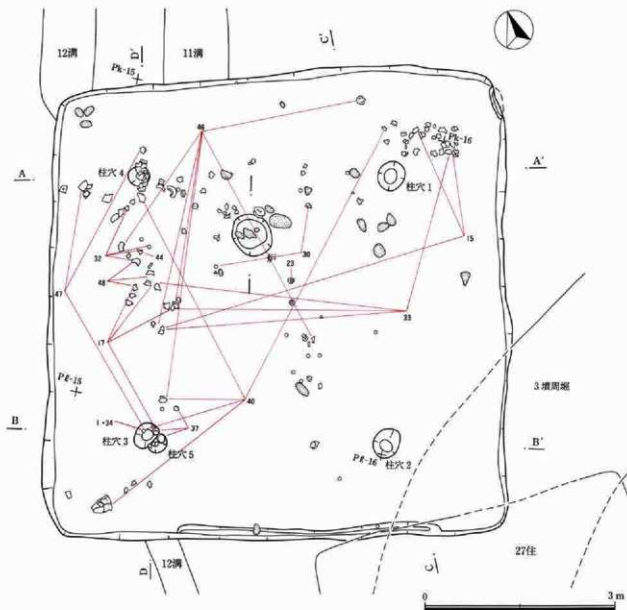
貯蔵穴 貯蔵穴が北東コーナー部分に掘られていた。歪んだ長方形を呈しており、長軸64cm短軸53cm、床面からの深さ58cmである。

遺物 床面直上から出土した土器は多数あるが、完形品としては中央部柱穴1寄りから壺(6)が、北隅寄りからは台付甕(S字状口縁)(17)が出土した。また、埋没土中から軽石製品(22)が出土している。

(観P14・15)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。





第60図 3区28号住居(1)

3区 28号住居 (第60~67図 P.L.10・30~34)

位置 Pk・1-15グリッド

重複 11・12号溝と重複し、住居埋没土上面が掘り込まれていた。住居の南東コーナー部分で3号墳の周堀と重複しており、周堀により床面近くの埋没土が掘り込まれていた。また、住居の南東コーナーのわずかな部分で古墳時代後期の27号住居と重複しており、本住居は27号住居により埋没土を床面近くまで掘り込まれている。本住居が深く掘り込まれているために、住居範囲は確認できた。

形状 少し歪んではいないが、ほぼ方形である。規模は東西南北方向ともほぼ7.3mである。

面積 45.2m<sup>2</sup> 方位 N-19°-E

壁・床面 全体に残りは良好であり、壁面の高さは北壁面部分で60cmである。床面は、住居の中央部、4柱穴を結ぶ範囲内が固く、中でも東側がより硬度を有していた。

炉 床面中央部分やや北に炉が造られていた。床面より約2cmほど低くなり、中央部が焼けて焼土化していた。炉内の西に厚さ3cmほどの薄い石が置

かれていた。炉は南北方向がやや長く、規模は東西60cm南北70cmである。

周溝 南壁面の一部で確認された。幅は12cm前後で深さは5cm前後である。

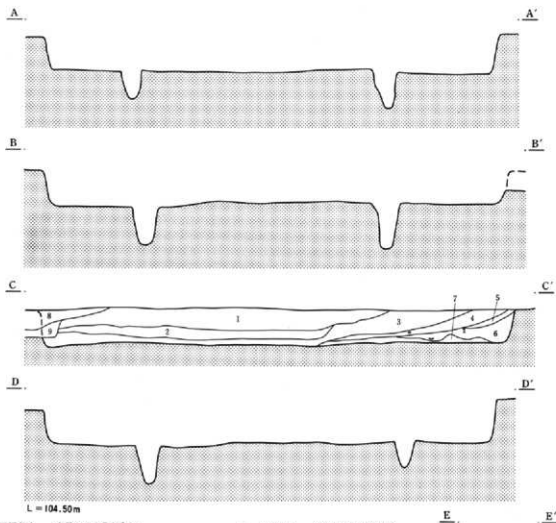
柱穴 4本と柱穴3のとなり、添柱あるいは掘り直した柱穴1本の計5本掘られていた。柱穴1は直径52cm、床面からの深さ62cm、柱穴2は長径50cm短径42cm、床面からの深さ75cm、柱穴3は直径40cm、床面からの深さ69cm、柱穴4は直径35cm、床面からの深さ44cm、柱穴5は直径33cm、床面からの深さ47cmである。

貯蔵穴 掘られていなかった。

遺物 図示した86個体のうち、床面出土の土器は29個体、その中で完形、ほぼ完形の土器は14個体であった。さらに、壁寄りの床面から出土した個体としては北西隅部分出土の壺(折り返し口縁)(47)があるが、これも柱穴3・4出土の破片と接合状態にある。

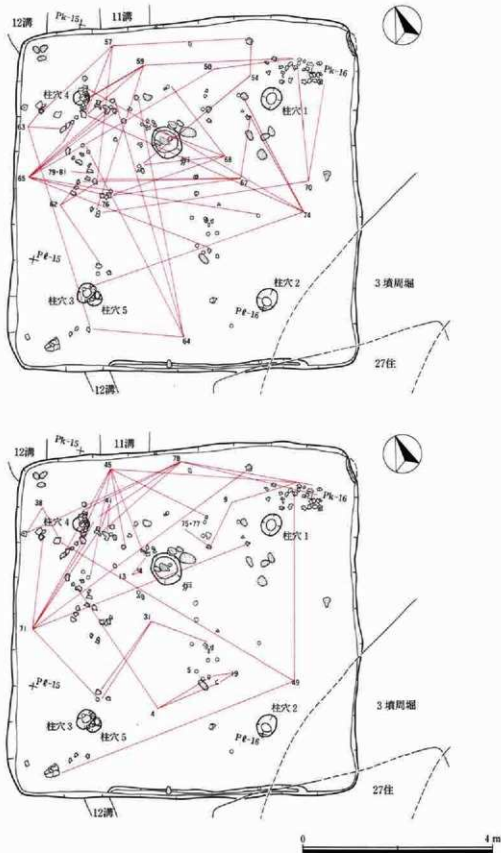
なお、埋没土中から完形の甕(86)、口縁部を欠損する須恵器壺(85)が出土している。近接する甕付住居に伴うものであろうか。(観P16～22)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



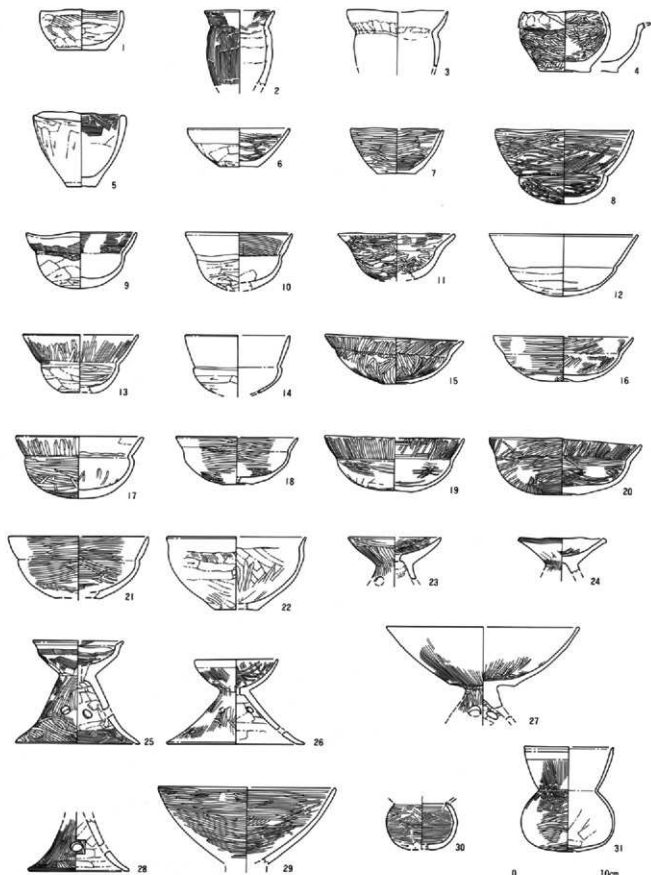
- |          |                      |             |             |
|----------|----------------------|-------------|-------------|
| 1. 黒褐色土  | 少量のAs-Cを含む。          | 5. 黒褐色土     | 多くのAs-Cを含む。 |
| 2. 黒褐色土  | 多くの暗灰褐色土と少量のAs-Cを含む。 | 6. 灰褐色土     | 多くの暗褐色土を含む。 |
| 3. 暗灰褐色土 | 少量の黒褐色土とAs-Cを含む。     | 7. 暗灰褐色土    | わずかに軽石粒を含む。 |
| 4. 暗褐色土  | 少量のAs-Cを含む。          | 8. 3号墳周堀埋没土 |             |
|          |                      | 9. 27号住居埋没土 |             |

第61図 3区28号住居(2)

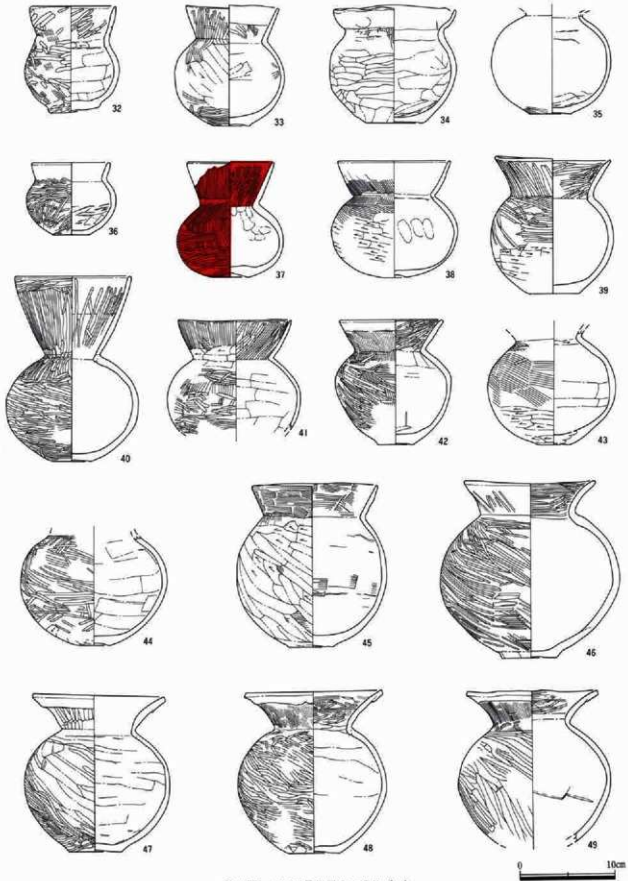


第62図 3区28号住居(3)

第4章 輸出した遺構と遺物

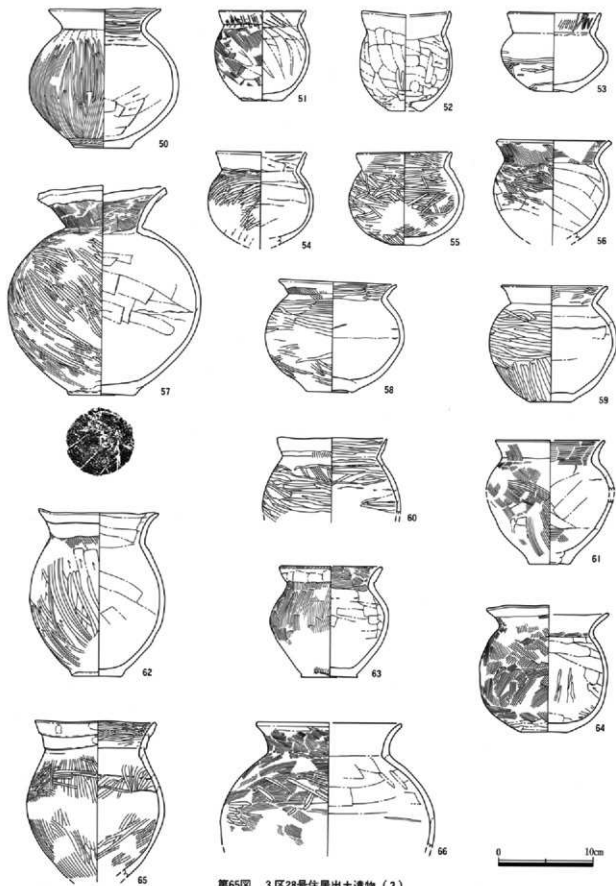


第63図 3区28号住居出土遺物(1)

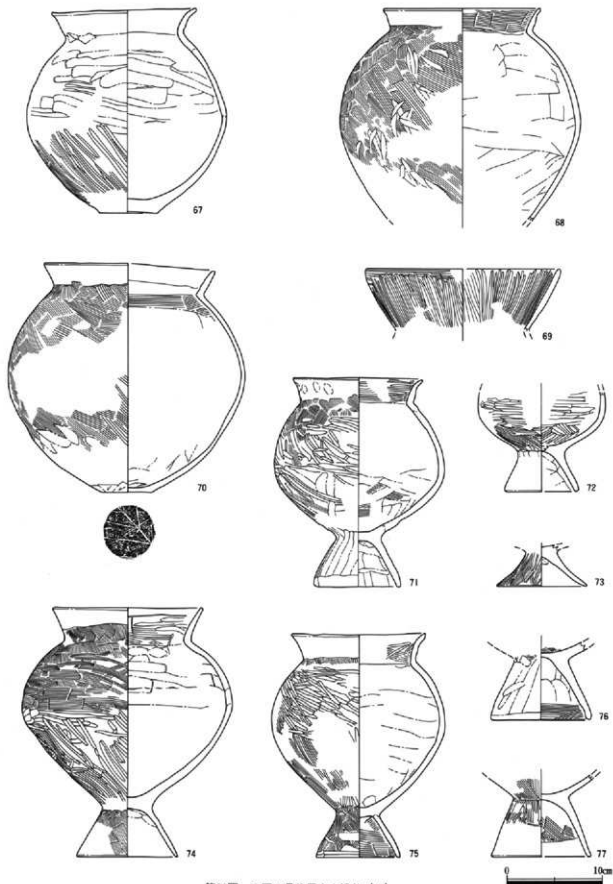


第64図 3区28号住居出土遺物(2)

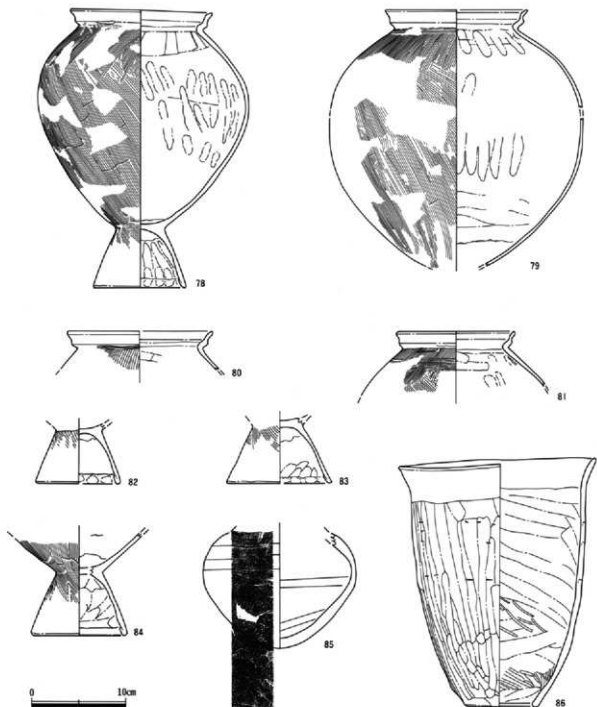
第4章 検出した遺構と遺物



第65図 3区28号住居出土遺物(3)



第66図 3区28号住居出土遺物(4)



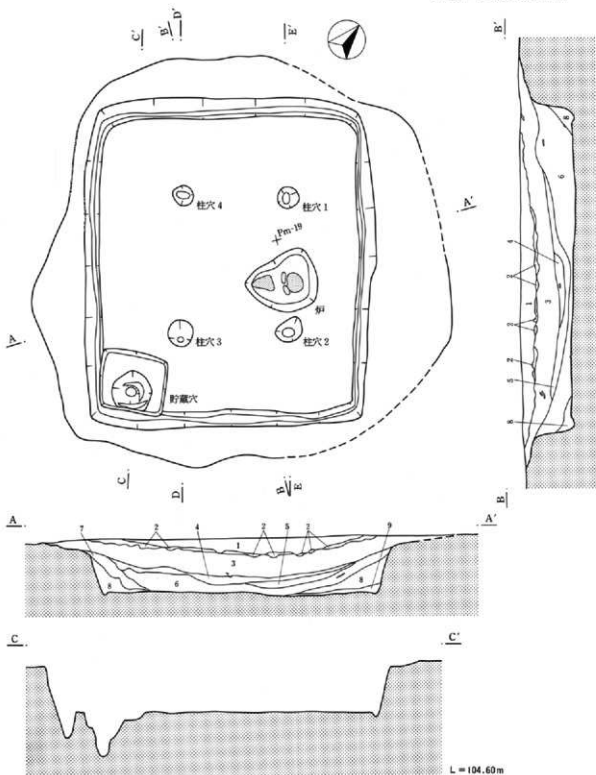
第67図 3区28号住居出土遺物(5)

3区 29号住居(第68～76図 P.L.12・35～39)  
 位置 Pl・m-18・19グリッド  
 概要 深くて残りの良い住居であり、大量の遺物が、住居廃棄後投げ込まれて出土した。住居が深い  
 ためか確認面では方形では無く、円形に近い輪郭で

あった。この確認面の埋没土を掘り込むと、やがて  
 方形の住居プランになってゆく。この確認段階での  
 落ち込み部分の範囲も図示した。

重複 埋没土上面を耕作溝により少し削られてい  
 るが、住居や土坑等の重複は無い。

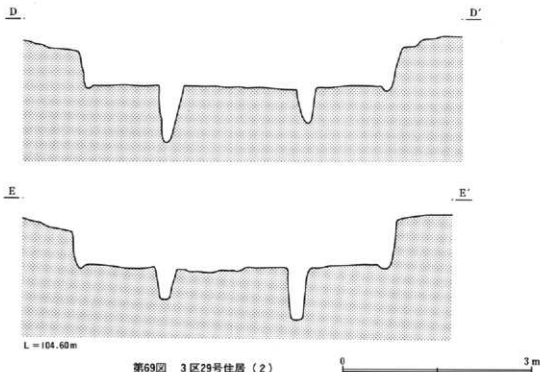




- |   |   |
|---|---|
| <p>1. 茶褐色土 少量のHr-FAを含む。</p> <p>2. 明黄褐色土 Hr-FA層</p> <p>3. 黒褐色土 多くのAs-Cを含む。</p> <p>4. 黒褐色土 多くのAs-Cを含む。多くの土器がこの層中より出土。</p> <p>5. 暗褐色土 多くのAs-Cを含む。多くの土器がこの層中より出土。</p> <p>6. 淡褐色土 多くのAs-Cと少量の炭化物を含む。</p> | <p>7. 淡褐色土 少量のAs-Cと淡黄色土と黒色土をブロック状に含む。</p> <p>8. 淡褐色土 少量のAs-Cと淡黄色土をわずかに含む。</p> <p>9. 暗褐色土 少量のAs-Cと黒色土小ブロック・淡黄色土小ブロックを含む。</p> |
|---|---|

第68図 3区29号住居(1)

0 3m



第69図 3区29号住居(2)

形状 確認段階での外郭線では歪んだ楕円形に近い方形であり、規模は6.5m前後である。明瞭な掘り込みの確認できる形状では南北方向にやや長い長方形を呈している。規模は南北5.2m、東西方向4.5mである。

面積 23.2m<sup>2</sup> 方位 N-48°-E

壁・床面 全体に残りは良好であり、壁面の高さは東壁面部分で82cmである。

炉 床面中央部分やや東に炉が造られていた。床面より約3cmほど低くなり、中央部が焼けて焼土化していた。焼土化していた部分は炉内の西側にも別にあった。炉内の東側の焼土に接して厚さ7~8cmほどの石が2個置かれていた。炉は東西方向がやや長く、規模は南北96cm東西115cmである。

周溝 壁面下全面に掘られていた。幅は15cm前後で深さは5cm前後である。

柱穴 4本掘られていた。柱穴1は直径34cm、床面からの深さ79cm、柱穴2は長径44cm短径35cm、床面からの深さ50cm、柱穴3は直径41cm、床面からの深さ86cm、柱穴4は直径34cm、床面からの深さ53cmである。

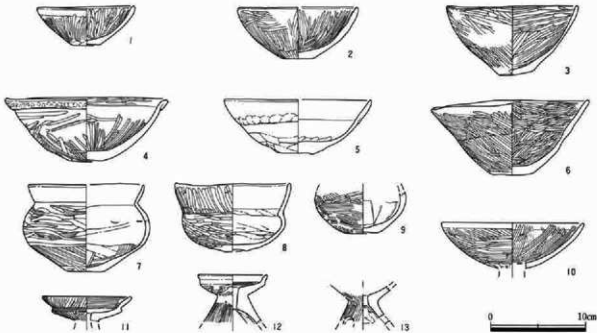
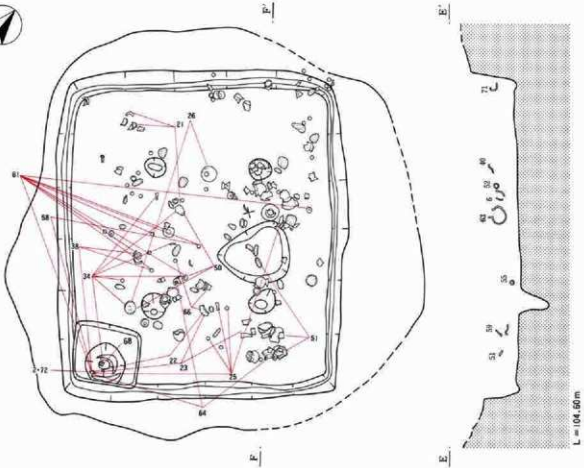
貯蔵穴 南西コーナー部分に掘られていた。丸い貯蔵穴の外側に深さ8cm前後掘られた方形の掘り込みがある。蓋の存在を想定したい。方形の掘り込みは長軸106cm短軸96cmである。貯蔵穴の規模は直径60cm床面からの深さ66cmと深い。

遺物 72個体の土器を図示した。その中のわずかに6個体が床面直上からの出土である。中央部から鉢(4)、壺(折り返し口縁)(26)、甕(50)が、西隅寄りから甕(51)が出土した。

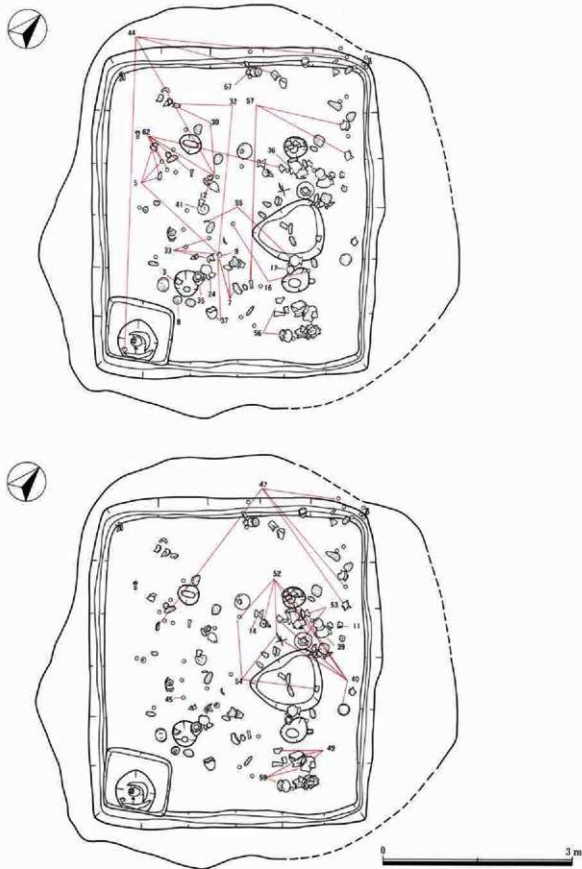
貯蔵穴内からの出土は鉢(2)や台付壺(単口縁)(59・61)をはじめ11個体を数え、床面出土破片と接合関係を有する。

杯(72)も貯蔵穴内出土であるが、その特徴は竈付住居に伴うものである。(観P22~27)

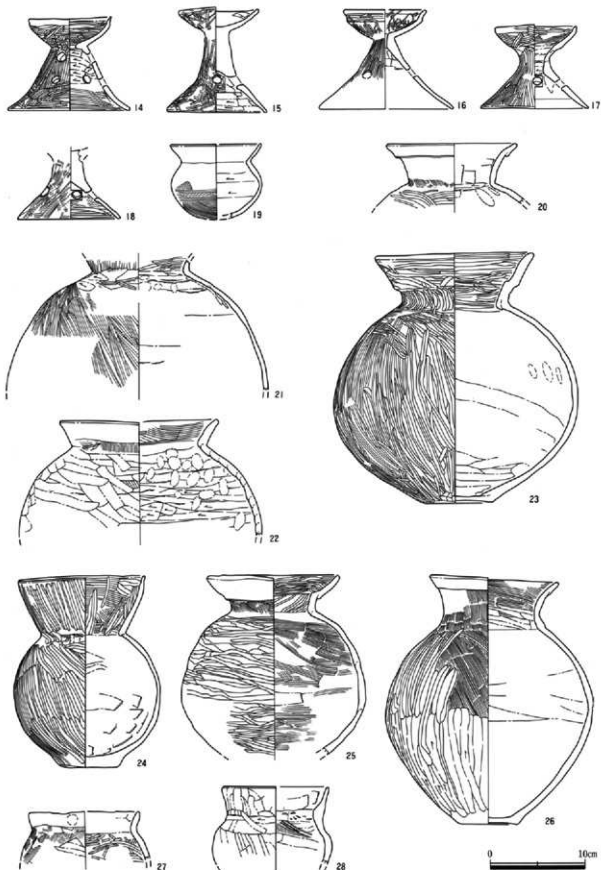
所見 出土遺物から、4世紀中頃~後半の住居と考えられる。



第70図 3区29号住居(3)と出土遺物(1)

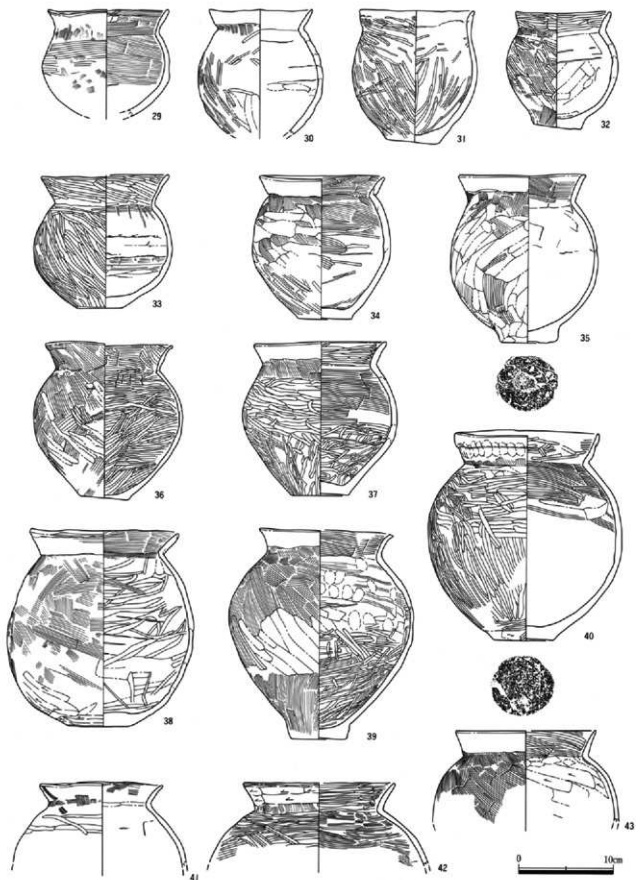


第71図 3区29号住居(4)

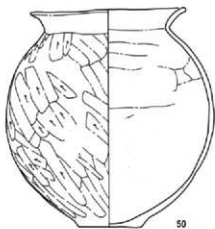
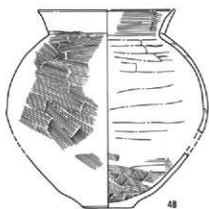
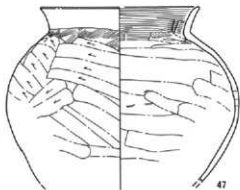
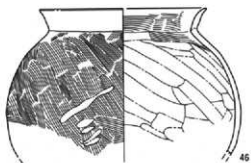
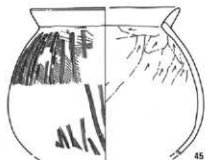


第72図 3区29号住居出土遺物(2)

第4章 検出した遺構と遺物

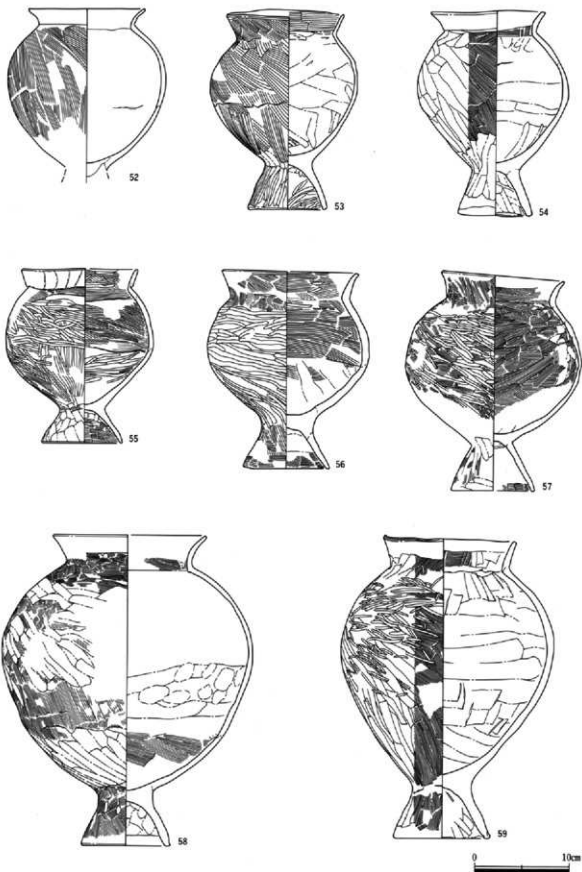


第73図 3区29号住居出土遺物(3)



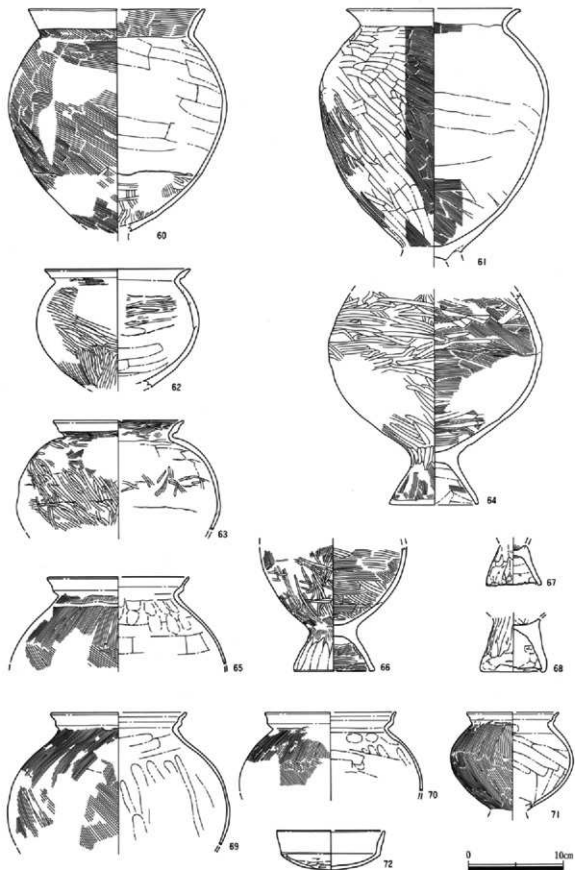
第74図 3区29号住居出土遺物(4)





第75図 3区29号住層出土遺物(5)





第76図 3区29号住居出土遺物(6)

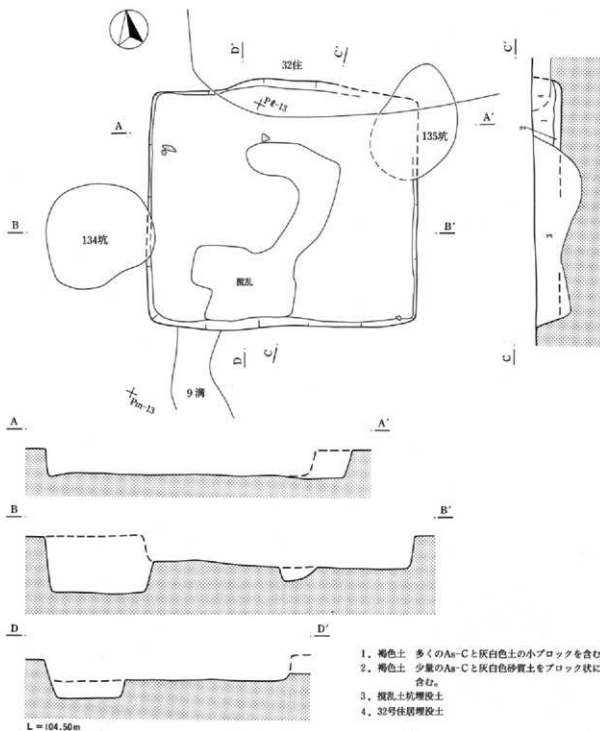
3区 31号住居 (第77・78図 P.L.12・40)

位置 P1-12・13グリッド

重複 住居の北側の壁面近くで同じ古墳時代前期の32号住居と重複しており、32号住居により床面近くの覆土が掘り込まれていた。また、住居の北東コ

ーナ一部分で135号土坑、西壁面南寄りで134号土坑と重複しており、本住居は両土坑により床下部分まで掘り込まれている。さらに住居中央部も覆乱をうけており、一部床下部分まで掘り込まれていた。

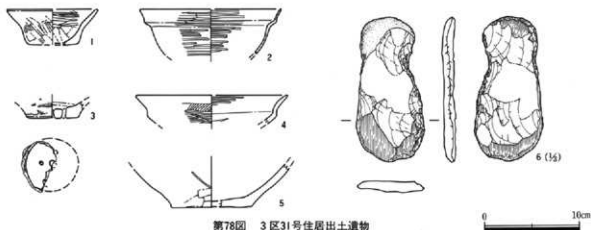
形状 北壁面部分の残りが悪くやや不自然である



1. 褐色土 多くのAs-Cと灰白色土の小ブロックを含む。
2. 褐色土 少量のAs-Cと灰白色砂質土をブロック状に含む。
3. 覆乱土坑埋設土
4. 32号住居埋設土

第77図 3区31号住居





第78図 3区31号住居出土遺物

が、東西方向にやや長い長方形をしている。規模は東西方向4.3m、南北方向3.8mである。

面積 16.3㎡ 方位 N-13°-E

壁・床面 重複部分以外では全体に残りは良好であり、壁面の高さは東壁面部分で50cmである。

炉・周溝・柱穴 掘られていなかった。

### 3区 32号住居 (第79・80図 P L. 12・40)

位置 Pj・k-12・13グリッド

重複 住居の南壁面近くで同じ古墳時代前期の31号住居と重複しており、本住居が31号住居の床面付近までの埋没土を掘り込んでいる。时期的に近いために住居埋没土に違いがほとんどなく、明瞭な重複関係は確認できなかったが、埋没土の微妙な差から本32号住居が新しいものと判断した。また、住居内の東側で133号土坑、南壁面部分で135号土坑と重複しており、本住居は両土坑により床下部分まで掘り込まれている。さらに北西コーナー部分で137号土坑と重複しており、住居覆土の多くを削り取られている。住居中央部や北東壁面付近も攪乱をうけており、一部床下部分まで掘り込まれていた。

形状 東西方向がやや長い長方形をしている。規模は東西方向6.8m、南北方向6.0mである。

面積 35.6㎡ 方位 N-14°-E

壁・床面 重複部分以外では全体に残りは良好であり、壁面の高さは東壁面部分で45cmである。

遺物 少量の土器が出土したがいずれも埋没土中からの出土である。有孔鉢(3)は底部に焼成前の小孔を複数有する。また、埋没土から打製石杵(6)が出土している。(観P27・28)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。

炉 床面中央部分やや北に炉が造られていた。床面より約5cmほど低くなり、中央部が焼けて焼土化していた。炉は南北方向がやや長く、規模は東西55cm南北86cmである。

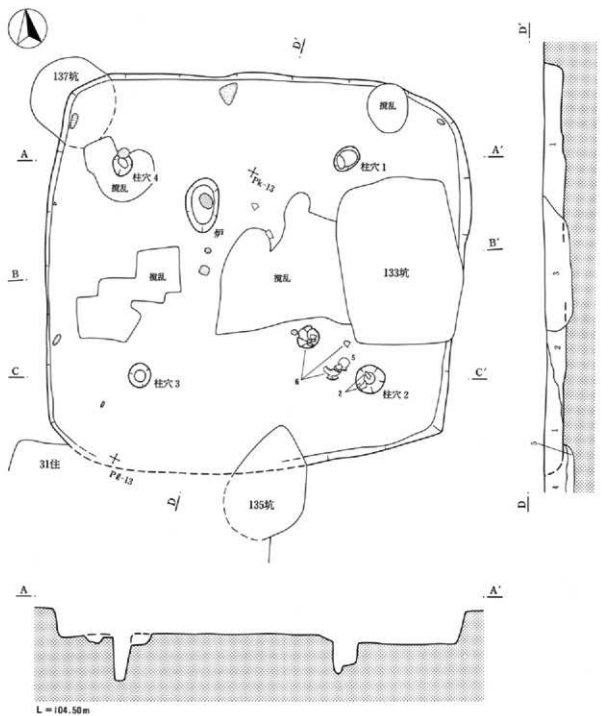
周溝 掘られていなかった。

柱穴 4本掘られていた。柱穴1は長径43cm短径32cm、床面からの深さ60cm、柱穴2は直径47cm、床面からの深さ77cm、柱穴3は直径38cm、床面からの深さ73cm、柱穴4は長径33cm短径30cm、床面からの深さ72cmである。

貯蔵穴 掘られていなかった。

遺物 床面直上から出土した土器は無かった。壺(5)・壺(折り返し口縁)(6)が床直上から7・8cm離れて、南東部分、柱穴2寄りから出土している。(観P28)

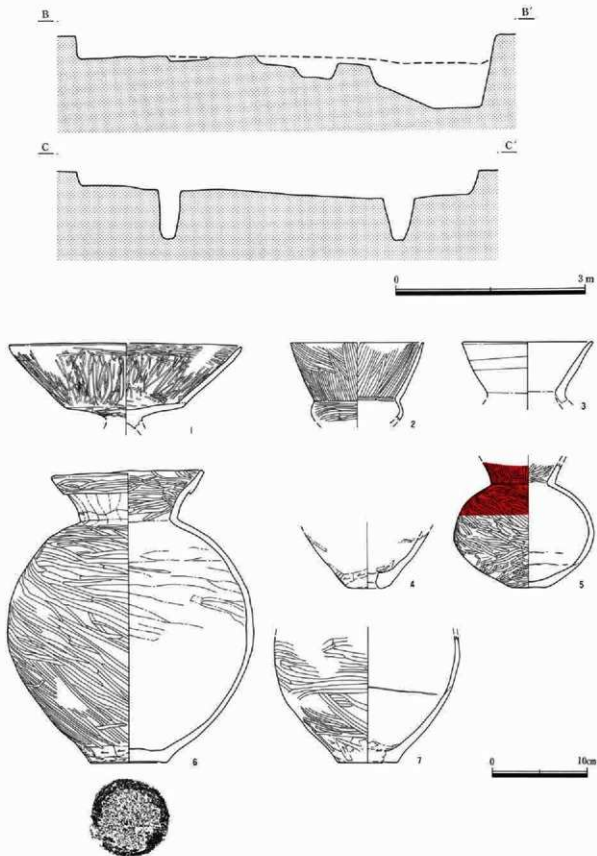
所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



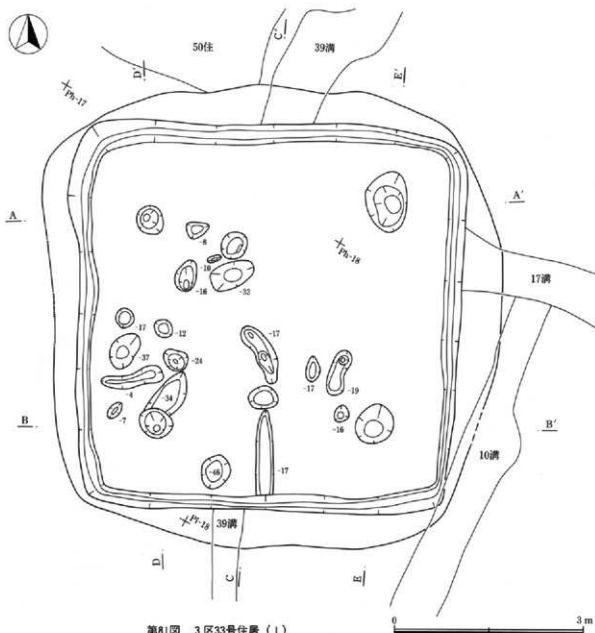
1. 褐色土 多くのAs-Cと灰白色土の小ブロックを含む。31号住居の埋設土との区別は明確でない。
2. 褐色土 褐色土と灰白色砂質土を含む。
3. 掘乱土坑埋設土
4. 31号住居埋設土
5. 31号住居床下埋設土

0 3 m

第79図 3区32号住居(1)



第80図 3区32号住居(2)と出土遺物



第81図 3区33号住居(1)

3区 33号住居(第81～87図 P.L.13・40・41)

位置 Pg・h-17・18グリッド

概要 深くて残りの良い住居であり、大量の遺物が、住居廃棄後投げ込まれて出土した。住居が深いため確認面では方形ではなく、円形に近い輪郭であった。この確認面の埋没土を掘り込むと、やがて方形になってゆく。この確認段階の住居の落ち込み部分の範囲も図示した。床面に多くの小穴が掘られていた。住居の掘り込みが深いために複層と考えるより、住居に関係したものと考えられるために全て

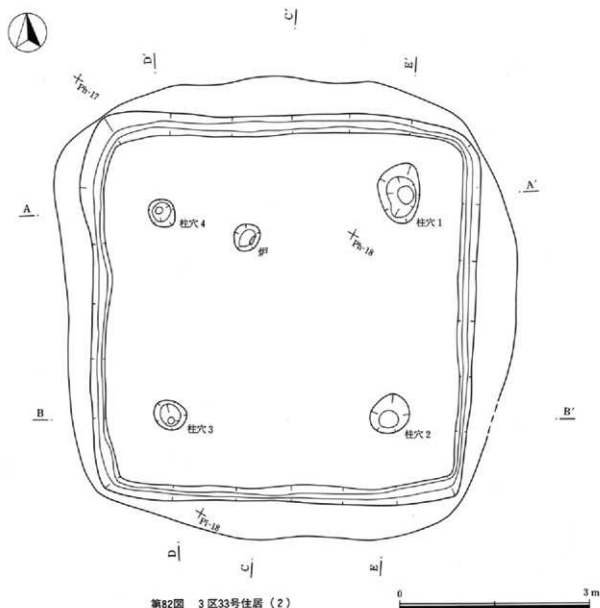
図示し床面からの深さを図上に数値で示した。

重複 住居の東で10・17号溝と、南と北で39号溝と重複しており、埋没土上面を削られている。他の住居や土坑等との重複は無い。

形状 確認段階での外郭線では円形に近い方形であり、規模は6.5～7.2mである。明瞭な掘り込みの確認できる形状ではほぼ方形となっている。規模は東西南方向とも6.1mである。

面積 34.2㎡ 方位 N-5°-E

壁・床面 全体に残りは特に良好であり、壁面の高



第82図 3区33号住居(2)

さは全体に70cm前後ある。

炉 焼土を伴う明らかな炉は確認されていない。床面中央部分やや北西に炉と思われるほぼ同形の掘り込みと、その中に小さな石が1個確認された。床面より約5cmほど低くなり、規模は直径46cmである。

周溝 壁面下全面に掘られていた。幅は20cm前後で深さは10cm前後である。

柱穴 4本掘られていた。柱穴1は長径95cm短径66cm、床面からの深さ93cm、柱穴2は長径65cm短径58cm、床面からの深さ88cm、柱穴3は長径52cm短径

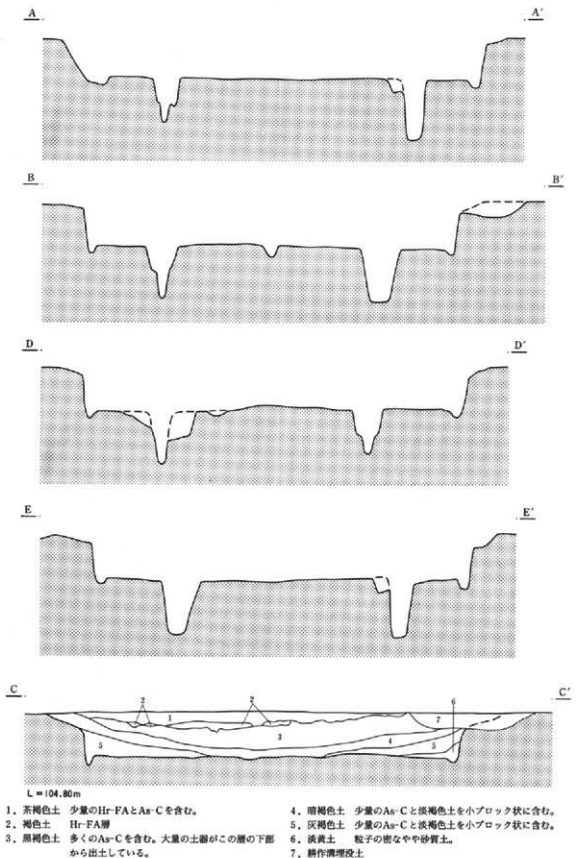
46cm、床面からの深さ83cm、柱穴4は長径46cm短径42cm、床面からの深さ67cmである。

貯蔵穴 掘られていなかった。

遺物 埋没土中から多量の土器が出土している。床面直上出土の個体もあるが欠損品、破片で、完存の個体は壺(34)のみである。壺(23)や壺(35)は柱穴内に破片が落ち込んでいた。なお、埋没土から手捏ね(1)が出土している。(観P28～31)

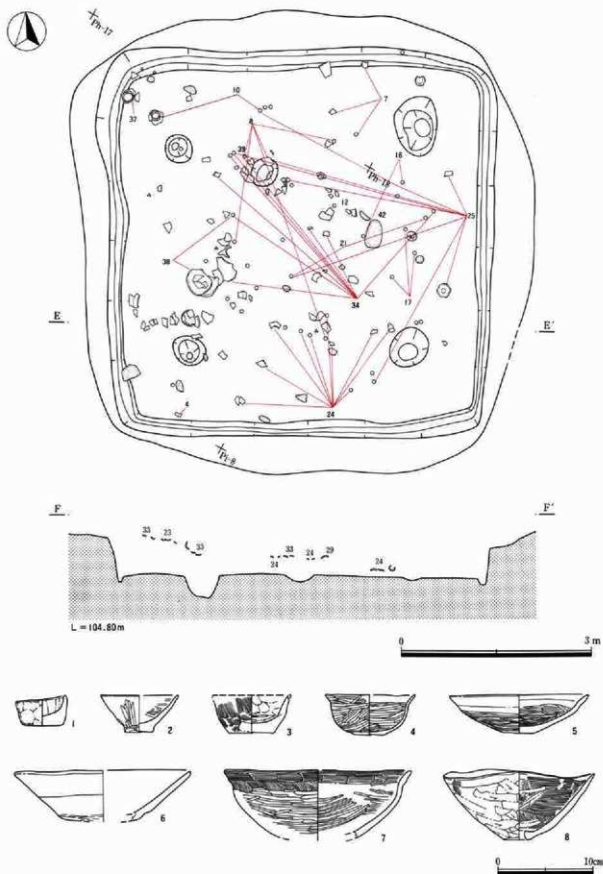
所見 出土遺物には5世紀代の資料が含まれるものの、4世紀後半の住居と考えられる。

第4章 検出した遺構と遺物



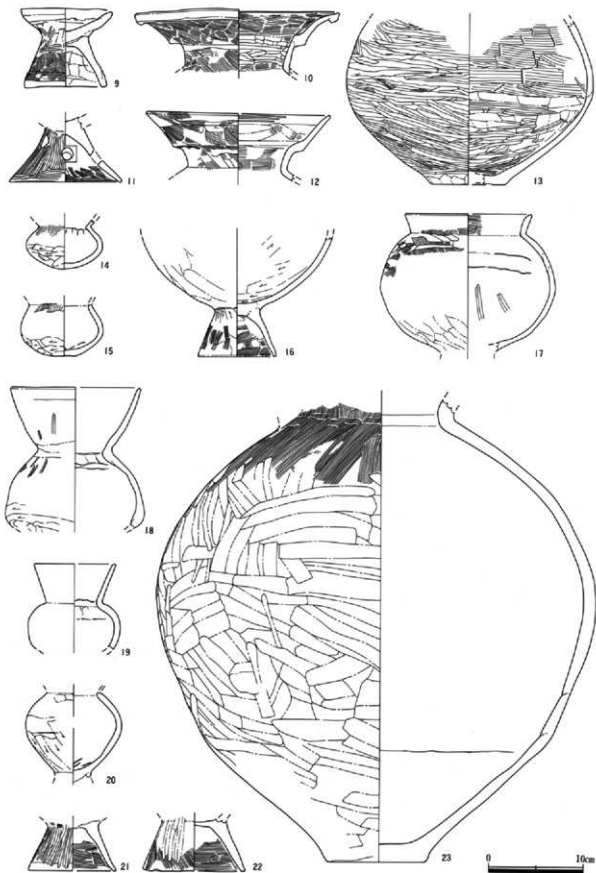
第83図 3区33号住居(3)



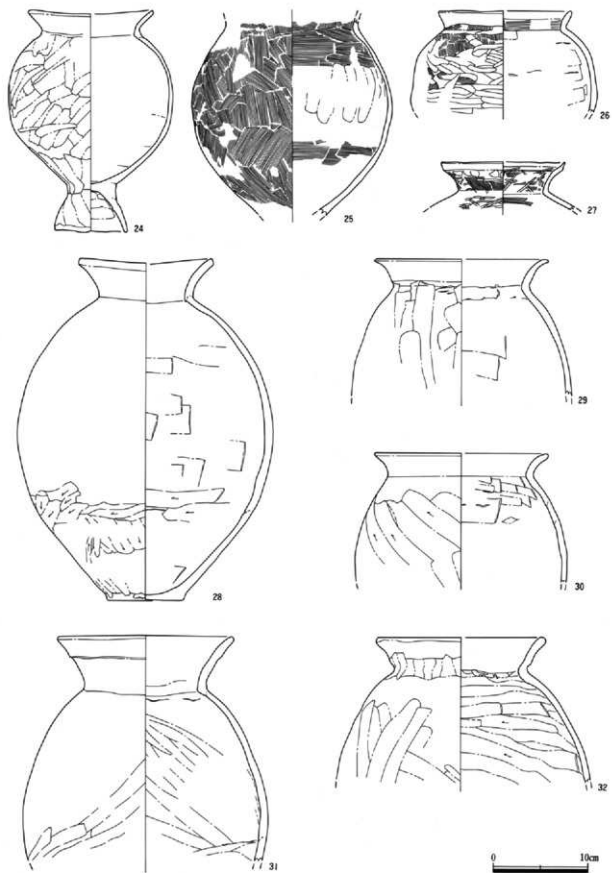


第84図 3区33号住居(4)と出土遺物(1)

第4章 検出した遺構と遺物

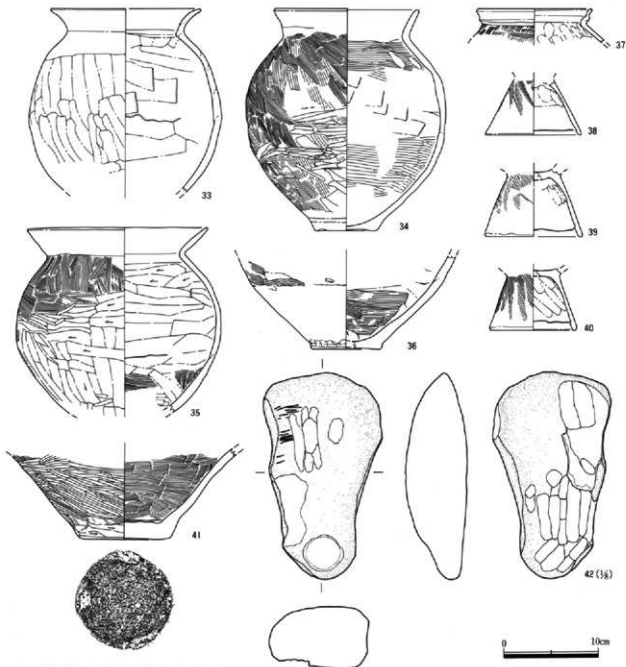


第85図 3区33号住居出土遺物(2)



第86図 3区33号住居出土遺物(3)

第4章 検出した遺構と遺物



第87図 3区33号住居出土遺物(4)

3区 35号住居 (第88図 P.L.14)

位置 Pm-12・13グリッド

概要 東西方向にやや長い小さな住居であり、炉や柱穴また貯蔵穴等掘られていなかった。規模は東西方向2.4m、南北方向2.25mである。壁高は残りの良い東壁面付近で5cm前後あるが他は2cm前後であり全体に非常に浅い。

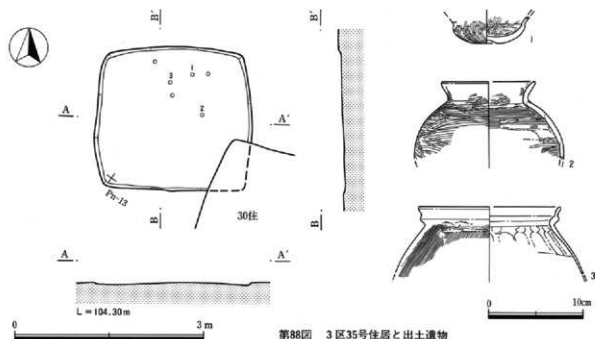
重複 3軒重複している住居中の1軒である。住

居の南東コーナー部分で、30号住居と重複しており、30号住居により床下部分まで掘り込まれていた。

面積 推定5.3㎡ 方位 N-5°-E

遺物 床面の北側寄りから少量の土器が出土した。埴(1)、壺(2)、台付甕(S字状口縁)(3)いずれも破片である。(観P31)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第88図 3区35号住居と出土遺物

3区 36号住居 (第89～92図 P.L. 14・42・43)  
 位置 Pe・f-15・16グリッド  
 重複 住居の西で19号溝と東で22号溝、南と東で20・38号溝、北で32号溝と重複しており、埋没土上面を削られている。他の住居や土坑等の重複は無い。埋没土は軽石を多く含む黒褐色土である。  
 形状 南北方向にやや長い長方形を呈している。規模は東西方向6.4m、南北方向6.7mである。  
 面積 37.5m<sup>2</sup> 方位 N-47°-E  
 壁・床面 掘り込みは浅いが、全体に残りは良好である。壁面の高さは残りの良い東壁面部分で40cmである。床面は炉周辺を中心に北側半分が踏み固められていた。  
 炉 焼土は残っていないが、床面中央部分やや西に炉と思われる掘り込みと小さな石が1個確認された。石は炉内の南側に炉面を2cmほど掘り込んで固定されていた。石の大きさは幅18cm厚さ10cmである。炉の規模は直径57cmで床面からの深さは5cmである。

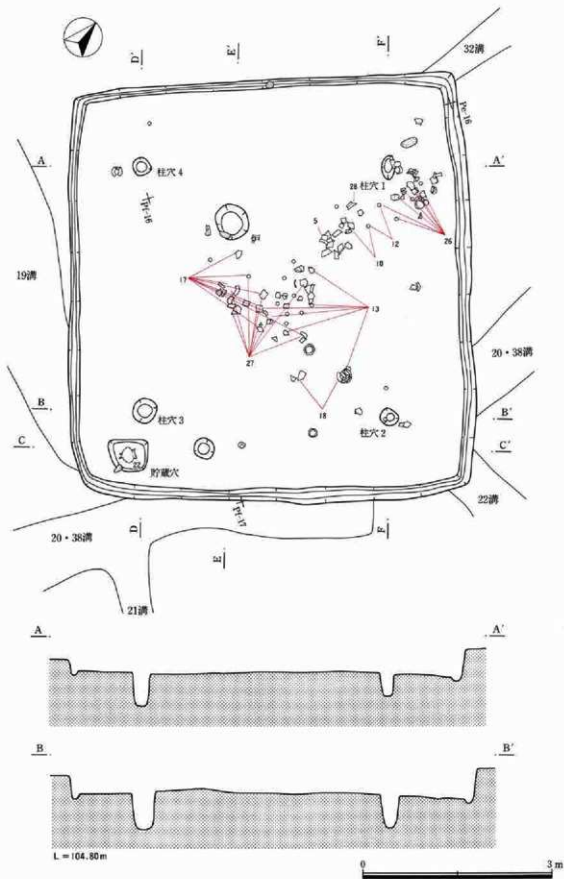
周溝 壁面下全面に掘られていた。幅は15cm前後で深さは5cm前後である。

柱穴 4本掘られていた。柱穴1は長径38cm短径21cm、床面からの深さ35cm、柱穴2は長径30cm短径26cm、床面からの深さ56cm、柱穴3は直径38cm、床面からの深さ60cm、柱穴4は直径30cm、床面からの深さ51cmである。

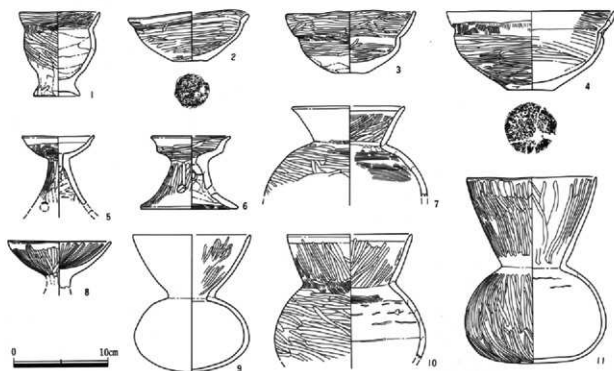
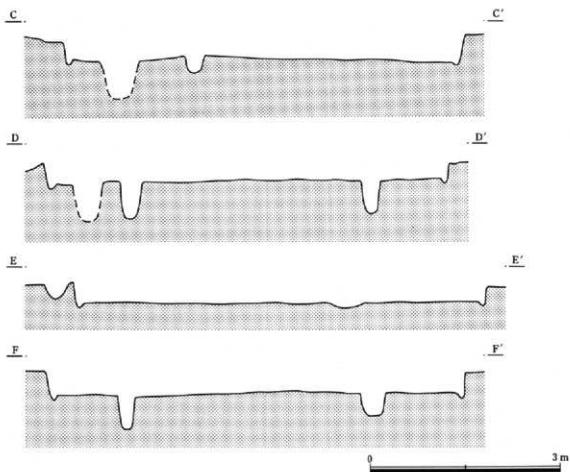
貯蔵穴 コーナー部分に掘られていた。中から台部を一部欠くがほぼ完形の台付甕(22)が出土した。貯蔵穴の規模は長径62cm短径51cm、深さは計測されていなかったため不明。

遺物 多くの遺物は床面近くから出土している。中央部を中心に、床面直上あるいはこれからわずかに離れた位置から完形、ほぼ完形の個体が出土している。北隅寄りから手捏ね状のミニチュア土器(1)が出土している。(観P31～34)

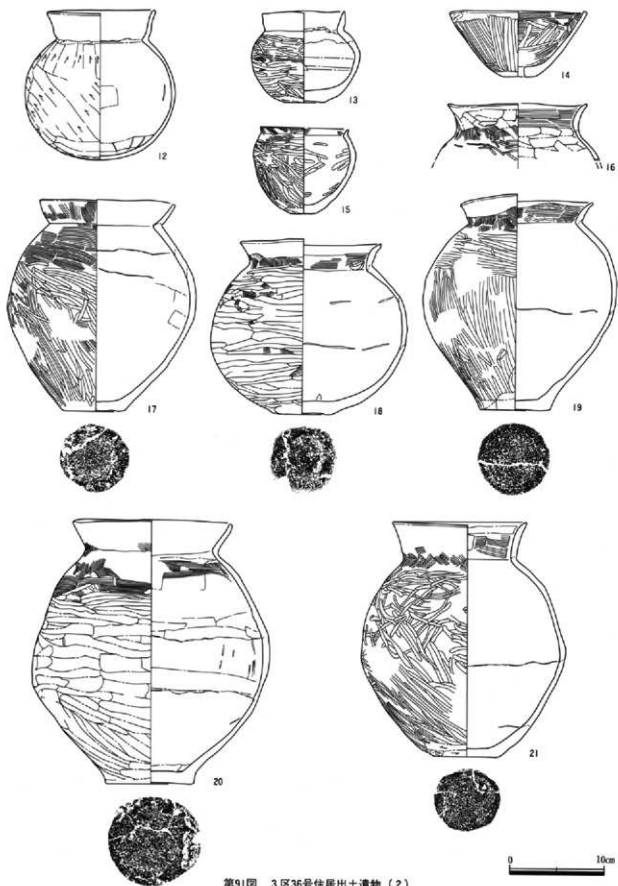
所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第89図 3区36号住居(1)

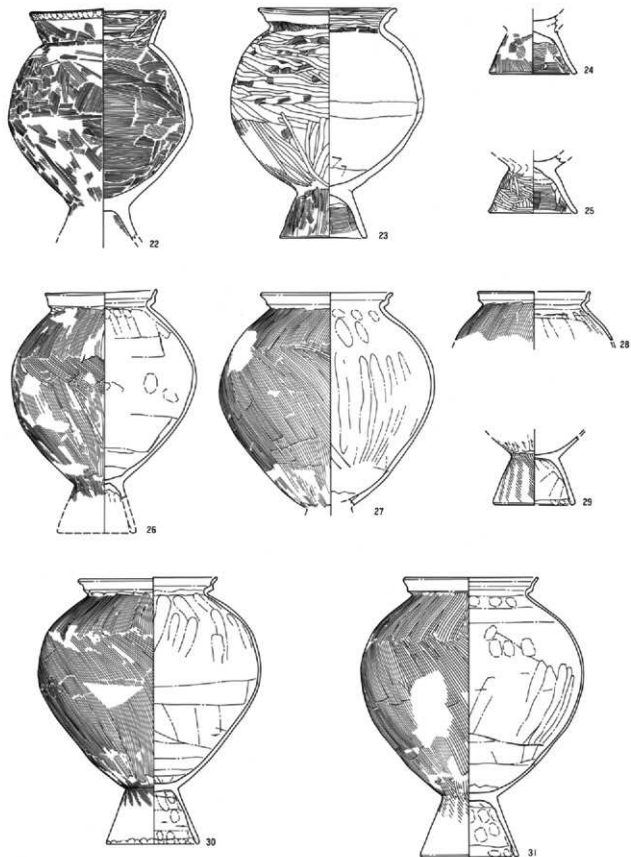


第90図 3区36号住居(2)と出土遺物(1)



第91図 3区36号住居出土遺物(2)





第92図 3区36号住居出土遺物(3)

3区 37号住居 (第93図 P.L.14)

位置 Q1-4グリッド

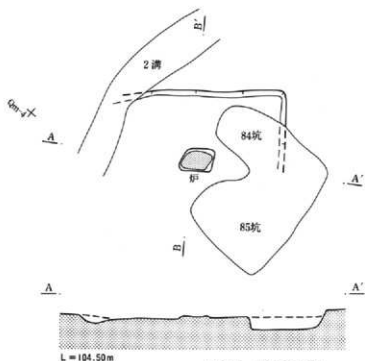
概要 住居の西側は2号溝により壊され、東側は84・85号土坑により壊されており、残っていたのは北東コーナー部分と炉だけである。住居規模は不明である。壁高は北壁面付近で12cm前後ある。

面積 不明 方位 N-7°-W

炉 多くの焼土を伴う炉が残っていた。大きき

は長径53cm短径36cm、炉が床面よりやや高くなっているが、床面を下げすぎたためであり、本来は床面と同じか、少し掘り込まれていたものと思われる。遺物 壺、甕の破片が出土したが図示に足る個体が無かった。

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第93図 3区37号住居



3区 38号住居 (第94図 P.L.14)

位置 Pm-13・14グリッド

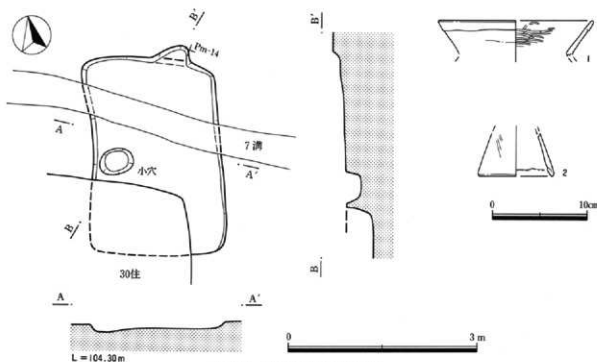
概要 南北方向にやや長い小さな住居であり、炉や柱穴また貯蔵穴等は掘られていなかった。規模は東西方向2.1m、南北方向3.0mである。壁高は残りの良い西壁面付近で10cm前後であり、全体に非常に浅い。柱穴はないが、楕円形の小穴が1個掘られており、規模は長径50cm短径42cm、床面からの深さ26cmである。北壁部分の一部が北側に20cm深さ7cmほど掘り込まれていた。本住居に伴うものかどうかは確認できなかった。

重複 3軒重複している住居中の1軒である。住居の南西コーナー部分で、30号住居と重複しており、30号住居により床下部分まで掘り込まれていた。また東西方向に掘られている7号溝により床下部分まで掘り込まれていた。

面積 推定6.3m<sup>2</sup> 方位 N-6°-E

遺物 埋没土中から少量の小破片が出土している。(観P34)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第94図 3区38号住居と出土遺物

## 3区 39号住居 (第95・96図 P.L.14)

位置 Qb・c-5グリッド

重複 住居の北西で2号溝と、南西部分で耕作溝と、南東コーナー部分は149号土坑と重複し、本住居は床下部分まで掘り込まれていた。また、北端部分は調査区域外である。

形状 東西方向に長い長方形を呈している。規模は東西方向4m、南北方向3mである。

面積 推定11.5m<sup>2</sup> 方位 N-20°-W

壁・床面 掘り込みは浅く残りが悪い。壁面の高さは残りの良い北壁面部分で11cmである。

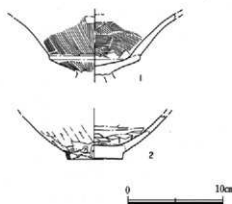
炉 住居床面の南寄りに焼土が確認された。あたかも炉のようである。通常の炉が床より5cm前後低くなっているが、この焼土は床面より10cm前後高い位置となっている。しかし、この焼土は投げ込まれたものではない。この焼土を炉としたなら造られた位置が床面中央より北であるためにこの点でも不自然であるが、ここでは一応炉として扱い報告する。炉の規模は長径40cm短径28cmで、床面からの深さは11cmと深い。

小穴 明らかな柱穴は掘られていなかったが、小穴が3個掘られていた。小穴1は長径53cm短径35cm、床面からの深さ13cm、小穴2は長径22cm短径20cm、床面からの深さ8cm、小穴3は長径33cm短径17cm、床面からの深さ29cmである。

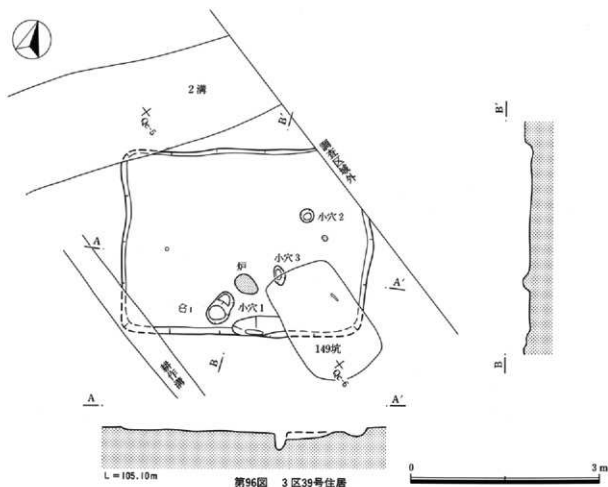
遺物 埋没土中から少量の破片が出土した。

(観P34)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



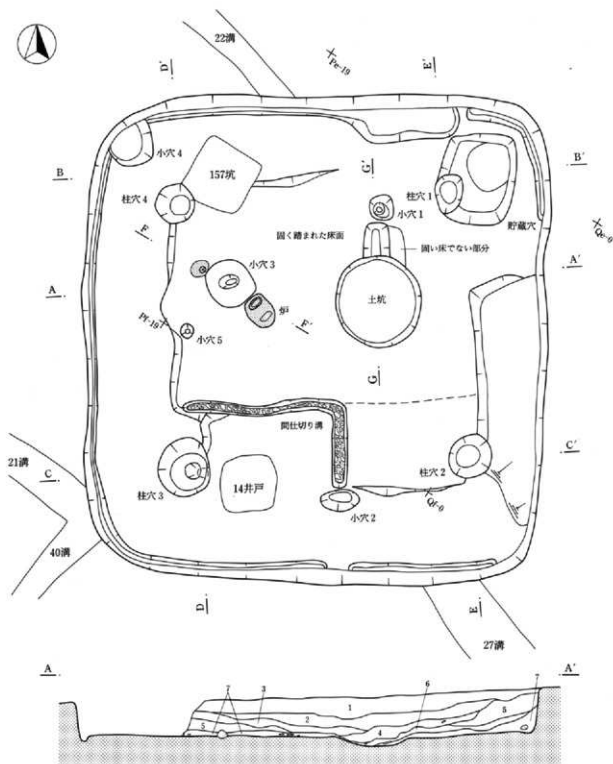
第95図 3区39号住居出土遺物



第96図 3区39号住居

3区 40号住居 (第97~105図 P.L.15・44~47)  
 位置 Pe-18・19、Pf-19、Qe-0 グリッド  
 重複 住居の西で21・40号溝、北で22号溝、南で27号溝と重複し埋没土上面が削られていた。また北西部分では157号土坑と南西部分で14号井戸と重複し、本住居の床下部分まで掘り込まれていた。  
 形状 南北方向にやや長い長方形を呈している。規模は東西方向7.4m、南北方向7.6mである。  
 面積 46.7㎡ 方位 N-6°-E  
 壁・床面 4柱穴内側の床面は、踏み固められ固い床面となっていた。固い部分は貯蔵穴付近の壁面近くまで延びており、出入口の存在を想定される。踏み固められた4柱穴の内側と壁面側とは床面の高さが異なり、4柱穴の内側が一段低くなっている。南西部分では鉤手状の浅い溝があり、小さな石が多

く詰め込まれていた。あたかも壁面を築く基礎工事のようである。このように床面を使い分けている様子が伺える。床面中央に長径145cm短径137cm、床面からの深さ18cmの大きな土坑がある。土層断面図からみて、住居に伴う土坑であるが、このような例は他にないために用途不明である。壁面の高さは東壁面部分で68cmと深く、全体に残りが良い。  
 炉 床面中央より北に炉が造られている例が多いが、この住居では西に赤く焼けた面が2箇所確認された。おそらく石を持つ南東部分が炉と思われる。炉の規模は長径55cm短径40cmで床面からの深さは5cmと浅い。北西の床面の焼けた部分の規模は直径30cm床面からの深さは7cmである。  
 周溝 東壁面中央部分以外ほぼ全面にわたり壁面下に掘られていた。幅は15cm前後で深さは5cm前後



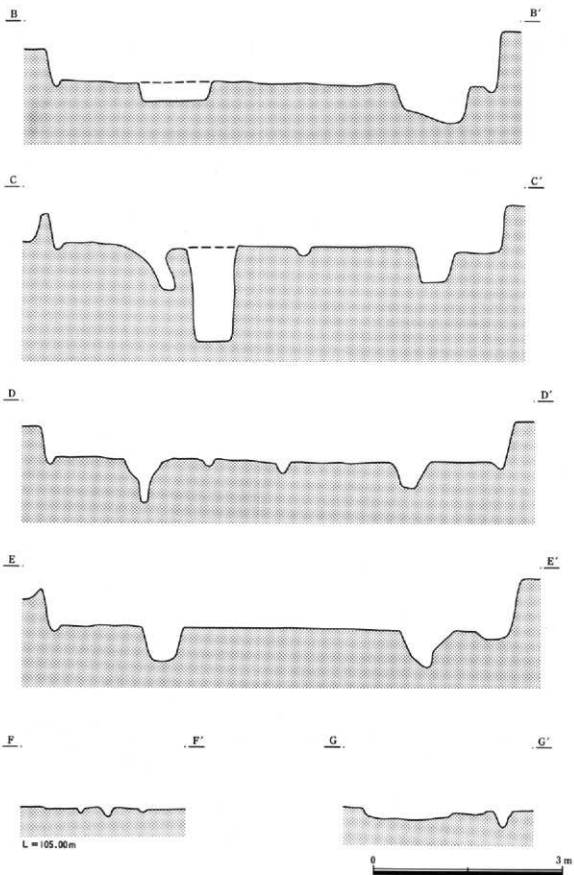
L = 105.00m

- |         |                             |          |                       |
|---------|-----------------------------|----------|-----------------------|
| 1. 暗褐色土 | 多くのAs-Cを含む。                 | 4. 黒色土   | 大量のAs-Cを含む。           |
| 2. 暗褐色土 | 多くのAs-Cと灰褐色の小ブロックを含む。       | 5. 暗灰褐色土 | 少量のAs-Cを含む。           |
| 3. 暗褐色土 | 多くのAs-Cと黒色土と灰黄褐色土の小ブロックを含む。 | 6. 黒褐色土  | 少量のAs-Cと黒色土の小ブロックを含む。 |
|         |                             | 7. 暗灰褐色土 | 地山の灰黄褐色土を含む。          |

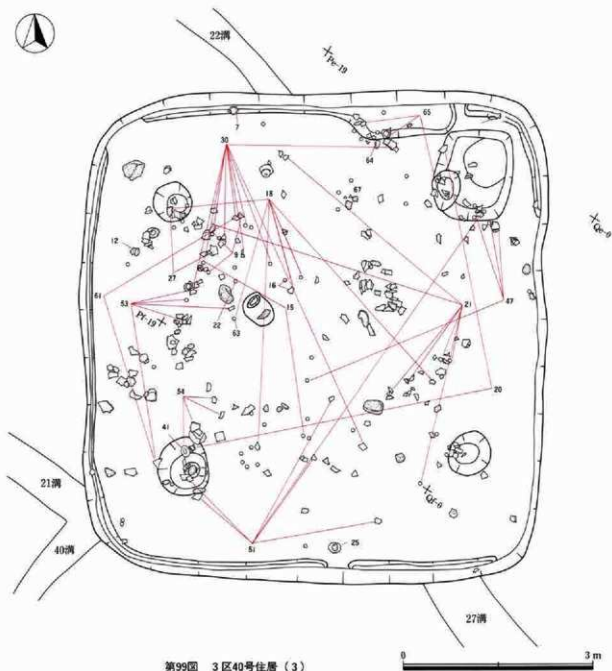
0 3m

第97図 3区40号住居(1)

第4章 検出した遺構と遺物



第98図 3区40号住居(2)



第99図 3区40号住居(3)

である。

貯蔵穴 北東コーナー部分に掘られていた。柱穴1を取り込む様な形となっているが、本来は別であり、柱穴1に接して掘られていたものと考えたい。現状で規模は長径142cm短径115cmで床面からの深さは66cmである。

柱穴 4本掘られていた。柱穴1は長径60cm短径40cm、床面からの深さ63cm、柱穴2は直径70cm、床

面からの深さ54cm、柱穴3は長径90cm短径80cm、床面からの深さ66cm、柱穴4は長径65cm短径60cm、床面からの深さ42cmである。

小穴 柱穴以外に小穴が5個掘られていた。小穴1は直径38cm、床面からの深さ31cm、小穴2は長径63cm短径35cm、床面からの深さ12cm、小穴3は直径70cm床面からの深さ15cm、小穴4は直径56cm、床面からの深さ11cm、小穴5は長径23cm短径20cm、床面

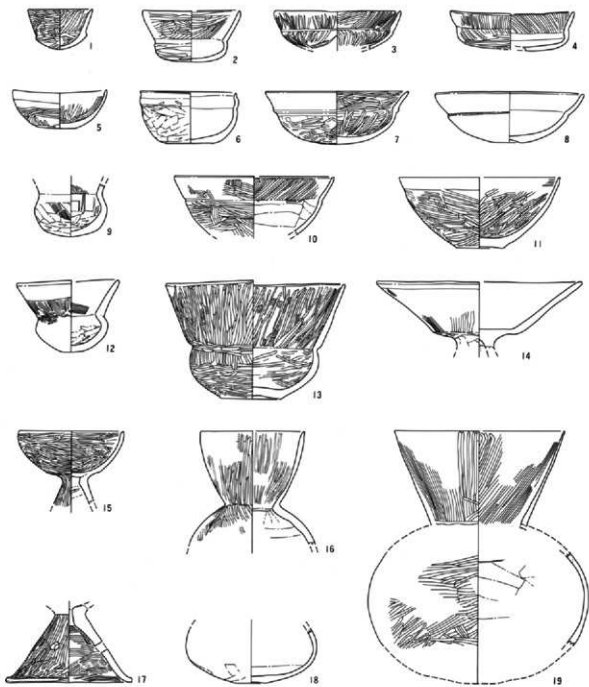
第4章 検出した遺構と遺物

からの深さ17cmである。

遺物 66個体の土器を図示したが、その中で床面直上出土の個体は22個体で、大多数が床面から10～20cm離れて出土している。欠損品、破片が多い中、北壁際出土の鉢(7)、北東部分出土の壺(30)は完形品である。中央やや北東寄りにある土坑内からは壺

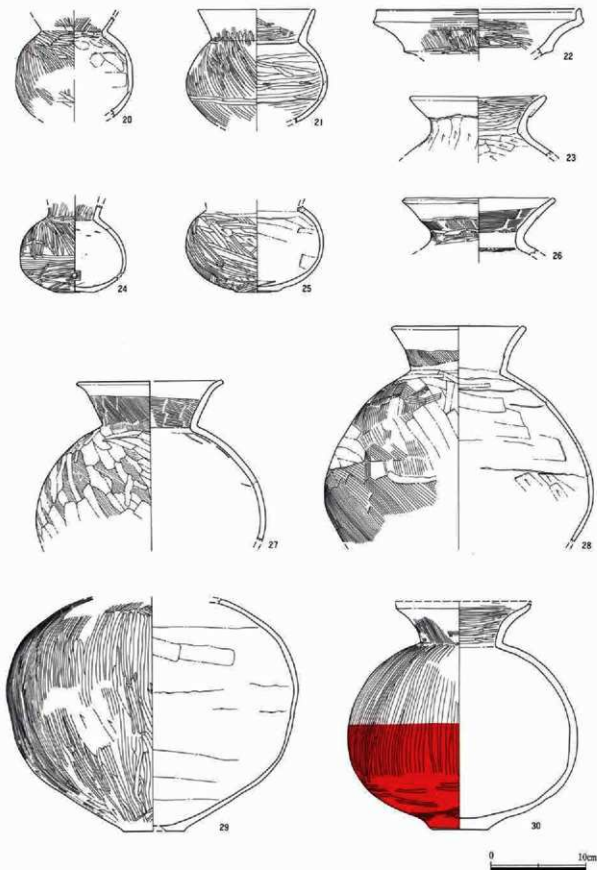
(32)・壺(折り返し口縁)(35)が出土している。土器の他に中央部奥壁寄りから管玉(67)が、埋没土中から軽石製品(68)が出土した。(観P34～39)

所見出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。

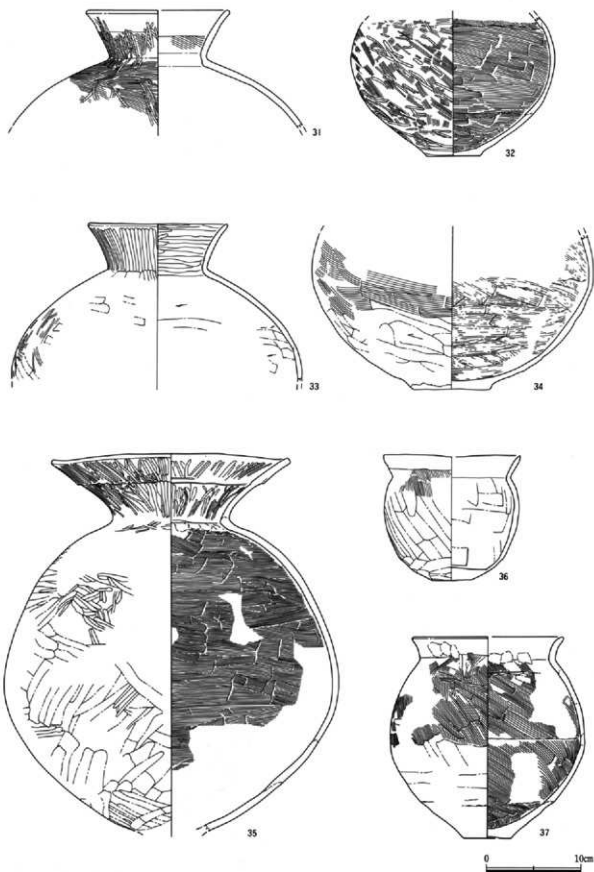


第100図 3区40号住居出土遺物(1)

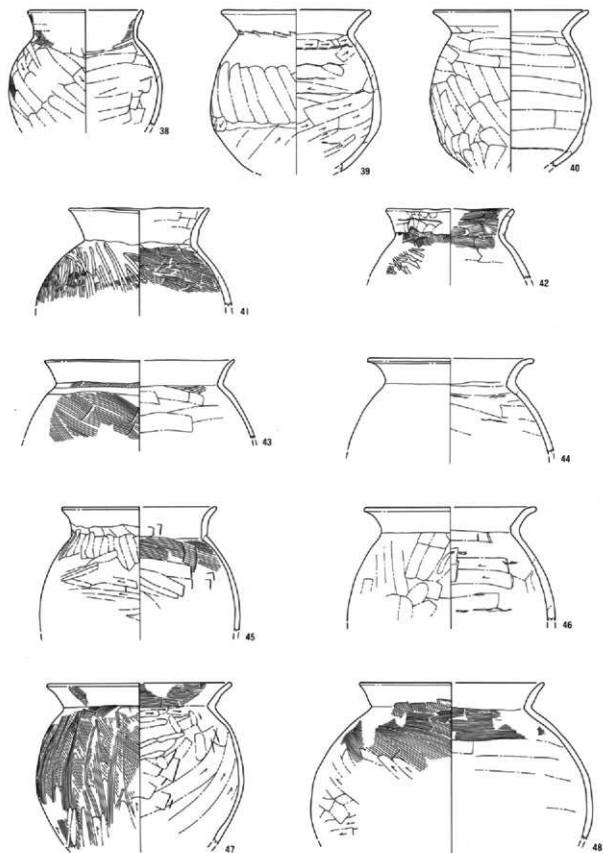




第101図 3区40号住居出土遺物(2)

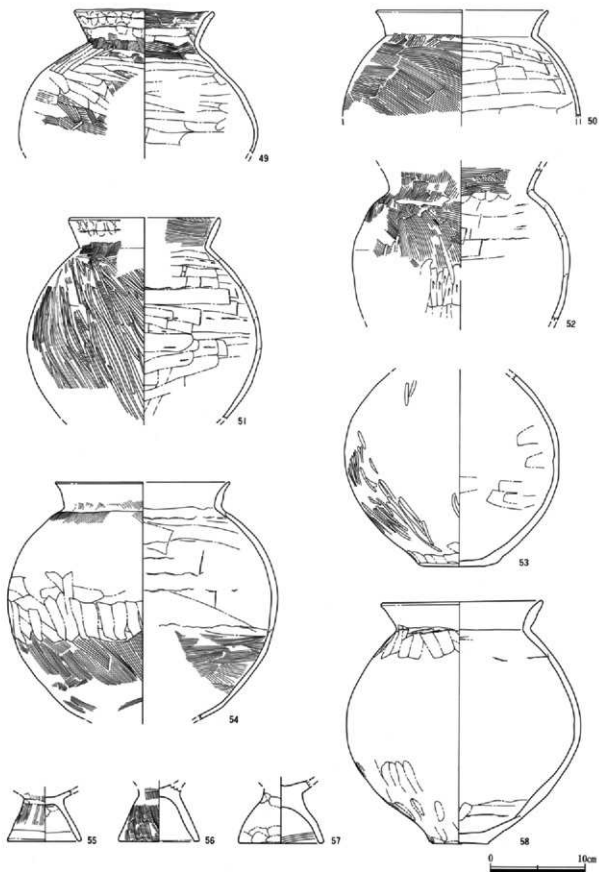


第102図 3区40号住居出土遺物(3)



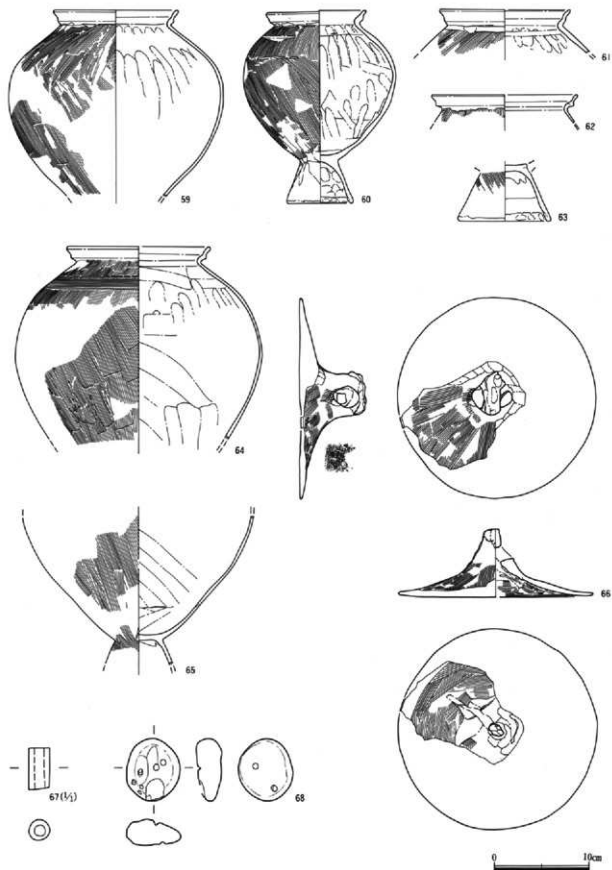
第103図 3区40号住居出土遺物(4)





第104図 3区40号住居出土遺物(5)

第1節 古墳時代前期の住居



第105図 3区40号住居出土遺物(6)

3区 41号住居 (第106・107図 P.L.15・47)

位置 Pb・c-15グリッド

概要 残りの良い住居であり、北壁中央部付近で192号土坑と重複しており、土坑により埋没土上面が削られていた。

形状 やや歪んでいるがほぼ正方形であり、規模は東西南北方向とも5.2mである。

重複 192号土坑と重複している。

面積 26.2㎡ 方位 N-38°E

壁・床面 床面は多少の凸凹はあるがほぼ平坦である。壁面の高さは東壁面部分で74cmと深く、全体に残りが良い。

炉 床面中央より北に炉が造られている例が多いが、この住居では西に焼土は残っていないが、小さな石を持つ炉らしい掘り込みがある。炉と考えて報告する。炉の規模は長径92cm短径60cmで床面からの深さは3cmと浅い。

周溝 北壁面中央部分以外ほぼ全面にわたり壁面

下に掘られていた。幅は15cm前後で深さは10cm前後である。

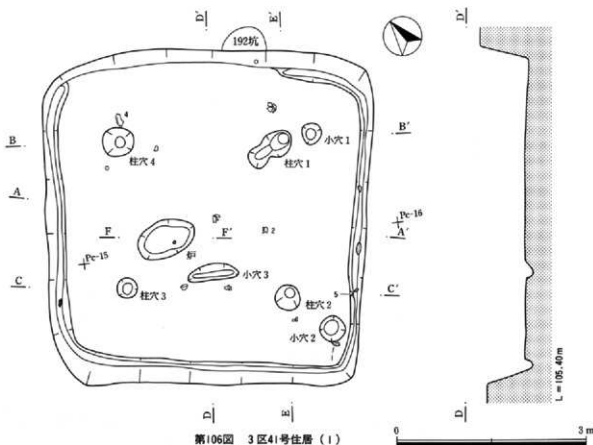
貯蔵穴 掘られていなかった。

柱穴 4本掘られていた。柱穴1の南西に接して深さ11cmと浅い小穴が掘られていた。柱穴1に伴うものか不明である。柱穴1は直径50cm、床面からの深さ79cm、柱穴2は直径40cm、床面からの深さ56cm、柱穴3は直径34cm、床面からの深さ35cm、柱穴4は直径50cm、床面からの深さ25cmである。

小穴 柱穴以外に小穴が3個掘られていた。小穴1は直径34cm、床面からの深さ44cm、小穴2は直径40cm、床面からの深さ63cm、小穴3は長径80cm短径26cm、床面からの深さ13cmである。

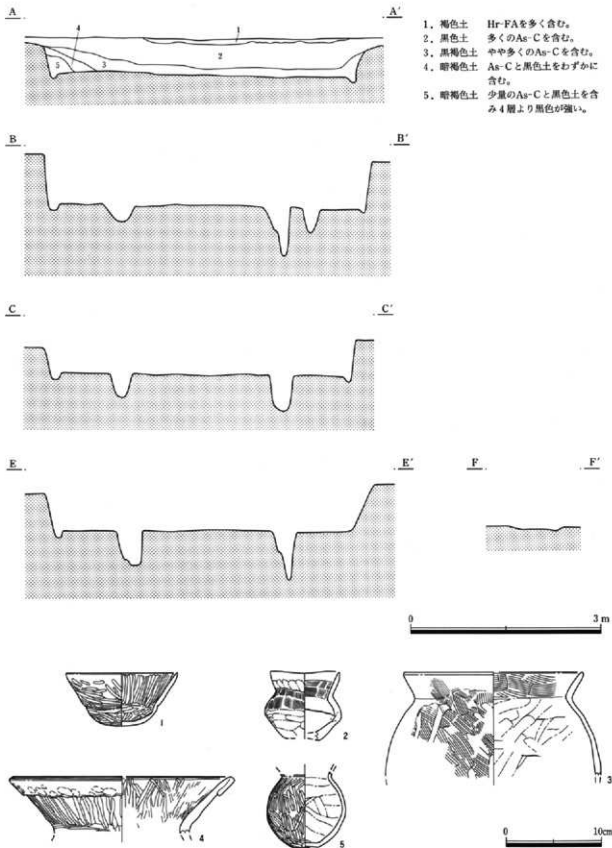
遺物 埴(1)は約3分の1の残存であるが、小穴2の際から出土した。他は埋没土中からの出土である。(観P39・40)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第106図 3区41号住居(1)

第1節 古墳時代前期の住居



第107図 3区41号住居(2)と出土遺物

3区 42号住居 (第108~110図 P.L.16・47)

位置 Pb・c-13・14グリッド

概要 北西部分に向かい低くなる地形であり、住居も北西部分が削られて残りが悪かった。埋没土は上層が灰褐色の砂壤土、中層が軽石を多く含む黒褐色土、下層が暗灰褐色土である。

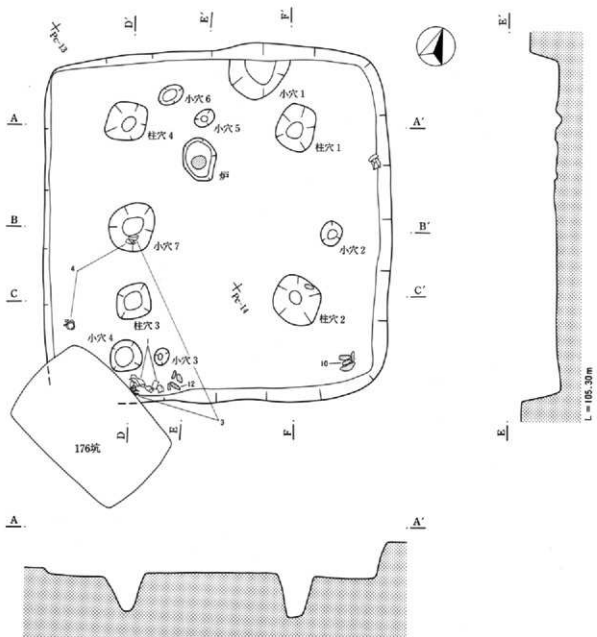
重複 南西コーナー部分で176号土坑と重複しており、この土坑により床下部分まで深く掘り込まれていた。

形状 やや歪んでいるがほぼ正方形であり、規模は東西南北方向とも5.5mである。

面積 推定28.6m<sup>2</sup> 方位 N-24°-W

壁・床面 床面は多少の凸凹はあるがほぼ平坦である。壁面の高さは東壁面部分で60cmと深いが、西壁面部分では15cmと浅い。床面は中央部から西壁寄りのそれが踏み固められていた。

炉 床面中央より北に浅く掘り込まれ、炉面が赤く焼けているが造られている。灰の残存は少な



第108図 3区42号住居 (1)



い。炉の規模は長径67cm短径52cmで床面からの深さは2cmと浅い。

周溝・貯蔵穴 両方とも掘られていなかった。

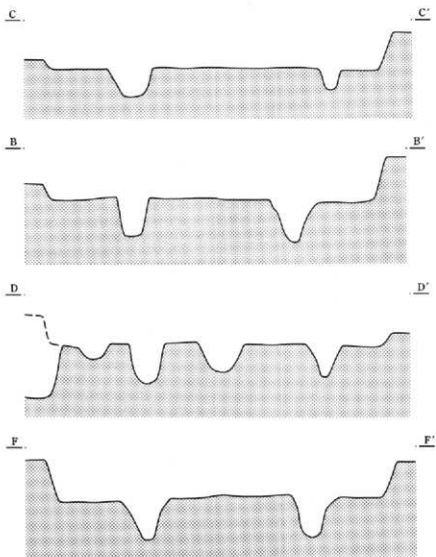
柱穴 大きな掘り込み面を持つ柱穴が4本掘られていた。柱穴1は長径73cm短径55cm、床面からの深さ63cm、柱穴2は長径76cm短径71cm、床面からの深さ68cm、柱穴3は長径58cm短径56cm、床面からの深さ60cm、柱穴4は長径62cm短径59cm、床面からの深さ47cmである。

小穴 柱穴以外に小穴が7個掘られていた。小穴1は北壁に接して半円形に掘られており、長径96cm短径62cm、床面からの深さ19cm、小穴2は直径36cm、

床面からの深さ29cm、小穴3は直径25cm、床面からの深さ6cm、小穴4は直径54cm、床面からの深さ53cm、小穴5は長径33cm短径28cm、床面からの深さ7cm、小穴6は長径40cm短径30cm、床面からの深さ47cm、小穴7は長径83cm短径76cm、床面からの深さ44cmである。

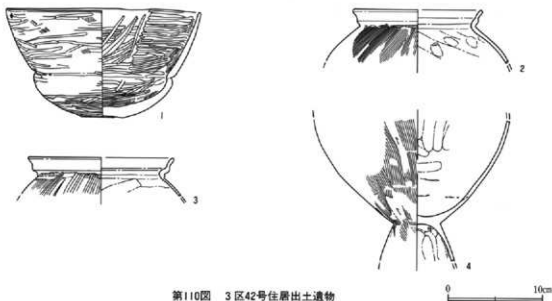
遺物 南東コーナーと南壁面西寄りの壁面下部分からこも編石が7個まとまって出土した。土器の出土は少なく埴(1)が南西隅、壁際から出土した他は埋没土中からの出土である。(観P40)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。

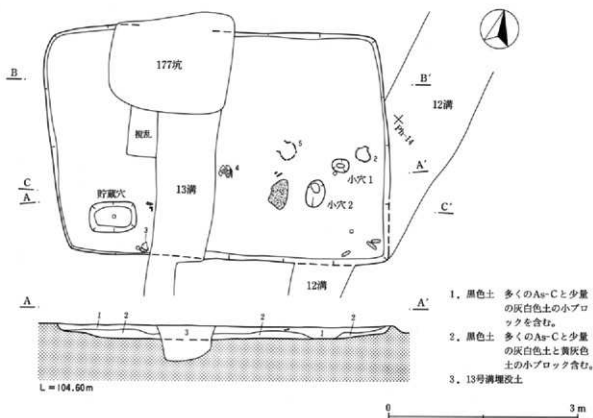


第109図 3区42号住居(2)

第4章 検出した遺構と遺物



第110図 3区42号住居出土遺物



第111図 3区43号住居(1)

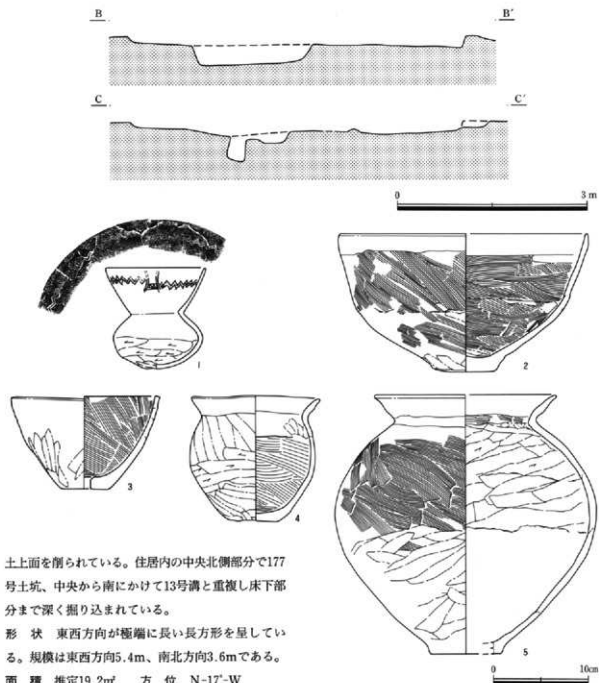
3区 43号住居(第111・112図 P.L.16・47)

位置 Ph-13・14グリッド

概要 東西方向が南北方向より2m近くも長い住居であり、他の多くの住居と大きく異なっている。

残りが悪く溝や土坑と重複しているために、調査段階で住居範囲等において認識した可能性も考えられる。ここでは調査段階での所見に従って報告する。

重複 南東コーナー部分で12号溝と重複し、埋没



第112図 3区43号住居(2)と出土遺物

土上面を削られている。住居内の中央北側部分で177号土坑、中央から南にかけて13号溝と重複し床下部分まで深く掘り込まれている。

形状 東西方向が極端に長い長方形を呈している。規模は東西方向5.4m、南北方向3.6mである。

面積 推定19.2㎡ 方位 N-17°-W

壁・床面 床面の残りも全体に悪い。小穴2の西側から粘土が出土している。全体に残りが悪く浅い住居であり、壁面の高さは北壁面部分で15cmあるが、南西コーナー部分ではわずか4cmであった。

炉 不明である。

周溝 掘られていなかった。

貯蔵穴 長径73cm短径48cm、深さ53cmである。

小穴 柱穴は掘られてない。小穴が2個掘られていた。小穴1は長径27cm短径21cm、床面からの深さ

15cm、小穴2は長径42cm短径29cm、床面からの深さ23cmである。

遺物 甕(4)は床面のほぼ中央部から、その東側からは甕(5)が出土した。また、貯蔵穴の南側壁際からは有孔鉢(3)が出土している。(観P41) 所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。

3区 44号住居 (第113・114図 P.L.16・48)

位置 Ph・i-14グリッド

概要 浅く小さな住居であり、さらに多くの溝と重複しており残りの悪い住居である。

重複 南東コーナー部分で11号溝と北壁から南西コーナー部分で12号溝と西側壁面部分で13号溝と重複し、床下部分まで深く掘り込まれている。

形状 南北方向がやや長い長方形を呈している。

規模は東西方向3.1m、南北方向3.6mである。

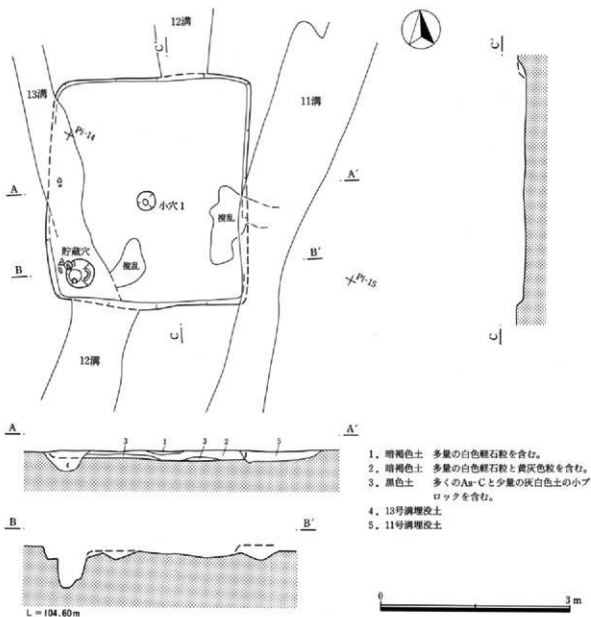
面積 11.4㎡ 方位 N-7°-E

壁・床面 床面の残りも全体に悪い。床面の一部は攪乱を受けている。全体に残りが悪く浅い住居であり、壁面の高さは北東コーナーの壁面部分で9cmあるが、北西コーナーの壁面部分ではわずか4cmであった。

炉 不明である。

周溝 掘られていなかった。

貯蔵穴 南西コーナー部分にあり、上面は13号溝により削られていた。大きさは長径55cm短径46cm、床面からの深さ30cmである。

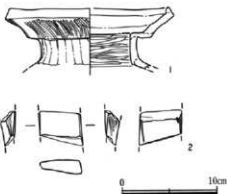


第113図 3区44号住居

小 穴 柱穴は掘られてない。小穴が1個掘られていた。大きさは直径29cm、床面からの深さ11cmである。

遺 物 埋没土中から少量の土器片と磁石(2)1点が出土している。(観P41)

所 見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第114図 3区44号住居出土遺物

## 3区 46号住居 (第115図 P.L.16)

位 置 Qp-0 グリッド

概 要 住居の西側の壁面部分と周溝及び小穴5個が残っており、そこが調査されただけで他の大部分は削られて残っていなかった。規模は東西方向不明、南北方向は現状で3.8mである。

重 複 住居の南で49号土坑と重複しており、南壁面の一部と住居の埋没土上面が掘り込まれている。

面 積 不明 方位 N-35°E

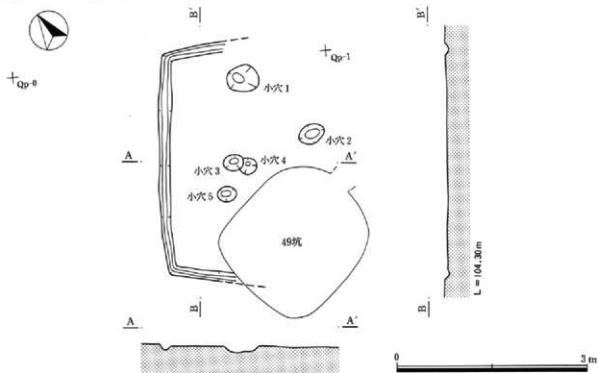
壁・床面 壁面の高さは西壁面部分で6cmあるが、南西コーナーの壁面部分ではわずか2cmであった。

周 溝 残された壁面下で確認された。大きさは幅15cm前後深さは床面から5cm前後である。

小 穴 柱穴は掘られてない。小穴が5個掘られていた。小穴1は長径51cm短径42cm、床面からの深さ10cm、小穴2は長径44cm短径31cm、床面からの深さ8cm、小穴3は長径32cm短径26cm、床面からの深さ8cm、小穴4は直径26cm、床面からの深さ7cm、小穴5は長径30cm短径23cm、床面からの深さ14cmである。

遺 物 全く出土していない。

所 見 不明である。



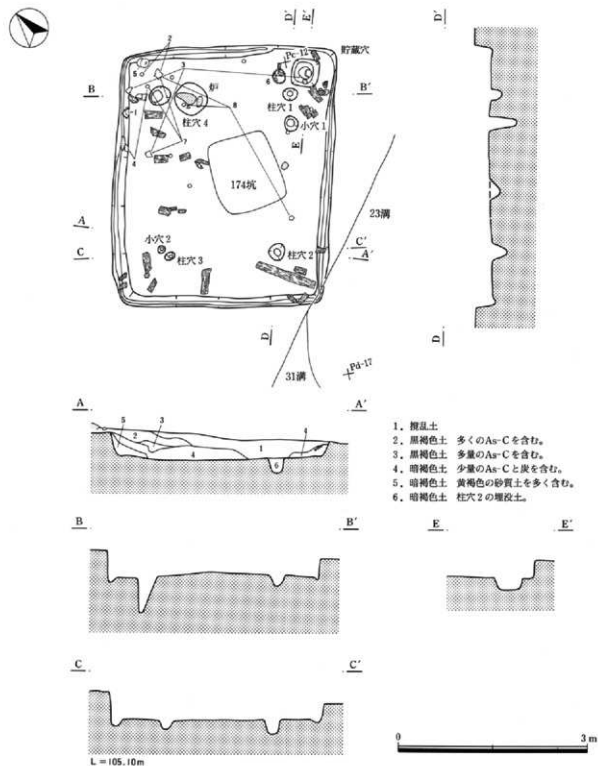
第115図 3区46号住居

3区 47号住居 (第116・117図 P.L.17・48)

位置 Pc-16・17グリッド

概要 東方向に向かい低くなる地形であり、住居も東部分が削られて残りが悪かった。

重複 住居中央部分で174号土坑と重複し、この土坑により床下部分まで深く掘り込まれていた。南東コーナー部分で23・31号溝と重複し、住居の埋設土上面が掘り込まれていた。



第116図 3区47号住居

形状 南北方向にやや長い長方形であり、規模は東西方向3.4m、南北方向4.1mである。

面積 14.1m<sup>2</sup> 方位 N-45°-E  
壁・床面 床面から多くの炭が出土しており、焼失住居の可能性が考えられる。壁面の高さは西壁面部分で47cmと深いが、東壁面部分では20cmと浅い。

炉 床面中央より北西に浅く掘り込まれ、炉面が赤く焼けている炉が造られている。焼土の南西部分に長さ20cmほどの石が置かれていた。枕石と思われる。炉の規模は直径50cmで床面からの深さは5cmである。

周溝 貯蔵穴のある北東コーナー部分以外ほぼ全面にわたり壁面下に掘られていた。幅は15cm前後で深さは6cm前後である。

貯蔵穴 北東コーナー部分にほぼ方形をした貯蔵穴が掘られていた。大きさは径43cm、床面からの深さ

23cmである。

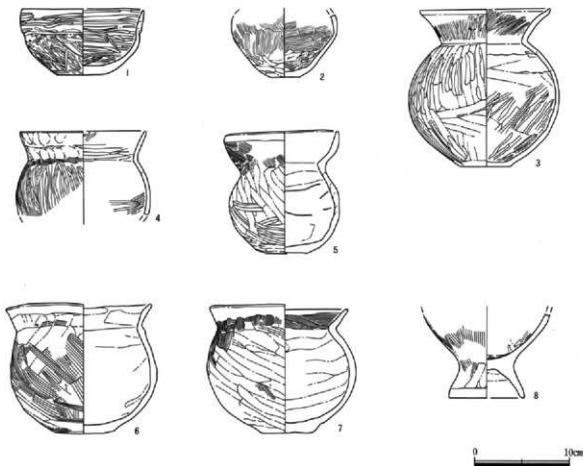
柱穴 特に小さな掘り込み面を持つ柱穴が4本掘られていた。柱穴1は長径23cm短径18cm、床面からの深さ21cm、柱穴2は長径27cm短径25cm、床面からの深さ28cm、柱穴3は直径18cm、床面からの深さ19cm、柱穴4は長径32cm短径30cm、床面からの深さ63cmである。

小穴 柱穴以外に小穴が2個掘られていた。小穴1は長径24cm短径21cm、床面からの深さ43cm、小穴2は直径12cm、床面からの深さ19cmである。

遺物 貯蔵穴内から壺(3)が、また、その西隣の床面から6cm離れた位置から壺(6)が出土している。他に壺(5)、甕(7)が北西隅から出土した。

(観P41・42)

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。



第117図 3区47号住居出土遺物

3区 48号住居 (第118・119図 P.L.17・48)

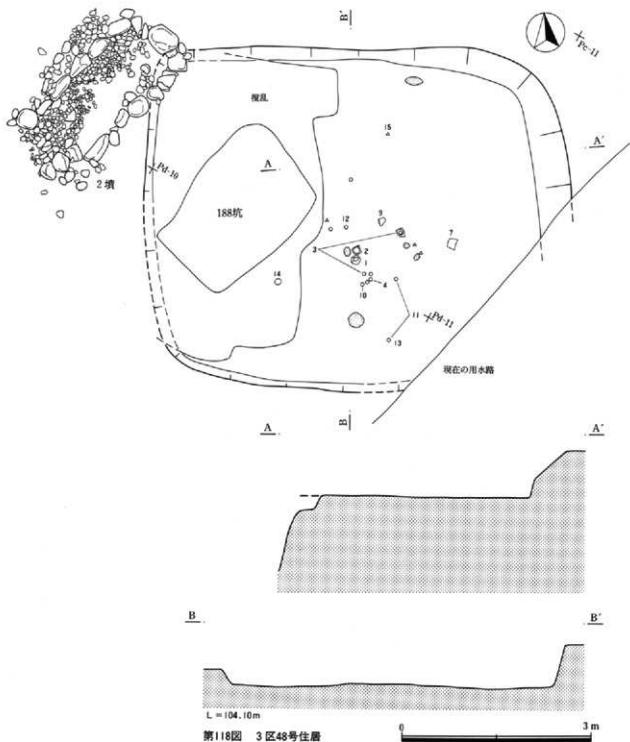
位置 Pc・d-10グリッド

概要 南西方向に向かい低くなる地形であり、住居も東部分が削られて残りが悪かった。

重複 北西部分で2号墳の石室と重複し、その部分は削られている。また、住居西側で188号土坑と

重複し深く床面下まで掘り込まれている。さらにこの土坑周辺も擾乱を受けて床面は残っていないかった。南東コーナー部分は現行用水路により深く削られていた。

形状 東西方向に長い長方形であり、規模は東西方向6.8m、南北方向5.4mである。

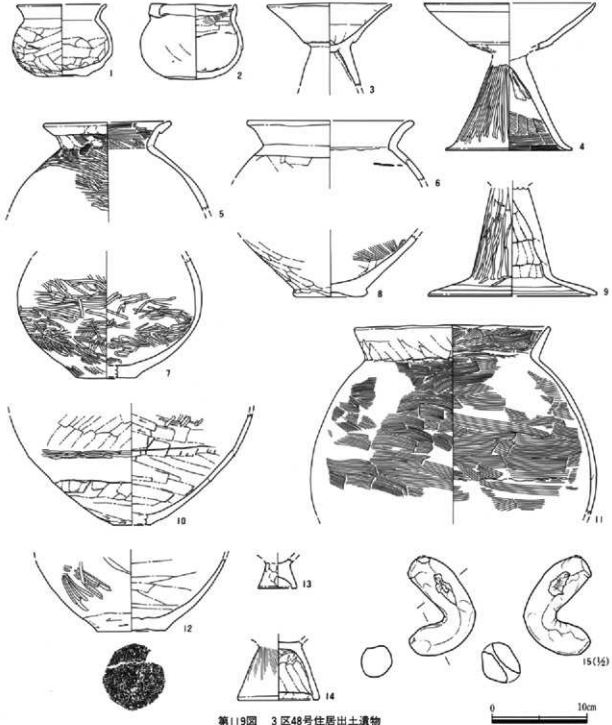


第118図 3区48号住居



面積 推定32.8㎡ 方位 N-48°-E  
 壁・床面 壁面の高さは北東コーナー部分で72cmと深い  
 が、南西コーナー部分では20cmと浅い。  
 炉 不明である。  
 周溝・貯蔵穴・柱穴 掘られていなかった。  
 遺物 台付甕(S字状口縁)の脚台部(13)と甕(11)

が比較的床面近くからの出土である他は、床面直上からの土器の出土は無かった。中央北壁寄りの埋没土中から土製勾玉(15)が出土している。  
 (観P42・43)  
 所見 出土遺物から、4世紀後半の住居と考えられる。



第119図 3区48号住居出土遺物

3区 49号住居 (第120図 P.L.17・48)

位置 Pn-15グリッド

概要 西と南側が床下部分まで削られており、住居として残っていたのは北東部分だけであった。東に接して、3号墳の周堀が掘られていたと思われるが確認できなかった。中央付近の床面は踏まれて固い床面となっていた。

形状 不明。規模は残っていた部分だけであり不明。確認された範囲で東西方向3.2m、南北方向3.3

mである。壁面の高さは北東コーナー部分で34cm、北壁面西端で4cmと浅い。

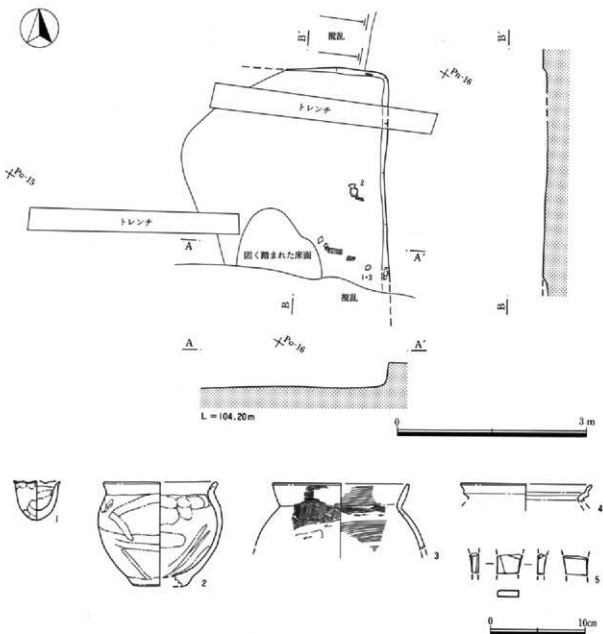
面積 不明 方位 N-3°-E

炉 不明である。

溝溝・貯蔵穴・柱穴 掘られていなかった。

遺物 埋没土中から手捏ね(1)をはじめとした小破片少量と砥石(5)が出土した。(観P43・44)

所見 出土遺物から、4世紀中頃から後半の住居と考えられる。



第120図 3区49号住居と出土遺物

## 3区 50号住居 (第121図 P.L.17)

位置 Pg-17グリッド

概要 他の住居と比較すると規模が非常に小さく、炉や竈は造られていないが、通常この規模の住居に柱穴は掘られていないが、この住居では6本の柱穴らしい掘り込みがある。土器は全く出土していないが、床面から灰と粘土が出土している。住居としても通常の形ではなく、別の意図をもって造られた建物と考えたい。

重複 南東コーナー部分で33号住居と重複し、その部分は削られている。

形状 東西方向にやや長い長方形であり、規模は東西方向2.6m、南北方向2.3mである。

面積 6.0m<sup>2</sup> 方位 N-31°-E

壁・床面 壁面の高さは全体に10cm前後と浅い。

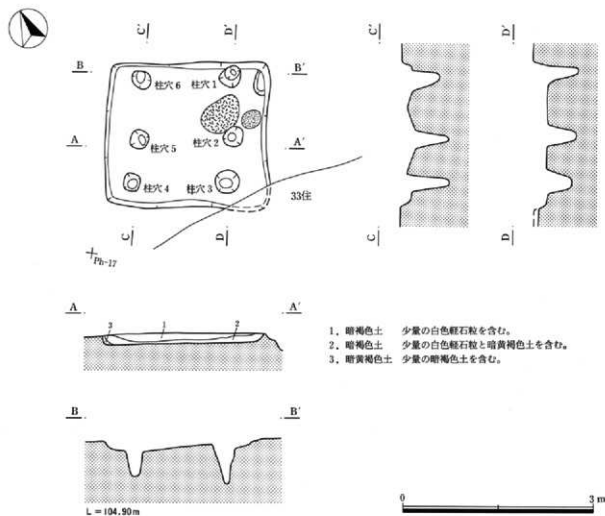
炉 不明である。

周溝・貯蔵穴 掘られていなかった。

柱穴 深くて大きな柱穴が6本掘られていた。柱穴1は長径32cm短径30cm、床面からの深さ57cm、柱穴2は長径32cm短径30cm、床面からの深さ54cm、柱穴3は長径30cm短径28cm、床面からの深さ48cm、柱穴4は長径28cm短径26cm、床面からの深さ64cm、柱穴5は直径29cm、床面からの深さ68cm、柱穴6は長径33cm短径28cm、床面からの深さ47cmである。

遺物 全く出土していない。

所見 出土遺物から、4世紀中頃～後半の住居と考えられる。

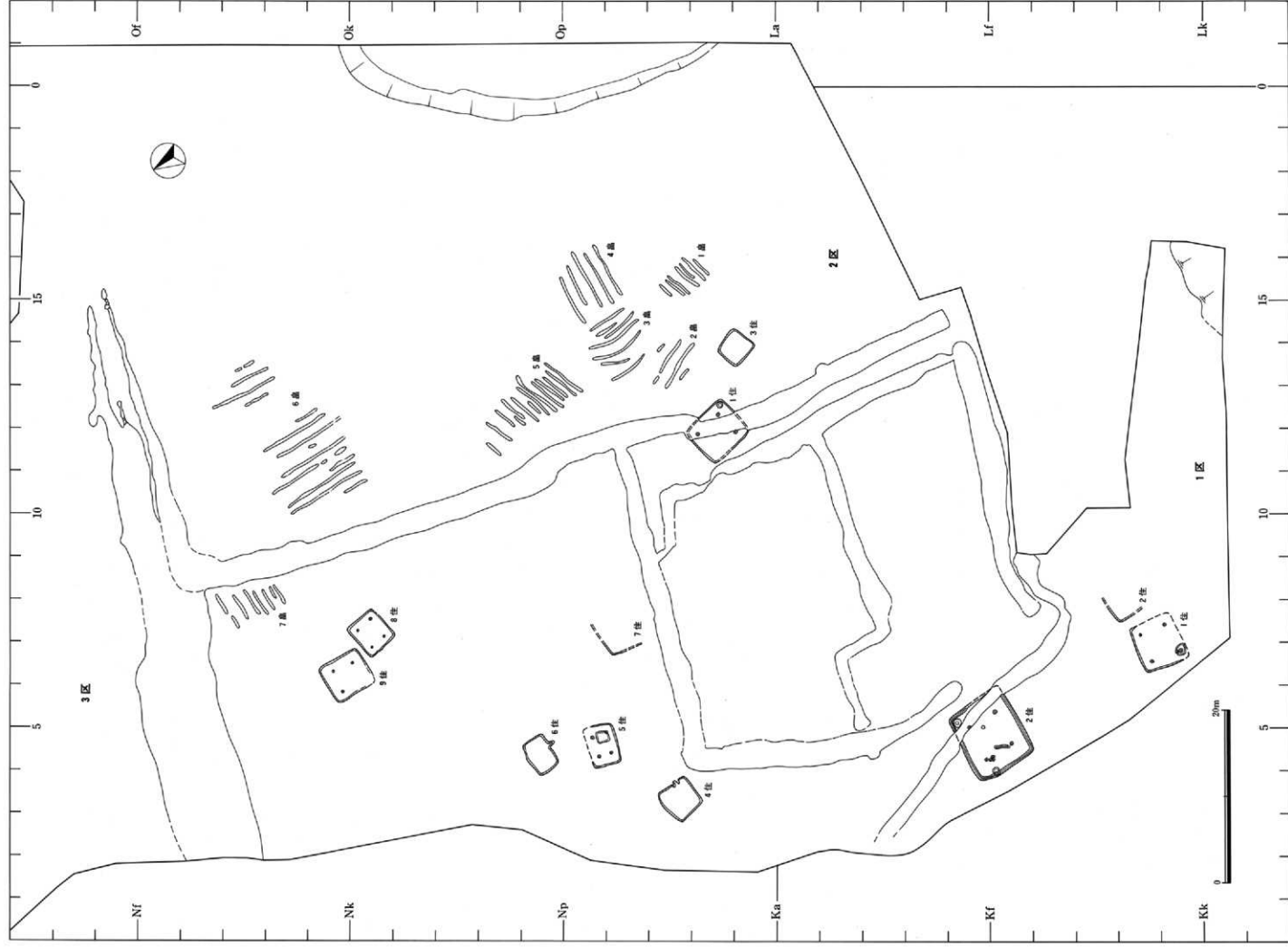


第121図 3区50号住居

## 第4章 検出した遺構と遺物

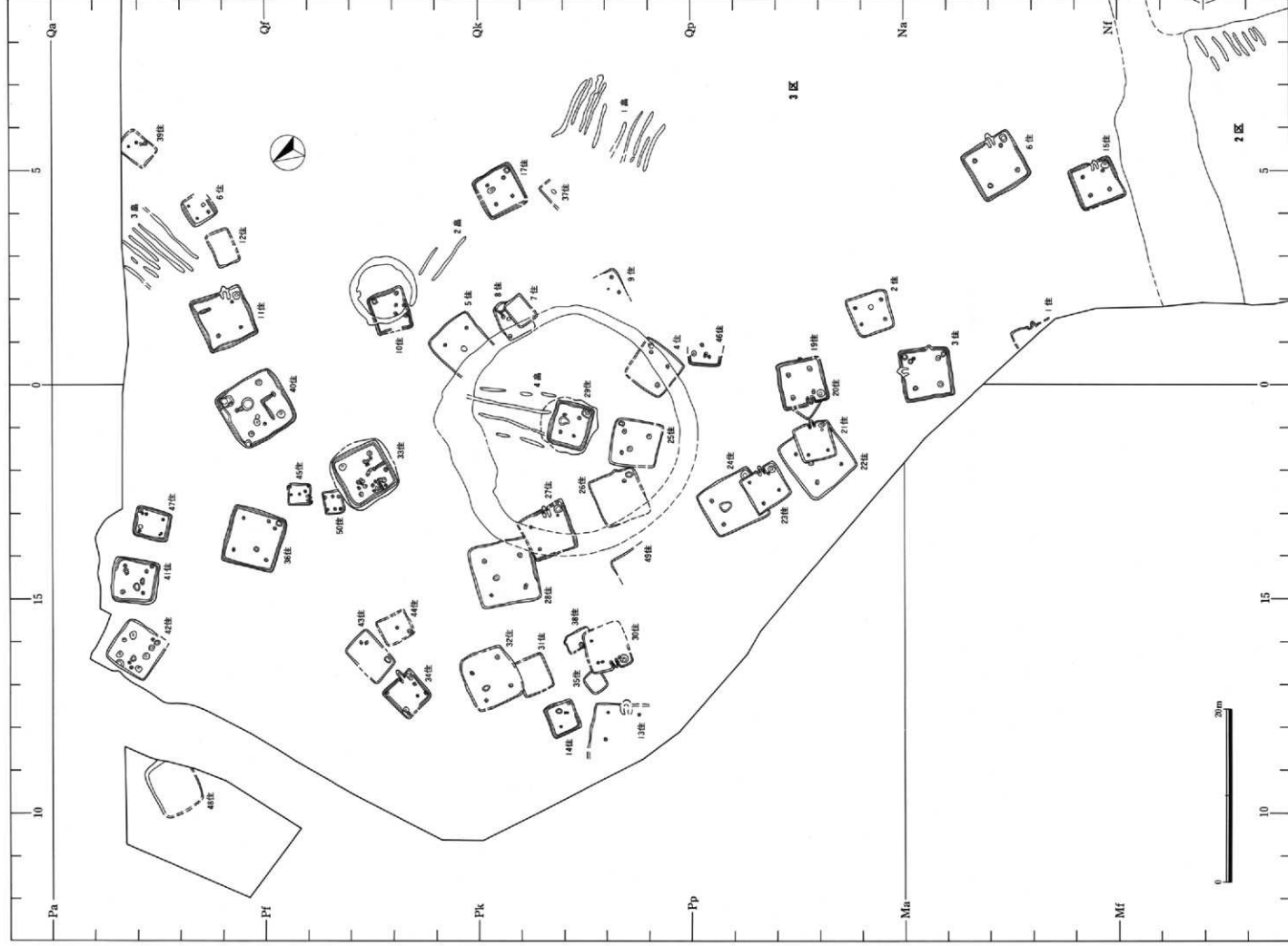
第4表 古墳時代前期の住居一覧

区	住居 No	時期	グロフ	規模 (南北×東西)m	面積 (m <sup>2</sup> )	主軸 方位	掲載 遺物数	本文 頁	観察表 頁	写真頁 遺構	写真頁 遺物
1	1住	4 C中 ～後	Ki・j-6・7	不明×5.5	推定28.9	N-14°-E	5	17・18	1	2	22
1	2住	#	Kh・i-7	不明	不明	N-12°-E	0	18	—	2	—
2	1住	#	Ns-11・12、Nt-11	5.9×5.4	推定30.6	N-10°-W	2	19	1	2	—
2	2住	#	Ke・f-4・5	7.5×8.7	推定53.6	N-2°-E	14	21・23	1・2	2	22
2	3住	#	Ns・t-13	3.5×3.3	11.1	N-17°-W	7	24	2・3	3	22
2	5住	#	Np・q-4	3.5×4.8	推定16.4	N-10°-E	6	25	3	3	22・23
2	7住	#	Nq-6	不明	不明	不明	4	26	3・4	3	23
2	8住	#	Nk-6・7	3.9×4.4	17.0	N-7°-W	5	27	4	4	23
2	9住	#	Nj-5・6、Nk-6	5.3×4.8	23.6	N-0°-E	9	28・29	4・5	4	23
3	2住	#	Qs・t-1	4.6×4.7	21.2	N-11°-E	2	30・31	5	6	24
3	4住	#	Qn・o-0	5.4×5.4	26.9	N-13°-W	8	31	5・6	6	24
3	5住	#	Qj・o・1	5.8×不明	不明	N-15°-W	3	34・35	6	6	24
3	6住	#	Qd-3・4	3.4×3.3	推定11.2	N-4°-W	1	35・36	6	6	24
3	7住	#	Qk-1-1	2.5×3.4	8.5	N-5°-E	8	36	6・7	7	24
3	8住	#	Qk-1-1	3.7×4.3	16.0	N-7°-W	5	38	7・8	7	25
3	9住	4 C後	Qn-2	2.0×3.5	不明	不明	0	38・39	—	7	—
3	10住	4 C中 ～後	Qh-1、Qi-1・2	4.2×4.8	推定19.8	N-10°-E	0	39・40	—	7	—
3	12住	#	Qd・e-3	2.8×4.15	推定11.4	N-11°-E	2	41	8	8	—
3	14住	4 C後	Pl・m-12	3.4×3.7	12.2	N-7°-E	6	41・42	8	8	25
3	17住	4 C中 ～後	Qk-4	5.05×5.1	25.5	N-4°-E	43	42-44	9-12	9	25-28
3	22住	#	Pr・s-17・18	6.7×6.6～6.7	推定43.5	N-9°-W	22	49・50	12・13	8	29
3	24住	#	Pp・q-16・17	6.7～7.0×5.6～6.2	37.4	N-2°-E	9	51・53	13・14	10	29
3	25住	#	Pn-18・19	5.4～5.5×5.1～5.5	28.6	N-37°-E	22	53・56	14・15	11	29・30
3	28住	#	Pk-1-15	7.3×7.3	45.2	N-19°-E	86	57・58	16-22	10	30-34
3	29住	#	Pl・m-18・19	5.2×4.5	23.2	N-48°-E	72	64・66	22-27	12	35-39
3	31住	#	Pl-12・13	3.8×4.3	16.3	N-13°-E	6	74・75	27・28	12	40
3	32住	#	Pj・k-12・13	6.0×6.8	35.6	N-14°-E	7	75	28	12	40
3	33住	4 C後	Pg・h-17・18	6.1×6.1	34.2	N-5°-E	42	78・79	28-31	13	40・41
3	35住	4 C中 ～後	Pm-12・13	2.25×2.4	推定 5.3	N-5°-E	3	84	31	14	—
3	36住	#	Pe・f-15・16	6.7×6.4	37.5	N-47°-E	31	85	31-34	14	42・43
3	37住	#	Ql-4	不明	不明	N-7°-W	0	90	—	14	—
3	38住	#	Pm-13・14	3.0×2.1	推定 6.3	N-6°-E	2	90	34	14	—
3	39住	#	Qb・C-5	3.0×4.0	推定11.5	N-20°-W	2	91	34	14	—
3	40住	#	Pe-18・19、Pf-19、 Qe-0	7.6×7.4	46.7	N-6°-E	68	92・95・96	34-39	15	44-47
3	41住	#	Pb・C-15	5.2×5.2	26.2	N-38°-E	5	102	39・40	15	47
3	42住	#	Pb・C-13・14	5.5×5.5	推定28.6	N-24°-W	4	104・105	40	16	47
3	43住	#	Ph-13・14	3.6×5.4	推定19.2	N-17°-W	5	106・107	41	16	47
3	44住	#	Ph・j-14	3.6×3.1	11.4	N-7°-E	2	108・109	41	16	48
3	46住	不明	Qp-0	3.8×不明	不明	N-35°-E	0	109	—	16	—
3	47住	4 C中 ～後	Pc-16・17	4.1×3.4	14.1	N-45°-E	8	110・111	41・42	17	48
3	48住	4 C後	Pc・d-10	5.4×6.8	推定32.8	N-48°-E	15	112・113	42・43	17	48
3	49住	4 C中 ～後	Pn-15	3.3×3.2	不明	N-3°-E	5	114	43・44	17	48
3	50住	#	Pg-17	2.3×2.6	6.0	N-31°-E	0	115	—	17	—
	合計						546				



第122図 東城壕跡・2区の住居





第123図 茨城縣古河遺跡3区の柱屋





## 第2節 古墳時代後期の住居

## 2区 4号住居 (第124図 P.L.18)

位置 Nr-3グリッド

概要 東壁面に竈を持つ住居である。残りが悪く南西コーナー部分の壁はほとんど残っていない。また北側の壁面が湾曲して外側に張り出しており、不自然な平面形をしている。

重複 なし

形状 住居北側がやや広い方形をしている。規模は東西方向が南側で3.7m・北側で4.1m、南北方向が西側で3.7m・中央付近で4.1mである。

面積 15.8m<sup>2</sup> 方位 N-17°-W

壁・床面 壁面は残りの良い北壁面で、遺構確認面

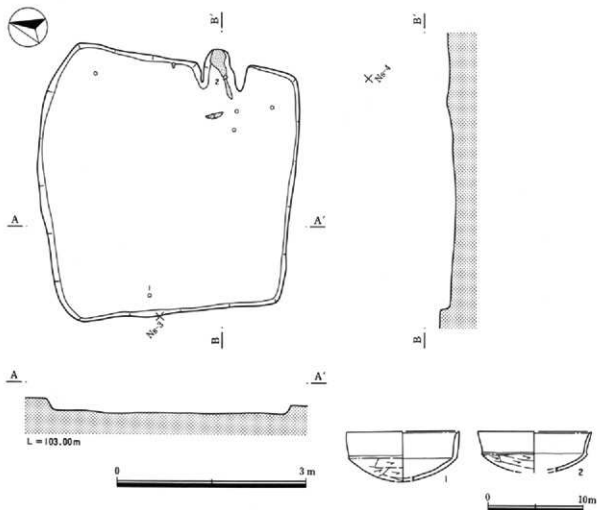
から19cmである。床面はほとんど平坦であった。

竈 東壁面やや南寄りに造られていた。右袖部分は削られてほとんど残っていなかった。袖と竈内に残された焼土から、燃焼部は壁面を多く掘り込まないで床面上に位置していたようである。燃焼部幅約45cm、左右の袖は壁面から長さ40cmほど残っていた。竈内に多くの焼土が残っていた。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

遺物 竈燃焼部内から杯(2)が出土した。杯(1)は西壁際出土の破片と2区3号住居出土の破片が接合した資料である。(観P44)

所見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。



第124図 2区4号住居と出土遺物

2区 6号住居 (第125図)

位置 No-4グリッド

概要 東西方向に長軸を有し、長方形を呈する住居である。北壁の中央部がやや張り出している。規模は東西方向は北側で4.3m、南北方向は2.6mを測る。削平が進行しており、壁面の残存高は最も良好な電西側で16cmである。床面はやや粘性をおびていた。

床面の中央、電手前に218・219号土坑が重複、床面は削られている。

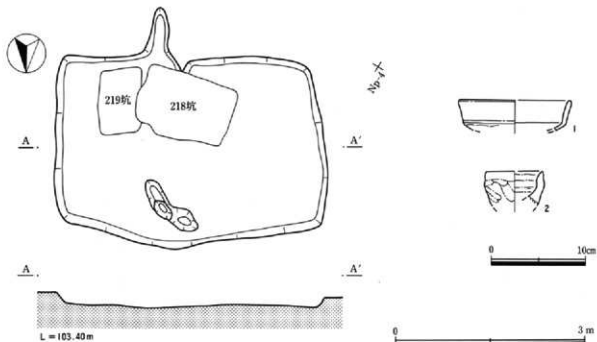
重複 なし

面積 11.9㎡ 方位 N-0°-E

竈 南側の中央、やや東側寄りに付設されていた。燃焼部は壁内に構築されていたと考えられるが右側袖の基部を残すのみで他は失われていた。煙道部は壁外に幅、狭く延びていた。内部に焼土が少量散見された。煙道部の残存長は、約80cmである。

遺物 埋没土中から杯(1)が出土している。手捏ね(2)は混入品か。(観P44)

所見 竈の存在と、少量の出土遺物から6世紀代の住居と考えたい。



第125図 2区6号住居出土遺物

3区 1号住居 (第126図 P.L.18・50)

位置 Nc・d-1グリッド

概要 南西部分がしだいに低地となっている部分に位置している。住居は北東部分の一部と竈が残っていただけで大部分は削られ残っていなかった。そのため形状や規模は不明である。

重複 なし

面積 不明 方位 N-17°E

壁・床面 壁面竈付近で13cmと浅い。

竈 東壁面に造られていた。袖は床面上にわずかに造り出されているだけであり、大部分は壁面を掘り込んで造られていた。竈内に多くの焼土が残っていた。燃焼部幅約45cm、左右の袖は壁面から長さ25cmほど残っていた。竈内に多くの焼土が残っていた。

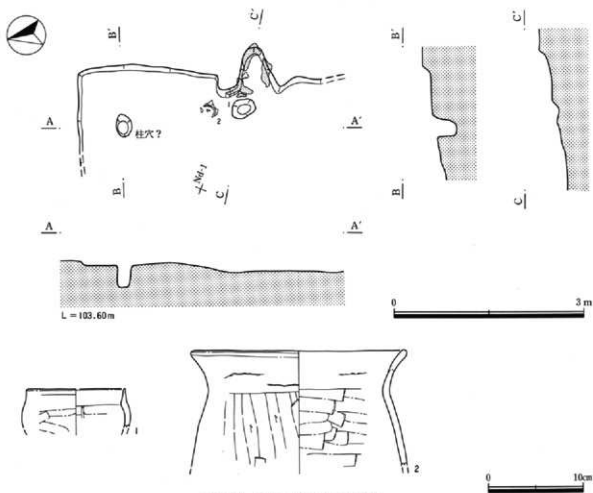
周溝 掘られていなかった。

柱 穴 1本柱穴らしい小穴が掘られていたが、他に小穴は掘られていないために、この小穴が柱穴なのか不明である。

遺 物 鉢(1)は竈左袖に接して出土。甕?(2)は

竈左手前から出土した。(観P44)

所 見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。



第126図 3区1号住居と出土遺物

3区 3号住居 (第127~129図 P.L.18・50)

位 置 Na-0グリッド

概 要 4柱穴と新旧の竈及び貯蔵穴を持つ、残りの良い住居である。

重 複 なし

形 状 北側が少し広がっているが、ほぼ正方形に近い方形である。規模は東西方向が南側で5.7m、北側で6.0mとやや広がっている。南北方向は5.8mである。

面 積 33.9㎡ 方 位 N-22°-E

壁・床面 残りの良い南と東側壁面部分で45cm前後と比較的残りが良い。床面はほぼ平坦であった。

竈 旧東竈と新北竈が造られていた。旧東竈は壁面を掘り込んで造られた煙道部分が残っていたが、床面上に位置する燃焼部等は取り外されて残っていなかった。周囲の床面、埋没土中には焼土や炭化物が多く分布していた。

新北竈 新北竈は残りが良好であった。旧東竈と同

様に壁面は一部掘り込んで煙道部を造っているが、燃焼部の大部分は床面上に造られていた。竈内に多くの焼土が残っていた。燃焼部幅約40cm、左右の袖は壁面から長さ82cmほど残っていた。

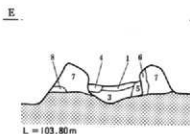
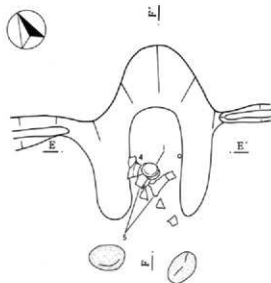
周溝 竈の造られた部分以外、壁面下にはほぼ全面にわたり掘られていた。幅は15~20cm、深さは10~15cmである。

柱穴 柱穴が4本掘られていた。柱穴1は直径50cm、床面からの深さ57cm、柱穴2は直径51cm、床面からの深さ54cm、柱穴3は長径70cm短径54cm、床面からの深さ61cm、柱穴4は直径52cm、床面からの深さ50cmであった。柱穴1の南東に接して小穴が確認された。直径32cm、床面からの深さ98cmと深い。用途は不明である。

貯蔵穴 新旧の竈の右側の、壁面コーナー部分に掘られていた。旧貯蔵穴はやや楕円形で長径80cm短径65cm、床面からの深さ79cm、で出土遺物は無し、新貯蔵穴は最上層に貼床が施されていた。その下位には焼土を多く含む暗褐色土が堆積していた。やや方形で長径74cm短径62cm、床面からの深さ68cmで、多くの遺物が出土した。

遺物 竈内から杯(1)、壺(4・5・7)が出土した。新貯蔵穴内出土は杯(2)、甕(6)である。高杯(9)は南西隅の出土であるが他の土器の年代と相違をきたしている。また、埋没土中から打製石斧(13)が出土している。(観P44・45)

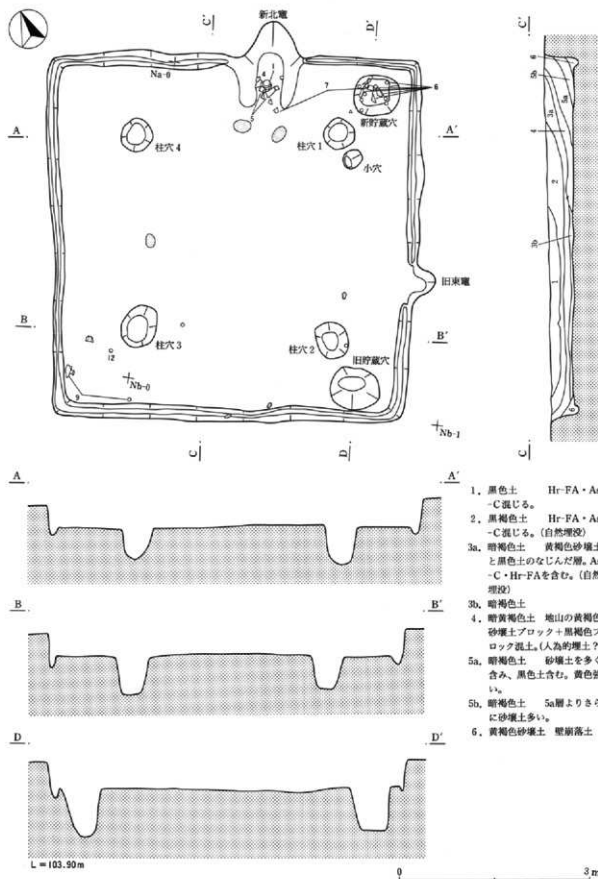
所見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。



- |          |                              |
|----------|------------------------------|
| 1. 黒褐色土  | 少量の焼土粒と炭化物を含む。               |
| 2. 暗褐色土  | 多くの焼土粒を含む。カマド袖の崩壊土をブロック状に含む。 |
| 3. 暗褐色土  | 多くの灰・炭化物・焼土粒を含む。             |
| 4. 暗赤褐色土 | 多くの焼土ブロックと炭を含む。              |
| 5. 赤色土   | 焼土ブロックを主とした層。                |
| 6. 赤褐色土  | 7層の袖が火を受けて部分的に焼土化している。       |
| 7. 赤褐色土  | 赤褐色のローム土。                    |
| 8. 暗褐色土  | 少量の白色軽石粒を含む。                 |



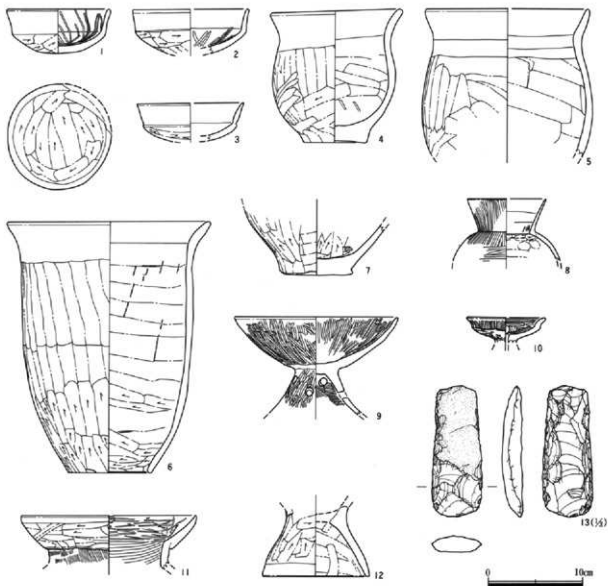
第127図 3区3号住居(1)



1. 黒色土 Hr-FA・As-C流じる。
2. 黒褐色土 Hr-FA・As-C流じる。(自然埋没)
- 3a. 暗褐色土 黄褐色砂壤土と黒色土のなじんだ層。As-C・Hr-FAを含む。(自然埋没)
- 3b. 暗褐色土
4. 暗黄褐色土 地山の黄褐色砂壤土ブロック+黒褐色ブロック混土。(人為的埋土?)
- 5a. 暗褐色土 砂壤土を多く含む、黒色土含む。黄色強い。
- 5b. 暗褐色土 5a層よりさらに砂壤土多い。
6. 黄褐色砂壤土 壁崩落土

第128図 3区3号住居(2)

第4章 検出した遺構と遺物



第129図 3区3号住居出土遺物

3区 11号住居 (第130~133図 P.L.18・50・51)

位置 Qd-1、Qe-1・2グリッド

概要 4柱穴と非常に残りの良い竈と貯蔵穴を持ち、壁面も深い残りの良い住居である。

重複 なし

形状 北側が少し広くはなっているが、ほぼ正方形に近い方形である。規模は東西方向が北側で6.3m、南側で6.0mと北側がやや広くはなっている。南北方向は6.2mである。

面積 33.6㎡ 方位 N-9°E

壁・床面 残りの良い北東コーナー部分で81cmと非常に残りが良い。

竈 東壁面の南寄りに竈が造られていた。燃焼面の多くは床面上に造られ、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。焚口部分は細い袖石を左右とも立て、その上に大きな天井石が載せられていた。さらに右側の天井石を一部覆うようにやや丸い石が置かれていた。焚口の奥にやや短い支脚石が置かれていた。また、支脚石に接して高杯(10)が口縁部を下にした状態で使われていた。その支脚

石と高杯の上に丸胴の甕が位置している。これは丸胴の壺(17)の下に二つの支脚が置かれていたことになる。不自然であり、ずれて出土したが、短い支脚石の上に高杯(10)が口縁部を下にしてからのせて支脚としていた可能性も考えられる。燃焼部には長胴の甕(20)と丸胴の壺(17)が2個ほぼ使用時に近い状態で埋まっていた。長胴の甕の下には支脚は使われていなかった。燃焼部幅約40cm、左右の袖は壁面から長さ80cmほど残っていた。

周溝 竈と貯蔵穴の造られた部分以外、壁面下にはほぼ全面にわたり掘られていた。幅は20~30cm、深さは6~8cmである。

柱穴 柱穴が4本掘られていた。柱穴1は直径25cm、床面からの深さ84cm、柱穴2は直径26cm、床面からの深さ36cm、柱穴3は長径40cm短径33cm、床面からの深さ68cm、柱穴4は直径28cm、床面からの深さ35cmであった。

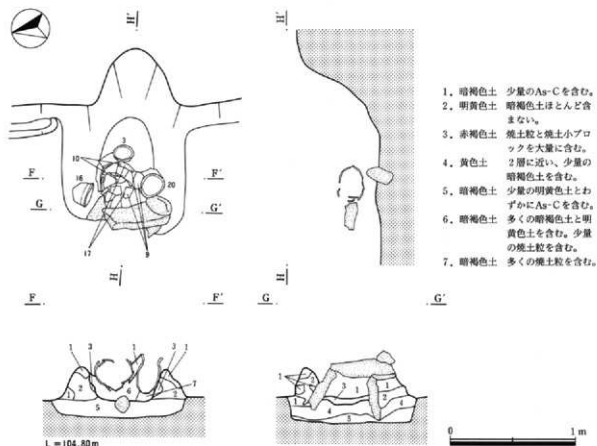
貯蔵穴 貯蔵穴が竈の右側の壁面コーナー部分に掘られていた。少し歪んでいるがほぼ円形で、直径80cm、床面からの深さ122cmと特に深い。

遺物 竈内出土の土器としては、燃焼部内の煙道寄りから杯(3)が、焚口部寄りから杯(9)が出土している。甕(14)も燃焼部内出土である。鉢(16)は左袖に乗るような位置にあった。

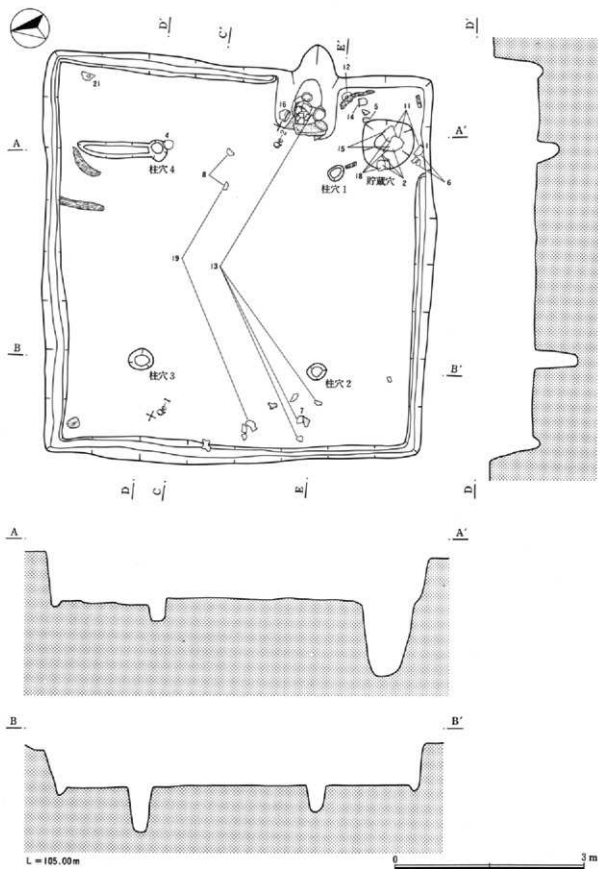
貯蔵穴内から甕(18)、杯(2)、甕(15)が発見された。杯(5)、高杯(11)は貯蔵穴の縁にあったものが破片となって貯蔵穴内に落ち込んでいた。

床面出土の土器としては柱穴4の際から杯(4)が、その南側から杯(8)が、西壁中央壁際からは壺(19)が出土している。住居東側を中心に炭化材が数点検出されている。(観P45~47)

所見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。

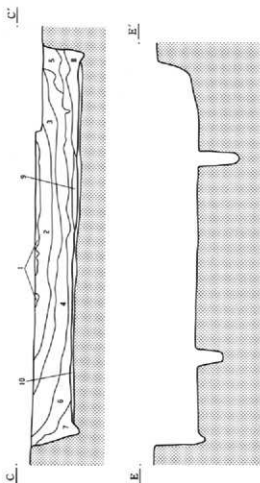


第130図 3区11号住居(1)



第131図 3区11号住居(2)



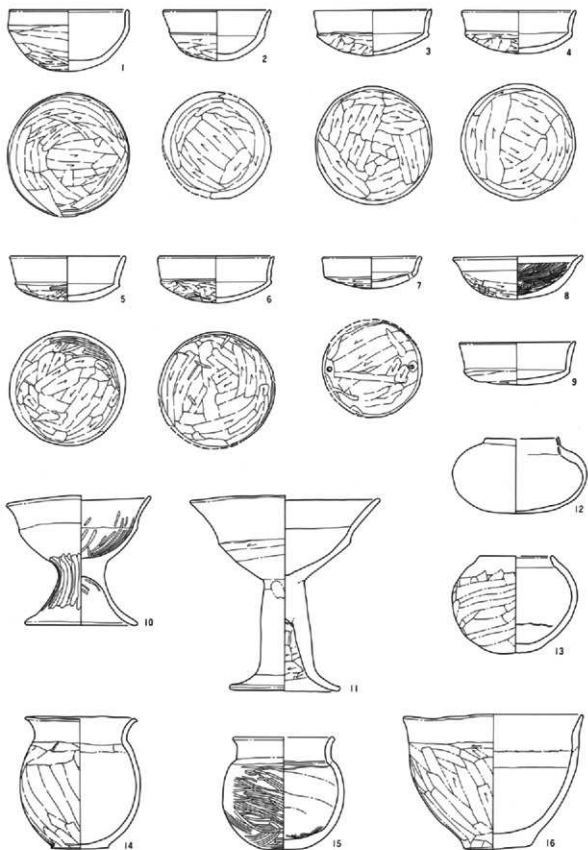


第5表 古墳時代後期の住居一覽

1. 暗褐色土 多くの砂粒を含む。
2. 黒褐色土 多くのAs-CとHr-Faを含む硬質の層。
3. 灰褐色土 多くのAs-CとHr-Faを含むやや軟質の層。
4. 黒褐色土 多くのAs-CとHr-Faを含むやや軟質の層。
5. 灰黒褐色土 多くのAs-CとHr-Faを含む軟質で黄灰色土をブロック状に含む。
6. 灰褐色土 オレンジ色の粒子を部分的に多量に含む。
7. 灰褐色土 灰色粒と黄色粒の混入土。
8. 暗褐色土 黄白色粘質土(カマド材)と灰褐色土の混入土。
9. 暗褐色土 黄白色砂質土と灰褐色土の混入土。
10. 暗褐色土 ソフトな灰色粘質土。軽石を少量含む。

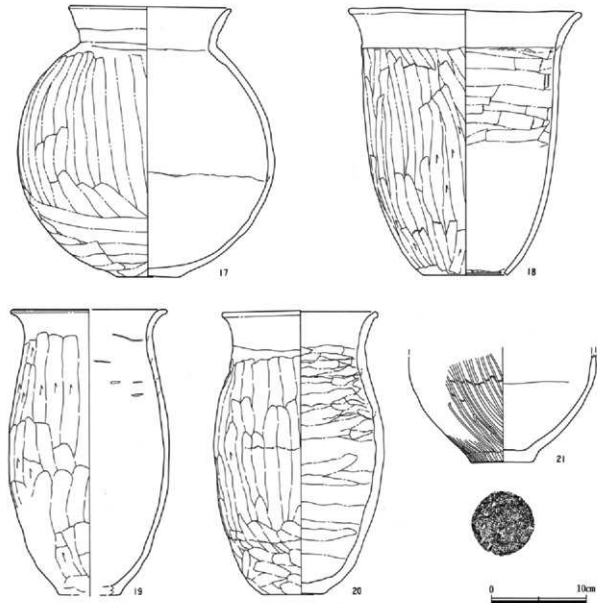
区	住居No.	時期	グリッド	規模 (南北×東西)m	面積 (㎡)	主軸 方位	電 磁	掘 堀 遺物数	本文 頁	撮影頁	写真 通巻	写真 頁
2	4住	6C前	Nr-3	3.7~4.1×3.7~4.1	15.8	N-17°-W	東壁	2	121	44	18	-
2	6住	6C代	N6-4	2.6×4.3	11.9	N-0°-E	南壁	2	122	44	-	50
3	1住	6C前	Nc-d-1	不	不明	N-17°-E	東壁	2	122	44	18	50
3	3住	6C前	N3-0	5.8×5.7~6.0	33.9	N-22°-E	旧東壁	13	123	124	45	18
3	11住	6C前	Qd-1, Qe-1, 2	6.2×6.3~6.0	33.6	N-9°-E	東壁	21	126	127	45~47	18
3	13住	6C前	Pm-11, 12, Pn-11	不明	不明	N-22°-E	東壁	3	131	132	47	19
3	15住	6C前	N6-4, 5	5.0~5.3×5.0	25.4	N-9°-E	東壁	10	133	134	47	19
3	16住	6C前	Nb-c-4, 5	6.3×6.0	35.5	N-0°-E	東壁	14	136	137	48	19
3	19住	6C前	Pn-19, Qr-0	5.3×5.3	26.5	N-17°-E	西壁	11	140	142	49	20
3	20住	不明	Pn-19	不明	不明	不明	-	0	143	-	-	-
3	21住	6C前	Pn-18, 19, Pn-18	4.4×4.4	16.1	N-17°-E	東壁	2	143	50	20	-
3	23住	6C前	Pq-r-17	4.6×4.6	21.4	N-0°-E	東壁	6	145	146	50	21
3	26住	6C前	Pm-n-17	5.7×5.7	30.5	N-4°-E	東壁	7	147	148	51	20
3	27住	6C前	Pn-16, 17	5.4~5.9×5.1~5.8	28.4	N-4°-W	東壁	6	148	150	52	21
3	30住	6C前	Pn-13, 14, Pn-13	5.0×5.0	25.0	N-6°-E	西壁	5	150	152	52	21
3	34住	6C前?	Pm-12, Pn-12, 13	4.2×4.2	17.9	N-9°-W	東壁	0	152	153	-	21
3	45住	6C前?	Pn-17	2.2×1.8	6.4	N-30°-E	西壁	0	154	-	-	21
合	計							104				
								650				

第4章 検出した遺構と遺物



第132図 3区11号住居出土遺物(1)

0 10cm



第133図 3区11号住居出土遺物(2)

## 3区 13号住居 (第134図 P.L.19)

位置 Pm-11・12、Pn-11グリッド

概要 残りが非常に悪い住居であり、西側の多くは耕作等に寄り、南側は一段低く削られて残っていなかった。そのために北東部分と竈の左袖部分が残っていただけであった。深く掘られていた柱穴3本は残っていた。

形状 方形と思われるが不明。規模も不明。

面積 不明 方位 N-32°-E

壁・床面 壁面は残りの良い北東部分で10cm前後である。床面は一部残っており、その部分は線で示した。

竈 東壁面に竈の左袖と思われる高まりが残っていた。焼土粒はほとんど残っていない。袖は壁面から長さ110cmであった。

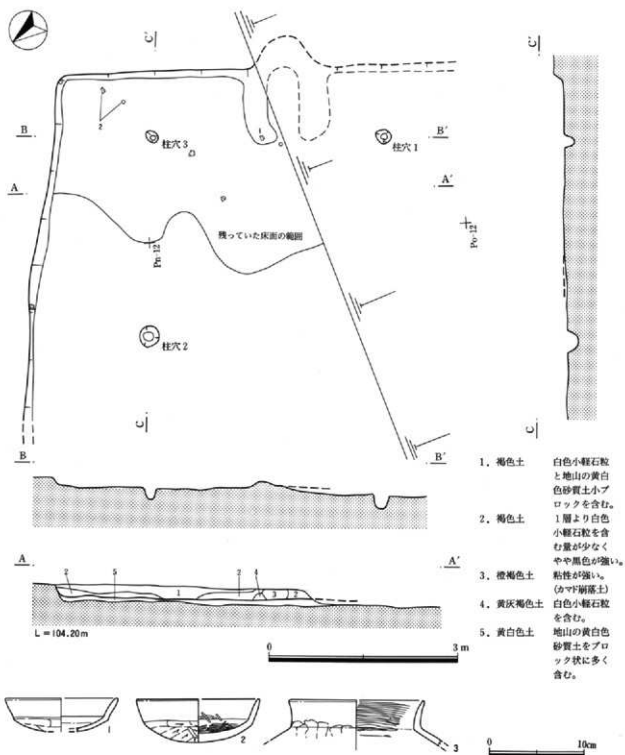
周溝 掘られていなかった。

柱穴 浅くて小さいが、柱穴と思われる掘り込みが3本掘られていた。南西部分には残っていなかつ

た。柱穴1は直径25cm、床面からの深さ29cm、柱穴2は長径33cm短径31cm、床面からの深さ22cm、柱穴3は長径18cm短径16cm、床面からの深さ14cmであった。

遺物 北東隅の壁際から杯(2)が出土している。(観P47)

所見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。



第134図 3区13号住居と出土遺物

3区 15号住居 (第135~137図 P.L.19・52)

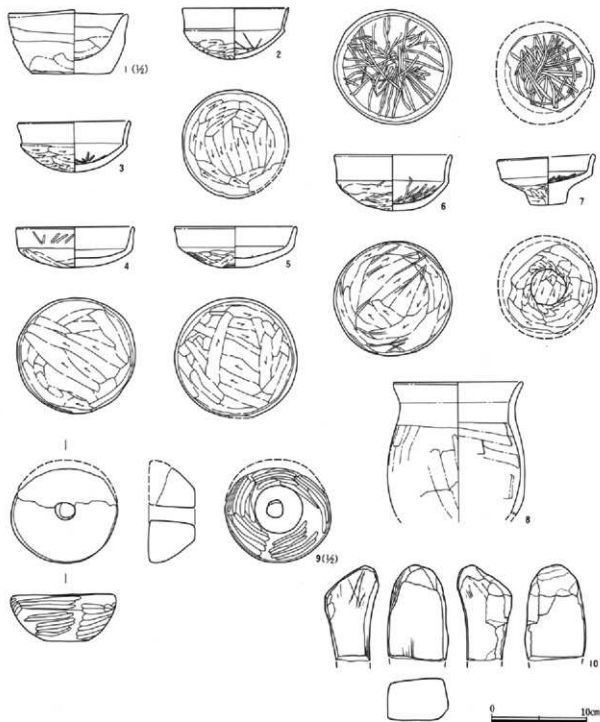
位置 Ne-4・5グリッド

概要 4柱穴と残りの良い竈と貯蔵穴を持ち、壁面も深い残りの良い住居である。

重複 北西コーナー部分で3号土坑と重複してお

り、住居の埋没土上面が削られている。

形状 南壁面の西側が少し南側に広がっているが、ほぼ正方形に近い。規模は東西方向が5m、南北方向が東側で5m、西側でやや広くなり5.3mとなっている。



第135図 3区15号住居出土遺物

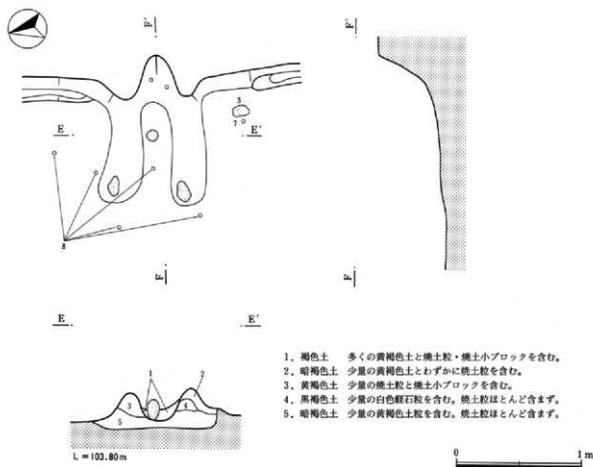
面積 25.4m<sup>2</sup> 方位 N-9°-E  
 壁・床面 残りの良い北壁面部分で63cmと残りが良い。床面は特段踏み固められた箇所はなかった。  
 竈 東壁面の南寄りに竈が造られていた。燃焼面の多くは床面上に造られ、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。焚口部分は細い袖石を左右とも立てられていたが、その上の天井石は残っていなかった。右側の袖石は長さ26cmと長く、床面下に5cmほど掘り込んで据えられていた。左側の袖石は長さ17cmで床下には1cm掘り込んで据えられていた。燃焼部中央部分や煙道寄りに、支脚石が据えられた状態で埋まっていた。燃焼部幅約35cm、左右の袖は壁面から長さ100cmほど残っていた。  
 周溝 住居南壁の西側部分以外、壁面下にほぼ全面にわたり掘られていた。幅は15cm前後、深さは5cm前後である。

柱穴 柱穴が4本掘られていた。柱穴1は直径33cm、床面からの深さ69cm、柱穴2は直径38cm、床面からの深さ63cm、柱穴3は長さ41cm短径30cm、床面からの深さ26cm、柱穴4は直径35cm、床面からの深さ62cmであった。

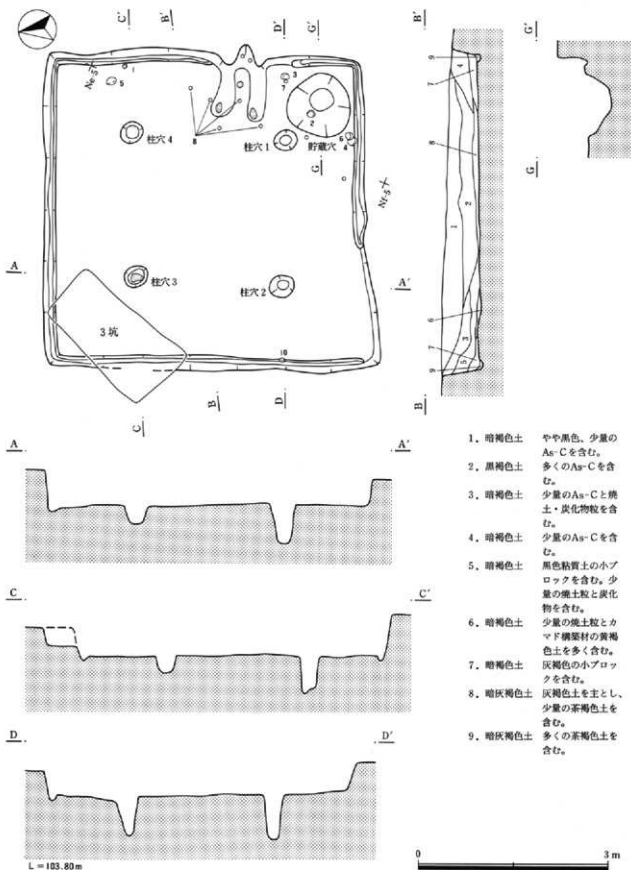
貯蔵穴 貯蔵穴が竈の右側の壁面コーナー部分に掘られていた。少し歪んでいるがほぼ円形で、直径103cm床面からの深さ33cmである。

遺物 甕(8)は竈燃焼部内と竈周辺の破片が接合された。貯蔵穴周辺からは杯(3・4・6)、鉢(7)が、貯蔵穴からは杯(2)が出土している。手捏ね土器(1)は北東隅寄りの東壁際で床面から5cm離れて出土した。土製紡錘車(9)、磁石(10)は埋没土中からの出土である。(観P47・48)

所見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。



第136図 3区15号住居(1)



- |          |                               |
|----------|-------------------------------|
| 1. 暗褐色土  | やや黒色、少量のAs-Cを含む。              |
| 2. 黒褐色土  | 多くのAs-Cを含む。                   |
| 3. 暗褐色土  | 少量のAs-Cと焼土・炭化物粒を含む。           |
| 4. 暗褐色土  | 少量のAs-Cを含む。                   |
| 5. 暗褐色土  | 黒色粘質土の小ブロックを含む。少量の焼土粒と炭化物を含む。 |
| 6. 暗褐色土  | 少量の焼土粒とカマド構築材の黄褐色土を多く含む。      |
| 7. 暗褐色土  | 灰褐色の小ブロックを含む。                 |
| 8. 暗灰褐色土 | 灰褐色土を主とし、少量の茶褐色土を含む。          |
| 9. 暗灰褐色土 | 多くの茶褐色土を含む。                   |

第137図 3区15号住居(2)

3区 16号住居(第138~141図 P.L.19・52・53)

位置 Nb・c-4・5グリッド

概要 4柱穴と残りの良い竈と貯蔵穴を持ち、壁面も深い残りの良い住居である。

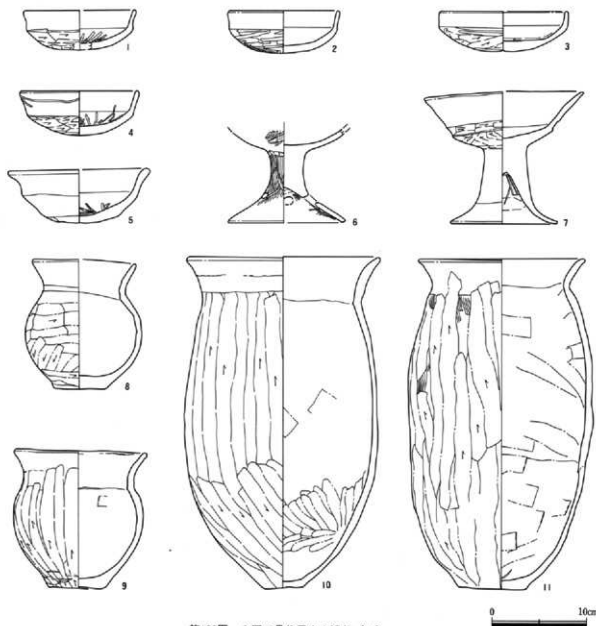
重複 北西コーナー部分で8号土坑と、北壁中央やや西寄りで204号土坑と重複しており、両土坑により住居の埋没土上面が削られている。

形状 南北方向の規模がやや大きい、ほぼ正方形に近い。規模は東西方向が6m、南北方向6.3mである。

面積 35.5㎡ 方位 N-0°E

壁・床面 残りの良い北壁面部分で83cmと残りが良い。

竈 東壁面の南寄りに竈が造られていた。燃焼面の多くは床面上に造られ、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。焚口部分は細い袖石を左右とも立てられていたが、その上の天井石は残っていなかった。右側の袖石は長さ22cmと長く、床面下に4cmほど掘り込んで据えられていた。左側の袖石は長さ25cmで床下には6cm掘り込んで据えら



第138図 3区16号住居出土遺物(1)



れていた。奥壁から遠く、両袖に近い所に、支脚石が据えられた状態で埋まっていた。その支脚石の上に杯(1)が置かれていた。妻を据えるときに高さ調節のために使われた可能性を考えたい。支脚石がこのような奥壁からかなり離れた位置にあり、支脚石と壁面との間に新たに別の竈が出来るほど長い燃焼部を持つ。奥壁に近い床面や壁面に焼土があることにより実際使われていた竈であることに間違いはなさそうである。どのような使われ方をしたのか理解できない。燃焼部幅約42cm、燃焼部の長さ約120cm、左右の袖は壁面から長さ80cmほど残っていた。

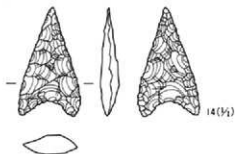
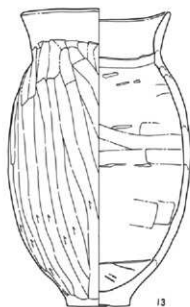
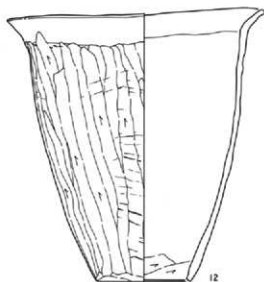
周溝 貯蔵穴周辺の住居南東コーナー部分以外、壁面下にほぼ全面にわたり掘られていた。幅は15cm前後、深さは8cm前後である。

柱穴 柱穴が4本掘られていた。柱穴1は直径43

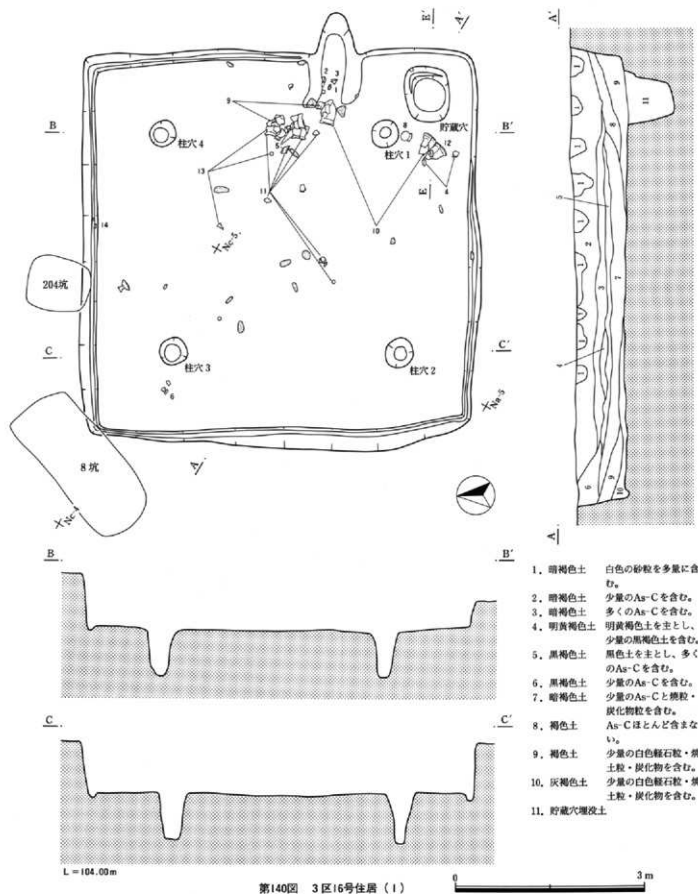
cm、床面からの深さ80cm、柱穴2は直径45cm、床面からの深さ79cm、柱穴3は長さ44cm、床面からの深さ74cm、柱穴4は直径42cm、床面からの深さ76cmであった。

貯蔵穴 貯蔵穴が竈の右側の壁面コーナー部分に掘られていた。少し歪んだ長方形をしている。長軸76cm短軸71cm、床面からの深さは80cmと深い。

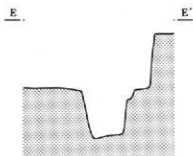
遺物 竈内では焚口部に壺(10)、壺(9)が横倒しの状態で出土した。また、杯(2・3)が燃焼部からの出土である。竈左前の床直からは、甕(11・13)、杯(5)が、貯蔵穴西側からは甕(12)がそれぞれ出土している。また、北壁際中央の埋没土中から黒曜石製の石鎌(14)が1点出土している。(観P48・49)  
所見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。



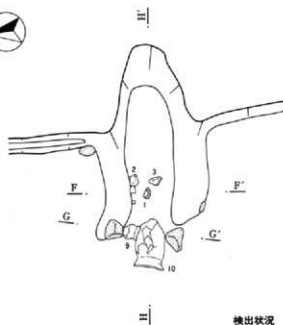
第139図 3区16号住居出土遺物(2)



第140図 3区16号住居 (I)

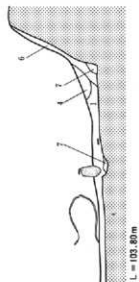


1. 暗褐色土 少量の焼土粒と炭化物を含む。
2. 暗褐色土 少量の焼土粒と白色軽石粒を含む。
3. 暗赤褐色土 2~3cmの焼土小ブロックを多く含む。
4. 赤色土 焼土を主とした層。
5. 黄褐色土 黄褐色の粘土を主とした層。
6. 暗褐色土 少量の焼土粒を含む。
7. 黄色土 黄色の粘土を主とした層。

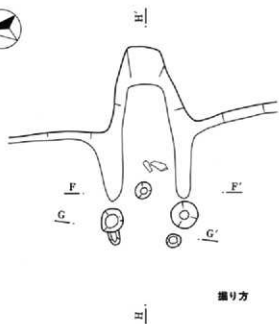


検出状況

II'

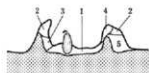


II



掘り方

F



G

F'

G'



第141図 3区16号住居(2)



3区 19号住居(第142~144図 P.L.20・53)

位置 Pr-19、Qr-0 グリッド

概要 西壁面に竈をもつ類例の少ない住居である。さらに東壁面のやや南寄りに竈の煙道とも思える掘り込みと焼土が確認された。一部しか残っていないために不明であるが、旧東竈が造られていた可能性を指摘しておきたい。

重複 西側で20号住居と重複しており、本住居が20号住居の大部分を掘り込んで造られている。また西側を耕作溝により、南東コーナー部分を210号土坑により埋設土上面が削られている。

形状 やや不定形であるが、ほぼ正方形に近い。規模は東西、南北方向とも5.3mである。

面積 26.5m<sup>2</sup> 方位 N-17°E

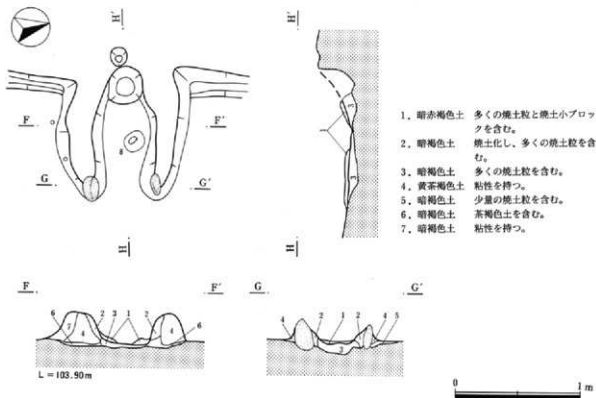
壁・床面 残りの良い北壁面部分で35cmである。

竈 西壁面の南寄りに竈が造られていた。燃焼面の多くは床面上に造られ、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。焚口部分は細い袖石を左右とも立てられていたが、その上の天井石

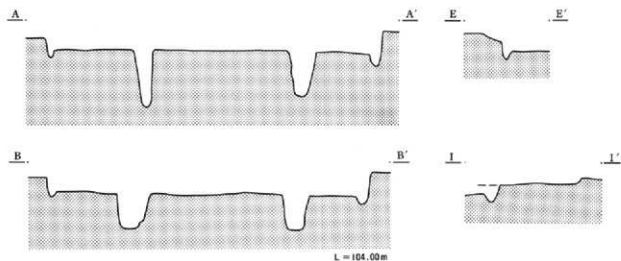
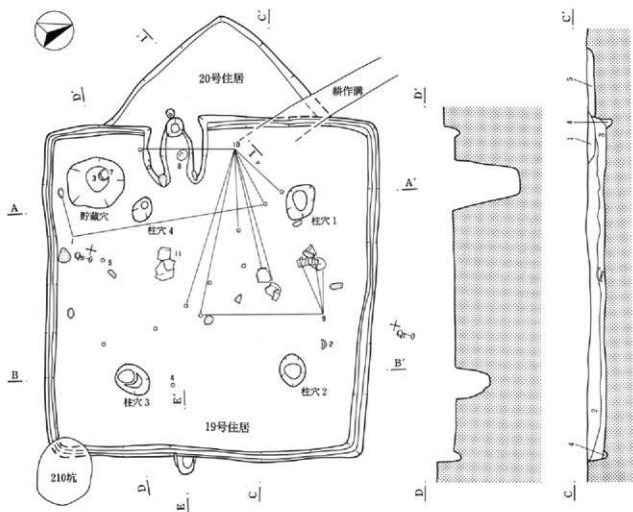
は残っていなかった。右側の袖石は長さ19cmと長く、床面下に6cmほど掘り込んで据えられていた。左側の袖石は長さ24cmで床下には7cm掘り込んで据えられていた。支脚石は無かったが、その位置に高さ16.5cmの壁(8)が口縁部を下に据えたように置かれていたために、この壁が支脚として使われていたものと思われる。燃焼部幅約47cm、左右の袖は壁面から長さ90cmほど残っていた。

周溝 竈部分以外、壁面下にほぼ全面にわたり掘られていた。幅は12cm前後、深さは8cm前後である。柱穴 柱穴が4本掘られていた。柱穴1は長径60cm短径46cm、床面からの深さ67cm、柱穴2は長径51cm短径42cm、床面からの深さ57cm、柱穴3は長径57cm短径43cm、床面からの深さ53cm、柱穴4は長径41cm短径30cm、床面からの深さ85cmであった。

貯蔵穴 貯蔵穴が竈の左側の壁面コーナー部分に掘られていた。楕円形をしている。長径90cm短径78cm、床面からの深さ99cmと深い。



第142図 3区19号住居(1)



1. 耕作土 覆土
2. 暗褐色土 茶褐色土の小ブロックを含む。少量のAs-C軽石を含む。
3. 暗褐色土 やや灰色を帯びている。
4. 暗褐色土 黒色を帯びている。軟質でAs-C含まず。
5. 黒褐色土 As-Cを含む。(20号住居埋設土)

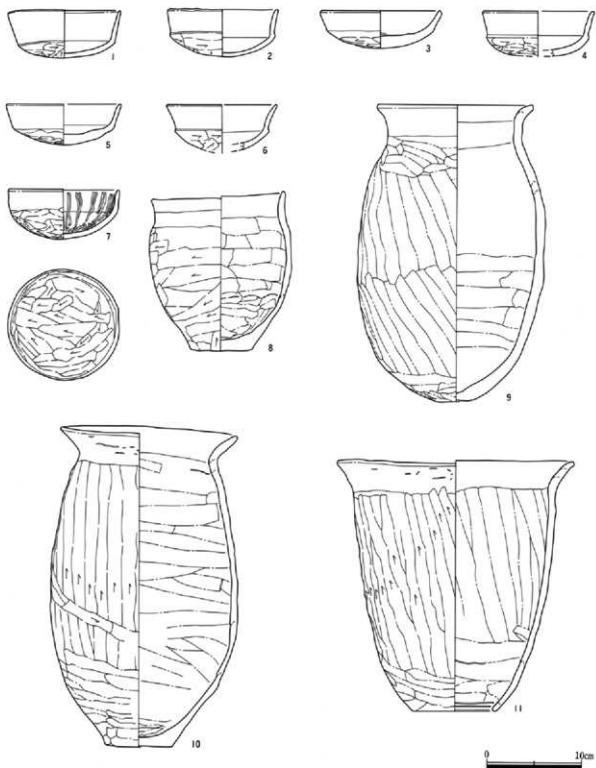
0 3m

第143図 3区19号住居(2)・20号住居

遺物 貯蔵穴内から杯(3・7)が重なって出土している。貯蔵穴の南壁際からは杯(1)が出土した。中央部では甕(11)、甕(9・10)が出土、甕(10)は破片状態となり、床面の広範囲に散布していた。(観P

49・50)

所見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。



第144図 3区19号住居出土遺物

## 3区 20号住居 (第143図)

位置 Pr-19グリッド

概要 南東部分を19号住居により深く削り取られている。そのために北西コーナー部分がわずかに調査されただけである。壁面の高さは北壁面部分で11

cmと浅く、住居規模は不明である。柱穴や周溝は無く出土遺物も無い。住居として疑問も残るが、住居として扱った。時期は19号住居に切られているために19号住居より古く、古墳時代後期以前であるがそれ以上のことは不明である。

## 3区 21号住居 (第145・146図 P L. 8・20)

位置 Pr-18・19、Ps-18グリッド

重複 竈の造られている東側壁面付近以外の大部分で、古墳時代前期の22号住居と重複しており、本住居が22号住居を床下部分まで掘り込んでいる。

形状 やや不定形であるが、正方形に近い。規模は東西、南北方向ともほぼ4.4mである。

面積 18.1m<sup>2</sup> 方位 N-17°-E

壁・床面 22号住居と重複していない東壁面部分で44cmである。床面は全面に貼床が施され、竈周辺は踏み固められていた。

竈 東壁面中央付近に竈が造られていた。燃焼面の多くは床面上に造られ、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。袖石や支脚石は残っていなかった。燃焼部は焼土化が著しく、灰層は少量であったが一面に広がり、その上に天井部の焼土化が崩落していた。袖部の下層は地山を一部掘り残し、この上に構築材を積み上げていた。燃焼部

幅約40cm、左右の袖は壁面から長さ70cmほど残っていた。

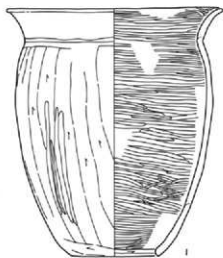
周溝 掘られていなかった。

柱穴 本来柱穴は4本掘られていたものと思われるが、3本確認されたが1本は不明である。柱穴1は直径20cm、床面からの深さ56cm、柱穴2は長径28cm短径24cm、床面からの深さ52cm、柱穴3は直径23cm、床面からの深さ41cmである。

貯蔵穴 貯蔵穴が竈の右側の壁面コーナー部分に掘られていた。長方形をしており、長径67cm短径53cm、床面からの深さ42cmである。

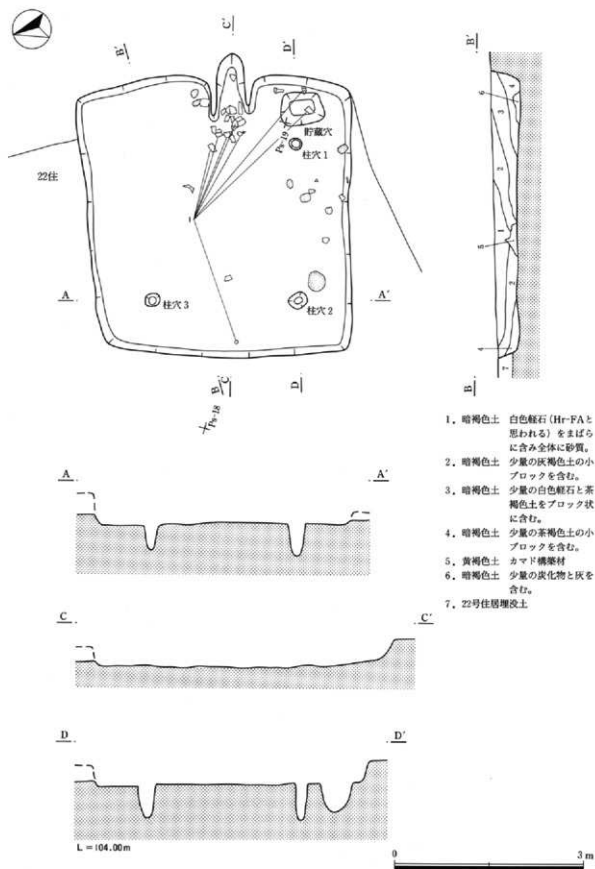
遺物 甕(1)は電手前を中心に細片化したものが貯蔵穴内、西壁際の破片と接合している。また、床面中央部からやや北寄りの位置には電構築材と同様の土塊がみられた。(観P50)

所見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。



第145図 3区21号住居出土遺物

0 10cm



1. 暗褐色土 白色軽石 (Hr-FAと  
思われる) をまばら  
に含み全体に砂質。
2. 暗褐色土 少量の灰褐色土の小  
ブロックを含む。
3. 暗褐色土 少量の白色軽石と茶  
褐色土をブロック状  
に含む。
4. 暗褐色土 少量の茶褐色土の小  
ブロックを含む。
5. 黄褐色土 カマド構築材
6. 暗褐色土 少量の炭化物と灰を  
含む。
7. 22号住居埋没土

第146図 3区21号住居



## 3区 23号住居 (第147・148図 P.L.21・54)

位置 Pq・r-17グリッド

重複 住居の北側で古墳時代前期の24号住居と重複しており、本住居が24号住居を深く床下部分まで掘り込んでいる。

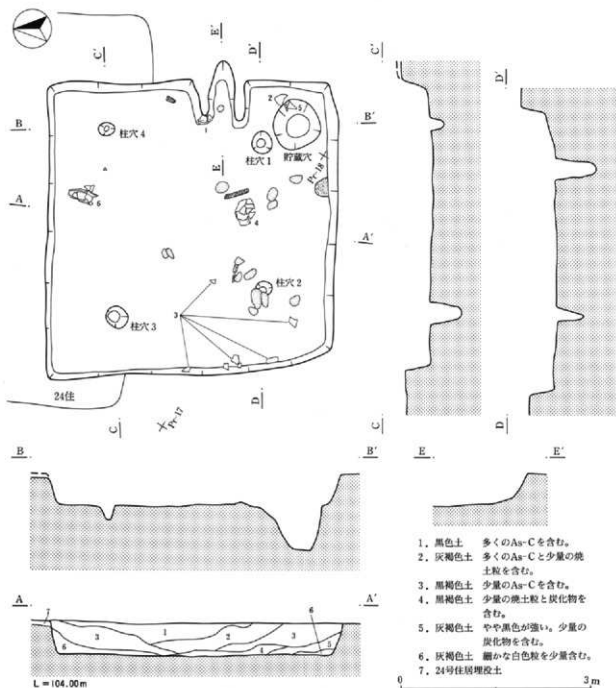
形状 南壁面付近が少し狭くなっているが、正方形に近い。規模は東西、南北方向ともほぼ4.6mである。

ある。

面積 21.4m<sup>2</sup> 方位 N-0°-E

壁・床面 南壁面部分で48cmである。

竈 東壁面中央付近に竈が造られていた。燃焼面の多くは床面上に造られ、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。袖部の構築には黄褐色粘質土を使用するが、右袖側はやや黒色土の



第147図 3区23号住居

混入が多かった。右側の袖石は残っていなかったが、左袖部分には細長い高さ15cmの石が立てられていた。その石を壘(1)が口縁部を下にして全体を覆っていた。燃焼部中央付近に長さ15cmの支脚石が置かれていた。焼土の残存も少量で、灰層も薄かった。燃焼部幅約40cm、左右の袖は壁面から長さ70cmほど残っていた。

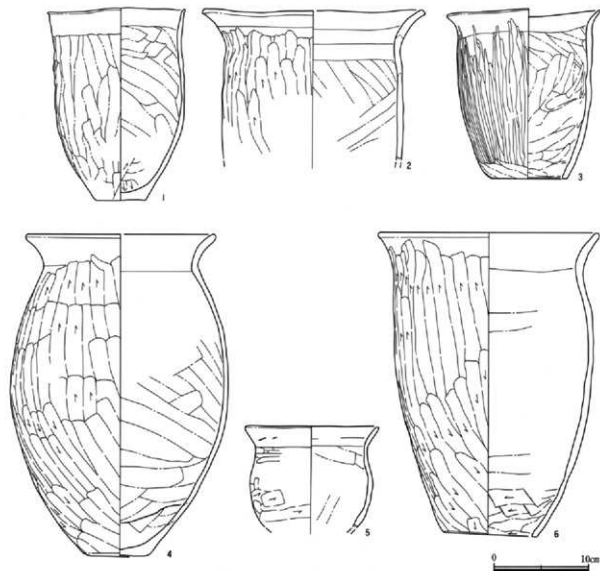
周溝 掘られていなかった。

柱穴 やや不規則であるが4本掘られていた。柱穴1は直径32cm、床面からの深さ64cm、柱穴2は直径26cm、床面からの深さ43cm、柱穴3は直径32cm、床面からの深さ46cm、柱穴4は長径25cm短径19cm、

床面からの深さ19cmである。

貯蔵穴 貯蔵穴が竈の右側の壁面コーナー部分に掘られていた。ほぼ円形であり、直径74cm、床面からの深さ68cmである。

遺物 壘(3)は西壁寄りの広い範囲に出土。また、北壁際から壘(6)が、中央部南側寄りからは壘(4)が完形で出土している。貯蔵穴内からは壘(5)、その東側からは壘(2)の破片が出土している。本住居でも兩壁際の床面上から粘土塊を検出した。さらに床面の処々から炭化物が出土している。(観P50・51) 所見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。

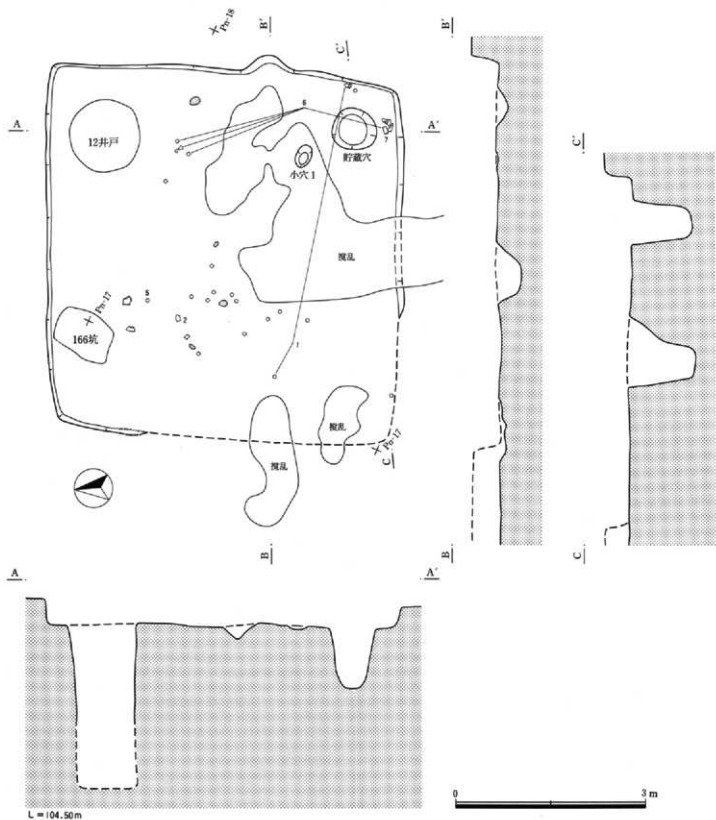


第148図 3区23号住居出土遺物

3区 26号住居 (第149・150図 P.L.20・54)

位置 Pm・n-17グリッド

概要 調査以前に住居の上には石碑が建てられていた。また、住居南側は攪乱により多くの部分が床



第149図 3区26号住居

面下まで削り取られており、南西部分の床面や壁面は残っていなかった。残りの悪い住居である。

**重複** 北東コーナー付近では12号井戸と重複しており、井戸により深く削られていた。北西部分では166号土坑と重複し、床面下まで削られていた。

**形状** 残りが悪く明かでないが、やや歪んだ方形と思われる。東西南北方向ともほぼ5.7m前後である。

**面積** 30.5㎡ **方位** N-4°-E

**壁・床面** 壁面の高さは、竈を持つ東壁面で42cmである。

**竈** 東壁面南寄りに、竈の煙道部を掘り込んだような痕跡が残っていた。床面上に袖部や燃焼部は残っていなかったが、竈に近い埋没土中に焼土が残っていた、おそらく竈であったものと思われる。住居より出土している杯は、6世紀でも初頭段階と古

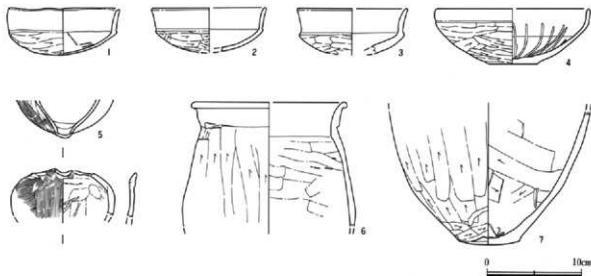
い傾向を示しているため、この時期の特色である壁面をわずかに掘り込んで竈が造られていたものと考えられる。

**周溝** 掘られていなかった。

**柱穴** 不明である。貯蔵穴北西部分にせられしき小穴が1個掘られていただけである。小穴1の規模は長径38cm短径25cm、床面からの深さ58cmである。

**貯蔵穴** 貯蔵穴が竈の右側で住居の南東コーナー部分に掘られていた。ほぼ円形で直径は70cm、床面からの深さ70cmである。

**遺物** 破片となって出土した土器が多数である。杯(1)はほぼ完形で西寄りと南東隅から出土した破片が接合、ほぼ完形。他に壺(6・7)、片口の鉢(5)が出土しているが、いずれも破片である。(観P51) 所見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。



第150図 3区26号住居出土遺物

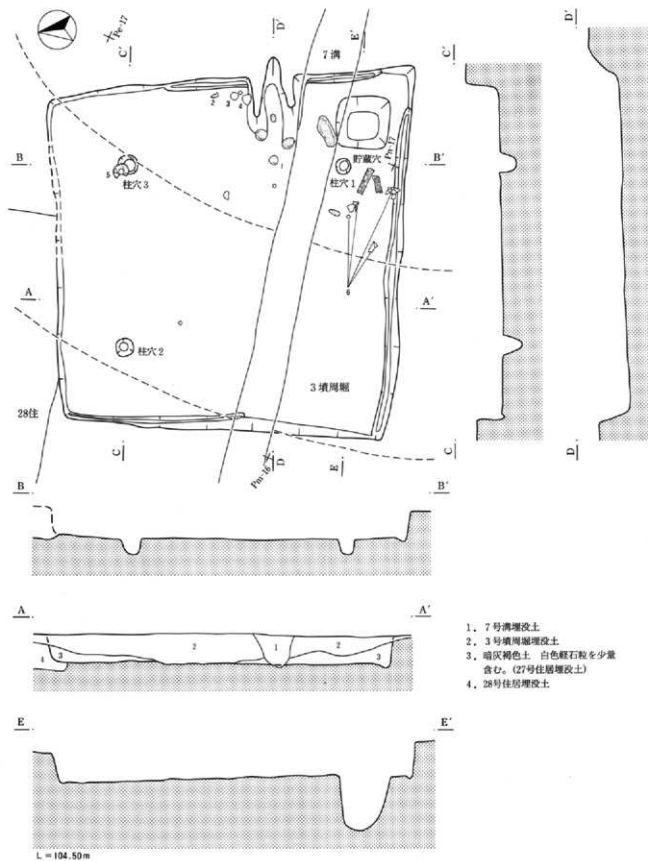
3区 27号住居 (第151・152図 P.L.21・54)

**位置** P1-16・17グリッド

**重複** 住居の中央から西側にかけての南北方向に3号墳の周堀と重複しており、周堀により床面近くの埋没土が掘り込まれていた。また住居の北壁付近で古墳時代前期の28号住居と重複しており、本住居

が28号住居の埋没土を床面近くまで掘り込んでいる。住居の南側の埋没土上面を7号溝により掘り込まれていた。

**形状** 少し歪んだ方形を呈している。規模は東西方向で北側が5.1m、南側が5.8m、南北方向で西側が5.4m、東側が5.9mである。

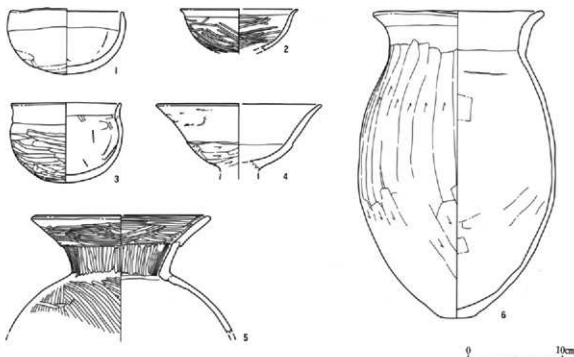


1. 7号溝埋没土
2. 3号墳周堀埋没土
3. 暗灰褐色土。白色軽石粒を少量含む。(27号住居埋没土)
4. 28号住居埋没土

第151図 3区27号住居

面積 28.4m<sup>2</sup> 方位 N-4°-W  
 壁・床面 全体に残りは良好であり、壁面の高さは電の造られている東壁面部分で48cmである。床面は電の周辺が固かった。  
 竈 東壁面中央やや南に電が造られていた。燃焼面の多くは床面上に造られ、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。構築材には黄褐色土が使用されていた。袖石は少し前後にずれているが2個据えられた状態で残っていた。左右とも袖石は高さ29cmで7cm床面を掘り込んで据えられていた。燃焼部中央付近に長さ10cmの支脚石が3cm床面を掘り込んで据えられていた。燃焼部幅約23cm、右の袖は壁面から長さ118cm、左の袖は壁面から長さ100cmほど残っていた。  
 周溝 本来全面にわたり掘られていたものと思われるが、ほぼ半分以上の壁面の下で確認された。幅

は15cm前後、深さは8cm前後である。  
 柱穴 本来4本掘られていたものと思われるが、3本確認され、南西部分の1本は確認できなかった。柱穴1は直径26cm、床面からの深さ26cm、柱穴2は直径30cm、床面からの深さ35cm、柱穴3は直径32cm、床面からの深さ26cmである。  
 貯蔵穴 貯蔵穴が電の右側の壁面コーナー部分に掘られていた。ほぼ方形であり、長軸方向85cm短軸方向80cm、床面からの深さ87cmである。  
 遺物 電左脇から碗(3)、高杯の杯部(4)が、南壁、貯蔵穴寄りから壺(6)が出土した。柱穴3際から出土した壺(二重口縁)(5)は直接本住居に伴わないものである。  
 貯蔵穴に接し、炭化物が出土している。(観P52) 所見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。



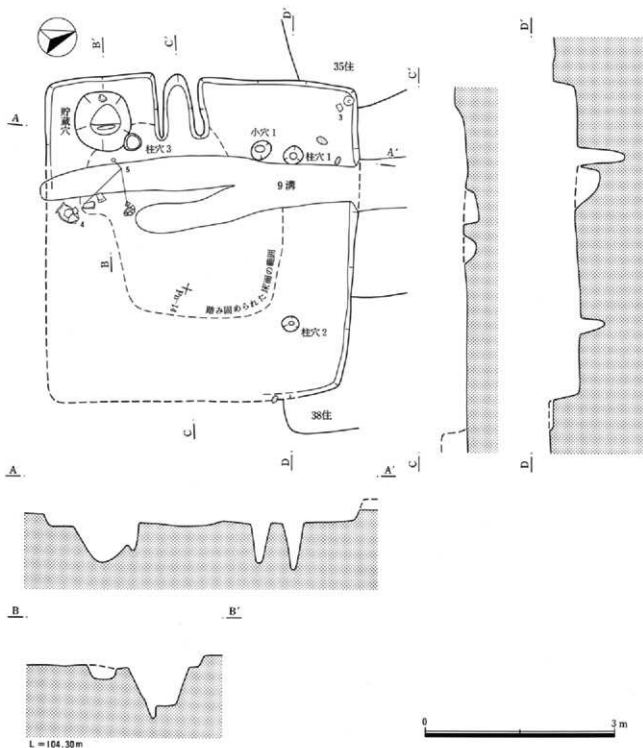
第152図 3区27号住居出土遺物

3区 30号住居 (第153・154図 P.L.21・54)  
 位置 Pm-13・14、Pn-13グリッド  
 概要 西壁面に竈を持つ珍しい住居である。3軒

重複している住居中の1軒であり、また南東部分は残っていなかった。床面中央部が踏み固められ固い床面が残っていた。

重複 住居の北西コーナー部分で35号住居と、北東コーナー部分で38号住居と重複している。2軒とも古墳時代前期の住居であり本住居の方が新しい。本住居が新しくしかも掘り込みが深かったために、2軒を深く床下部分まで掘り込んでいる。また、南

北方向に掘られている9号溝と重複しており、9号溝により床下部分まで深く掘り込まれている。形状 南東部分が残っていないために明らかでないが、ほぼ正方形に近い方形であったものと思われる。規模は東西、南北方向ともほぼ5mである。



第153図 3区30号住居

面積 25㎡ 方位 N-6°-E  
 壁・床面 北壁面部分で32cmである。竈手前から床面中央部全体が踏み固められており、固い床面となっていた。

竈 西壁面南寄りに竈が造られていた。燃焼面の多くは床面上に造られ、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。袖石は残っていない。燃焼部幅約40cm、左右の袖は壁面から長さ100cmほど残っていた。

周溝 掘られていなかった。

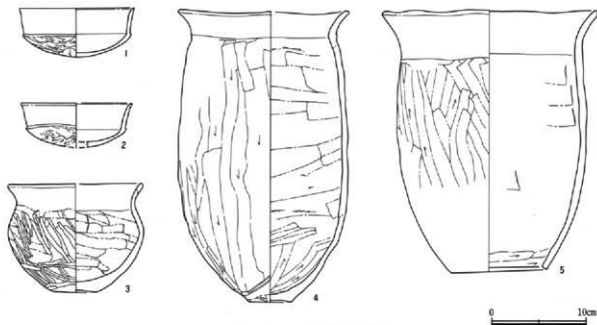
柱穴 柱穴らしき小穴が4本あり、位置関係から柱穴と思われるのはそのうちの3本である。他の1本は小穴として扱う。柱穴1は直径30cm、床面から

の深さ69cm、柱穴2は直径28cm、床面からの深さ40cm、柱穴3は直径29cm、床面からの深さ42cm、小穴1は柱穴1に近接し直径35cm、床面からの深さ62cmである。

貯蔵穴 貯蔵穴が竈の左側の南西コーナー部分に掘られていた。底部の一部が特に深く掘られており、ほぼ円形である。規模は直径94cm、床面からの深さ85cmである。

遺物 中央部から南壁際にかけて壺(4)と甕(5)が出土した。杯(1・2)は貯蔵穴内から出土した。(観P52)

所見 出土遺物から、6世紀前半の住居と考えられる。



第154図 3区30号住居出土遺物

3区 34号住居 (第155図 P.L.21)

位置 Ph-12、Pi-12・13グリッド

概要 床面中央部分と西壁面部分に237号土坑の掘り込みがある。住居に伴うものか確認できなかったので図上に示した。

形状 やや歪んでいるがほぼ方形である。規模は東西南北方向とも4.2mである。

面積 17.0㎡ 方位 N-9°-W

壁・床面 壁面の高さは残りの良い北壁面部分で18cm前後である。床面は竈焚口部前を中心に南東部分が固くなっていた。

竈 東壁面の南寄りに竈が造られていた。左袖は長く床面上に位置しているが、右袖は残っていない。燃焼面の多くと煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。袖石は残っていない。燃焼部内の焼土の堆積は少ない。焼土の下には灰層が薄く、



煙道部まで広がっていた。煙道部内には焼土が充填されていた。袖部は黄褐色土を材料に構築されていた。燃焼部幅約40cm、左の袖は壁面から長さ70cmほど残っていた。

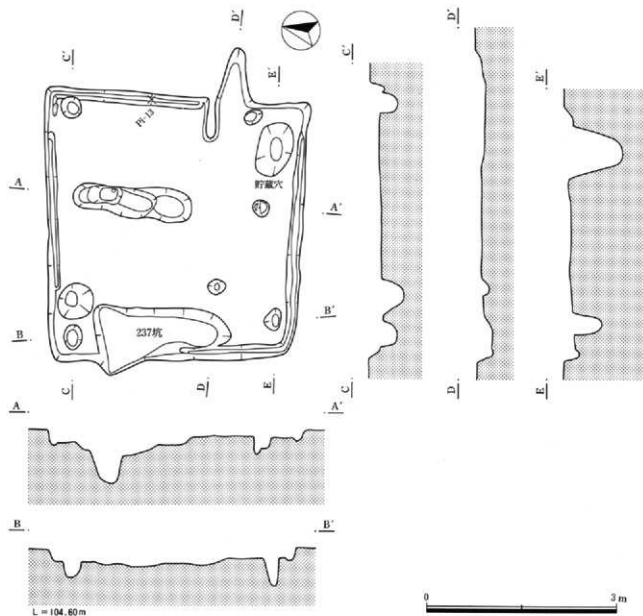
周溝 北西コーナー部分と貯蔵穴のある南東コーナー部分の壁面下以外で掘られていた。幅は15cm前後で深さは5cm前後である。

柱穴 明らかな柱穴は不明であるが、小穴が多く掘られていた。それぞれの小穴をエレベーション図をもって深さを示した。

貯蔵穴 竈の右に掘られていた。やや細長い楕円形を呈しており、大きさは長径87cm短径56cm、床面からの深さ81cmである。

遺物 埋没土中から台付甕(単口縁)や小型甕等の破片が少量出土している。全て4世紀代の土器であり、竈を持つ5世紀代以降の土器は出土していない。

所見 出土遺物では、4世紀代の住居と考えられるが、竈を持つことより5世紀以降となる。遺物と遺構の特色が矛盾する。遺構を優先して5世紀以降となるが、時期を特定することは出来ない。



第155図 3区34号住居

3区 45号住居 (第156図 P.L.21)

位置 Pf-17グリッド

概要 竈を持つ浅く小さな住居である。竈の造られた位置は南西方向になりやや南壁面と解釈することも可能である。しかし、南竈の調査例は1000軒以上の調査例にもかかわらず、おそらく県内ではない。浅い住居のために住居範囲の確認に問題があるのではないかと考えられる。それらを含めてここでは西壁面に竈が造られていたと解釈し報告する。

重複 南東コーナー部分で21号溝と重複し、床下部分まで深く掘り込まれている。

形状 東西方向がやや長い長方形を呈している。規模は東西方向2.8m、南北方向2.4mである。

面積 6.4㎡ 方位 N-30°-E

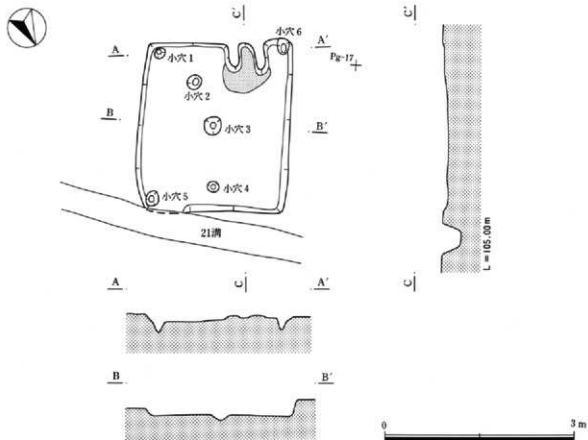
壁・床面 全体に残りが悪く浅い住居であり、壁面の高さは西壁面部分で13cmあるが、北東コーナーの壁面部分ではわずか5cmであった。

竈 西壁面に小さな竈が造られていた。燃焼部内と焚口部分に多くの焼土が残っており、両袖部分も焼土化していた。左袖は壁面から45cm、右袖は壁面から50cmほど残っており、袖の高さはわずか5～7cmであった。燃焼部幅は狭く28cmであった。周溝・貯蔵穴 両方とも掘られていなかった。

小穴 柱穴は掘られていない。小穴が6個掘られていた。小穴1は直径18cm、床面からの深さ17cm、小穴2は直径24cm、床面からの深さ31cm、小穴3は直径30cm、床面からの深さ8cm、小穴4は直径18cm、床面からの深さ34cm、小穴5は直径22cm、床面からの深さ28cm、小穴6は長径25cm短径18cm、床面からの深さ12cmである。

遺物 全く出土していない。

所見 竈を持つことより5世紀後半以降であるが、それ以上は不明である。



第156図 3区45号住居

## 第5章 調査成果と整理のまとめ

### 第1節 荒砥諏訪西遺跡の集落変遷と占地

荒砥諏訪西遺跡の調査においては古墳時代の竪穴住居62軒を検出した。縄文土器は、包含層中から土器片が出土しているものの遺構は検出されていない。弥生時代は、遺構・遺物ともに出土をみていない。従って、調査区域内で最も早い時期の竪穴住居は古墳時代前期のものである。

調査された古墳時代前期の住居件数は42軒で、南北方向に延びる微高地の西縁寄りに占地しており、微高地南端近くまでその分布範囲が及んでいる。その東側にはサク状の畠が9地点検出されている。この微高地は北東部分、調査区6区は、圃場整備事業の計画変更を受け、As-B下水田以下については保存されることになり、調査は古墳時代前期の生活面にまで及んでいない。しかしながら、2区東側では住居件数が極端に減少、3区でも16号住居や39号住居の東側、bライン以東では住居の検出がないことから、住居の分布の中心は微高地西側に片寄っていたものと思われる。住居の立地は北接する諏訪西遺跡のB区調査区内にも延びており、微高地上をさらに北方向にまで及んでいると想定される。

古墳時代前期の竪穴住居の分布状況は中期へと継続してはいない。ただし、本遺跡に北接し、群馬県教育委員会が調査した諏訪西遺跡B区では5世紀代の炉を付設する竪穴住居が1軒検出されており、中期には集落占地の移動が行われたことも考えられる。

後期になると竪穴住居は、再度調査区内の微高地上に形成されるようになるがその検出数は17軒と前期の42軒を大きく下回る。が、個々の立地については前期の時期とその大勢は変わらず、微高地西側寄りを中心としている。なお、3区北端から北方250mの距離にある諏訪西遺跡A区でも6世紀前半の住居1軒を検出している。以後、奈良・平安時代の竪穴住居は検出されていない。

3区検出の第3号墳は周堀西側部分で、第26号住居、第27号住居と重複し、両住居を掘り込んでおり、6世紀後半以降、集落の一部が墓域化したことが知られる。また、微高地東側は6区でAs-B下から水田面が検出されている。これらの点については本遺跡の第2分冊で報告する整理内容を踏まえ、再度、整理検討される場を設定したいと考える。また、今後整理作業が予定されている荒砥宮田遺跡の報告と合わせ、本遺跡と周辺遺跡に対する総合的な検討が可能となると思われる。

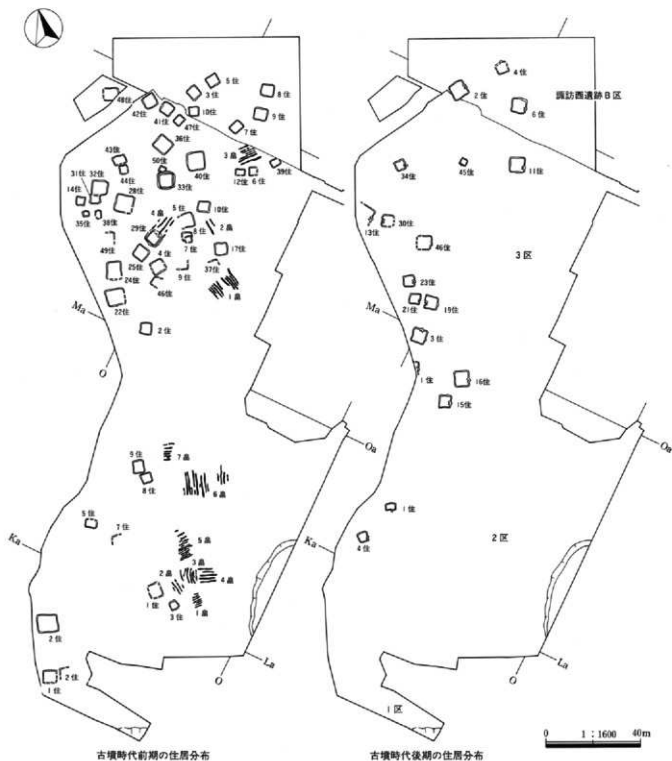
#### (1) 古墳時代前期の住居について

住居群の構成についてその分布をみると、限定された規模の住居が特定の場所に集中する傾向はみられないことから、大小規模の竪穴住居が同時に占地するという集落景観があったものと考えられる。

住居の畑方の方向は北壁に近い壁面の方向がN-24°-WからN-48°-Eまでの間にある。多数は磁北から東西20度前後の振れであるが、3区36号住居、3区47号住居など8軒は約45度前後振れていた。

検出した住居42軒の内、3区で7号と8号、33号と50号、31号と32号、43号と44号の4カ所で重複関係が認められている。また、3区29号住居は畠と重複している。後述するように出土土器群の内容から住居群の構成を細分することは困難であったが、当然のことながら42軒が一時期に集落を形成していたとは考えられない。住居群の構成の細分については今後の課題としたい。

竪穴住居の形状は正方形に基本をおいて設計されているようである。縦横の比率が小さく、1.1:1.0あるいは1.0:1.1の中に19軒が収まり、これから縦横比1.2:1.0あるいは1.0:1.2の範囲内にも19軒がある。これを逸脱する長方形の形状を呈する住居は3区43号住居など4軒だけである。また、住居の面積の大小と縦横比の関係についても特段の傾向は見出しがなかった。



第157図 羗塚調査西遺跡の竪穴住居

竪穴住居の規模についてその面積値を明らかにすることが可能な住居は21軒である。その中で面積が最大なもの3区40号住居で46.7㎡である。2区2

号住居はこれを超えて53.6㎡が推定される。一辺7mを超える住居は3区40号住居、2区2号住居の他に3区28号住居がある。これに対し最小のものは3

区50号住居で6.0m<sup>2</sup>である。3区35号住居はこれを下回るものであろう。面積値の傾向は15～16m<sup>2</sup>と27～28m<sup>2</sup>にやや集中する傾向が見られるものの、6.0m<sup>2</sup>から46.7m<sup>2</sup>の間に間断なくあり、特別なピークを有していない。

柱穴は大型住居では4本認められるが、中小規模の住居ではその限りでない。

正方形の平面形を有する住居の入り口は東・西壁に設置されることが基本であったようである。例外的に3区29号住居は西壁に、3区6号住居は北側に入り口があった可能性がある。ただし、入り口施設の有無を決定できる資料は全くみられず推定の域を出ないことである。

炉、貯蔵穴の位置と入り口施設位置関係であるが、炉と貯蔵穴の両者が検出された住居は10例を数える。入り口の右手側に貯蔵穴がある。炉は入り口の反対側、中央より奥まった位置に設けられていることが通例であるようだ。これは、壁面の長短とはあまり関連性は無いようである。3区36号住居は入り口と思われる壁面の左手に貯蔵穴が設けられていたようである。

炉の位置は中央よりやや奥よりの2本の柱穴を直線で結んだラインより内側が多数である。このほかに2柱穴間のライン上のものとして3区6号住居、3区17号住居、3区29号住居がある。3区5号住居はラインより内側に位置していた。

#### (2) 古墳時代後期の住居について

住居群の構成について明確なグループ分けができるような状況は看取できないが、調査区の北半にあたる3区で南北約120mの間に15軒が検出されたのに対し、南半の1区・2区では2軒の検出にとどまっている。

竪穴住居の形態は平面形がいずれも正方形に近い形状を呈している。南北：東西の比率が1.03：1から1：1.05の値の中に15軒が含まれ、これから逸脱する住居は3区45号住居の1：1.16と2区6号住居の1：1.65だけである。

住居の方位はN-0°-EからN-17°-Eの間に

10軒があり、N-10°-E前後に何らかの設計基準があったことも考えられるが特段の傾向は認められなかった。むしろ個々の方位のばらつきは沖積地に接した微細な地形の傾斜に起因しているものが多数あるように考えられる。

竈の付設された壁面は3区19号住、3区30号住が西壁、2区6号住が南壁で、その他は東壁である。3区3号住は東壁から北壁へ移動している。

規模は、3区3号住が南北5.8×東西5.7から6.0m、33.9m<sup>2</sup>で最大、3区45号住が南北2.4×東西2.8m、6.4m<sup>2</sup>と最小である。規模の明らかな14軒における面積の平均値は、23.5m<sup>2</sup>である。

集落の推移は、後節に述べる出土土器の検討から、6世紀前半の間にあることが想定される。検出時に重複関係が確認された住居は、3区19号住居と20号住居だけであるが、3区13号住居と30号住居、3区19号住居と21号住居、3区26号住居と27号住居はそれぞれの住居の距離が3.3mと実質的な重複関係にあるので、集落の形成は少なくとも2時期以上に及ぶ可能性が高い。

## 第2節 古墳時代前期の土器

### (1) 器種について

荒砥諏訪遺跡で検出した42軒の竪穴住居出土の土器の器種については第6表に提示したとおりである(表中の数字は資料化した土器の数量である)。器種には、器台・高杯・壺・甕・鉢・埴・有孔鉢・蓋・手捏ね、あるいはミニチュアが確認できた。

### (2) 各器種の分類と特徴

壺は単純口縁・二重口縁・折り返し口縁の壺、広口壺、直口壺に細分できる。また、小型品の中には甕、鉢等との境界領域にあるものも多数認められた。

単純口縁壺 小型品は直口壺や鉢との分類が困難である。大型品は、頸部から明瞭に屈曲、外反して高い口縁部を有する形状の個体が見られる。また、3区17号住居の21・22は口縁部が欠損するが、3区25号住居5のような口縁部が接合するものと考えられ、直口縁に横長の球脚を呈するものと考えられる。

3区25号住居6は長胴である。3区5号住居3は口縁部が内湾気味に立ち上がる。

二重口縁壺、あるいは有段口縁壺は概して大型品が多く、口縁部の立ち上がり方に差異が認められた。1区1号住居3・4、3区22号住居19は明瞭な稜をなした後、上半部が長く外反するものである。3区22号住居17や3区40号住居22も同類であるが先端が短く、つままれたようになっている。3区17号住居13も同様であるが形状、器内は厚い。3区7号住居7は中位に粘土紐をめぐらせ稜を形造っている。3区17号住居12は上半がやや受け口状に立ち上がっている。3区25号住居10は外面先端がわずかに折りがえっている。3区24号住居5は有段部分に刻みが施文されている。3区24号住居9は口縁部上半部を棒状浮文で加飾するものである。

折り返し口縁壺は3区28号住居48のように外面先端が粘土紐1本ほどの幅で肥厚するものと、3区17号住居24のようにそれより幅広のものがある。形状、法量にはバラエティーがある。口縁部の立ち上がりは概して頸部から明瞭に屈曲して立ち上がるが、3区8号住居5、3区40号住居23は緩やかに外反して立ち上がる。3区17号住居24・26、3区28号住居47・48・49はそれぞれの特徴が類似するものである。3区29号住居6は外面先端が肥厚するものであるが、胴部はやや長胴の傾向がみられ他の球形を呈する壺とはやや異なる。

3区25号住居8は口縁部に輪積み痕を2段残している。

広口壺は3区28号住居58・59のように口縁部径と比較して頸部があまり締まらない形状のものをここにあてた。鉢と判別困難な資料もある。

直口壺は口縁部の立ち上がりの高さと同部高との比率、口縁部の立ち上がりに差異がある。口縁部は直線あるいは外反気味に立ち上がるものと内湾気味に立ち上がるものがある。外面全体と口縁部内面にはいねいな磨きが施される。

1区1号住居2、2区9号住居8、3区40号住居24は小型品で胴部下位に小孔を一箇所穿っている。

3区22号住居1も同様である。

壺には平底で単純口縁のもの、口縁部に輪積み痕を残すもの、丸底のもの、台付壺などがある。

平底壺には法量の大小、形状、器面の調整にバラエティーがみられた。この状況は同一住居出土の資料を比較しても認められることで、住居別の特徴を抽出できる状態ではなかった。器面の調整には刷毛目、ナデ、磨きが多用されているが、内面に磨きを加える事例は少数であった。小型品は鉢との分類が困難であった。3区4号住居8は全体の器高を有するとともに縦長の胴部を有し、他とやや様相を異にしていた。3区17号住居32、3区36号住居17・19も同様の形状である。

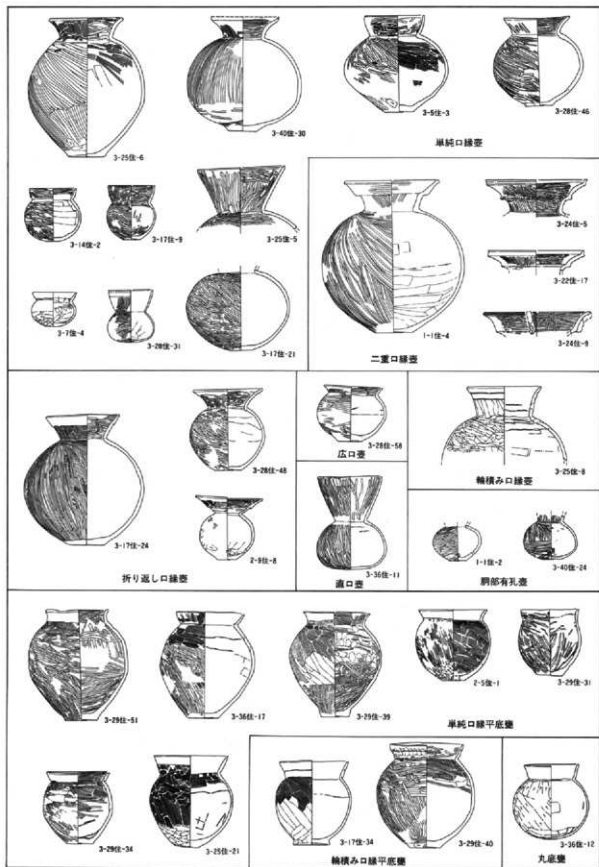
丸底壺には3区36号住居12がある。胴部は球形を呈し、器内は薄い。

口縁部に輪積み痕を残す壺には3区17号住居29・34、3区28号住居61・65、3区29号住居40、3区40号住居49・51、3区47号住居4・6がある。

台付壺は口縁部の形状が単純口縁のもの、S字状口縁のもの、疑似S字状口縁のもの、折り返し口縁のものがあり、それぞれに法量の相違が見られる。

単純口縁の台付壺は全体の器内が厚く、重量を有する資料が多い。口縁部の立ち上がりは頸部から弧をなして外反するものとの字状に屈曲、立ち上がるものがある。胴部はその張り具合に横に張り、球状を呈するものと、胴部に最大径を持つが、長胴のものとなる。胴部と脚部の接合部分は弧をなして移行するものとシャープに変換するものがある。脚部は裾部に向かって内湾気味に延びるものとハの字状に延びるものがある。端部を内側に折り返す事例は見られない。器面の調整では刷毛目のみ。刷毛目をナデ消す。刷毛目をナデ消し、これに磨きを重ねる。ヘラナデなどが施されている。3区33号住居24にみられるヘラナデはやや新しい様相と考えられるが、他は時間的変遷を検討することは困難と思われる。

S字状口縁台付壺は3区40号住居60、3区29号住居71などのような個体もあることから大中小の法量のものがあるようである。口縁部をはじめとした各



第158図 荒砥塚西遺跡古墳時代前期の土器 (1) (1:8)

部位の特徴からはこれらの土器群を細分するに足る特徴は見出し難い。口縁部先端、いわゆる口唇部の面取りはほとんど強調されることはない。頸部内面には刷毛目が施されていない。大きな相違は、3区14号住居6や3区40号住居64に代表されるように、胴部外面の肩部に横ハケが施されるものと施されないものに二分されることである。

疑似S字状口縁台付甕は、3区36号住居23が完存資料である。他に3区4号住居6、3区29号住居62・63の4例が認められる。器内は全体に厚く、重量もS字状口縁台付甕に比して格段重い。口縁部は外面の中位に弱い稜を有し、S字の屈曲が崩れたように見えるが、内面には器面の変換点が認められないものである。脚部は裾部内面に折り返しが見られない点は単純口縁台付甕と共通する。胴部外面の調整は刷毛目ではなく磨きである。

折り返し口縁台付甕は3区19号住居と3区36号住居22がこれである。3区29号住居49も同形であろうか。口縁部外面の先端が薄く肥厚しており、3区36号住居22は指頭圧痕が連続している。輪積み口縁として理解する必要もあろう。脚部部の裾は内面に折り返しは認められない。胴部外面の調整は刷毛目を基調に磨きを重ねている。

器台はいずれも小型品である。脚部が明瞭に内湾曲するものは無いが、3区4号住居3、3区29号住居15にややその傾向が見受けられる。全体的には途中に屈折点が見られるものの全て外反して裾部に至っている。裾部径が受部の径を凌駕する形状である。

受部は細部に相違が見られる。3区28号住居24のように直線的に延びるもの。2区9号住居5のように内湾して杯状に立ち上がるもの。3区5号住居1のように外反して立ち上がり、外面、中位に稜をなすものなどがある。

受部は、脚部との接合部に貫通孔を持たないものもある。脚部に配された透孔の数量、位置には数多数のパラエティーがみられた。3区22号住居6、3区33号住居9は製作途上の台付甕を転用したものであろう。

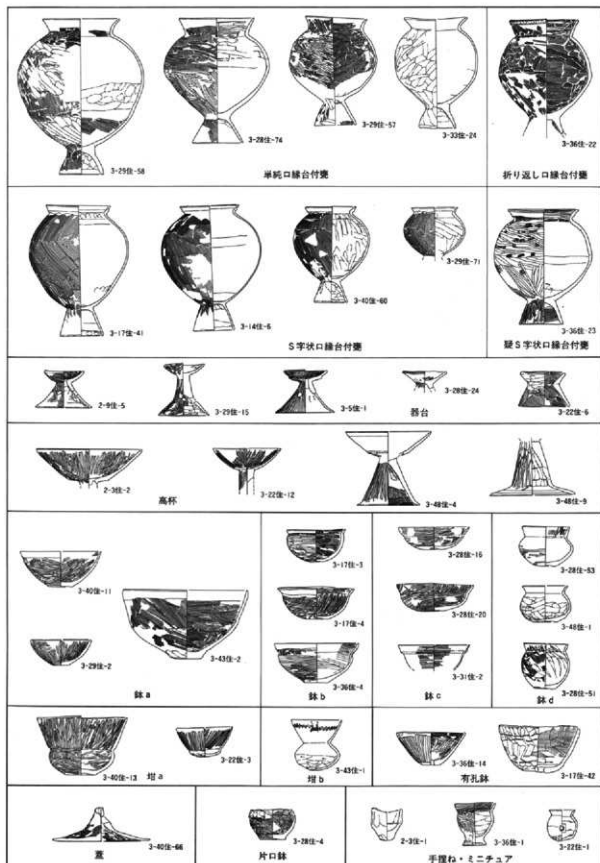
高杯の完存資料は皆無であった。器台との区別が困難な資料もある。3区22号住居12のように杯部が碗状を呈するものと2区3号住居2のように外面の下位に弱い稜を有する有稜のものが見られる。口縁部の径と深みには大小のばらつきがある。脚部は3区48号住居4・9の残存が比較的良好である。9は柱状を呈し、裾部近くに屈折、大きく外反する形状である。

鉢には様々な形状が認められたためaからdまでに細分したが境界領域に入る事例も多く、小型の壺・甕との区分も困難であった。aは口縁部が屈曲することなく、斜め上方に向かって立ち上がる形状である。底部は平底である。bは斜め上方に向かって立ち上がり、上位で屈曲、短い口縁部がつくもので底部は平底である。cは器形は口縁部径に比して器高が低く、扁平である。口縁部は底部の立ち上がりから一端くびれた後大きく外反している。底部は丸底である。3区31号住居2や3区40号住居7は平城宮S D6030下層出土土器分類の碗Aに類似する。dは小型壺、小型甕との分類が困難であるが、煮沸によるススの付着はあまり顕著ではない。口縁部径と器高の関係はほぼ等しく、胴部径は口縁部径と同等あるいはこれをやや上回っている。球脚で、頸部が屈曲、短い口縁部がつく。器面には磨きが多用されている。

埴はいわゆる小型丸底土器である。a・bに二分される。aは、口縁部径が器高を大きく上回る形状である。胴部は扁平な半球形で、底部は大型品を除き丸底あるいは狭小な凹面を呈している。3区22号住居3に代表される。bは、口縁部径に比して胴部高を有する。胴部は球形あるいはやや扁平な球形を呈している。3区43号住居1に代表される。

有孔鉢はいずれも底部中央に一孔を有するものである。口縁部が斜め上方に直線的あるいはやや内湾気味に立ち上がっている。3区17号住居42は他例と異なり、底部から口縁部への移行部分が丸みを帯び、口縁部外面先端に輪積み痕を有する点が特徴的である。





第159図 兎塚墓跡西遺跡古墳時代前期の土器 (2) (1:8)

第6表 古墳時代前期住居出土の土器一覧

住居名	査				広直		蓋						器高	鉢				埴		有孔	手捏ね・ミニチュア	その他				
	単純	二重	折返し	輪口	細口	明不	平底		台		付			細口	明不	a	b	c	d				a	b		
							単純	輪口	細口	明不	単純	折返し													S字状	疑S字状
1区1住		2			1								1													
2区1住																										
2区2住							5			1		2	1				2		1							
2区3住	1									1			2				1							1		
2区5住					1					1	1		2													
2区7住														3	1											
2区8住					1			1		1																
2区9住		1			2									3			2									
3区2住																										
3区4住	1							1				1	1					2								
3区5住	1													1	1											
3区6住																	1									
3区7住	1	1			1		1	1																		
3区8住	1		1		1																					
3区12住														1	1									丸底甕1		
3区14住	2		1		1			1				1														
3区17住	4	3	2		6		3	5	2		1	4			2	1			2	3		1	1			
3区22住		2			1		3					2	1			4	3			1	1		2			
3区24住		2												2	1	2					1		1			
3区25住	3	1	1	1	1		1	2				5						1	1	1						
3区28住	7		4		3	2	5	6	2	4	7	7		4	3	4	3	2	7	7	4	3	3	片口鉢1		
3区29住		2	2		2		1	14	1		9	1	4	2	4	9	8	1	6	1	2	1				
3区31住																										
3区32住	1		1		1				1												1		1	1		
3区33住	1	2			2			1		2	2	4		5	3	2	1	3			3	1	3			
3区35住	1											1										1				
3区36住	4				1	1	2	4			1	6	1	2		2	1	3				1	1			
3区38住												1				1										
3区39住									1							1										
3区40住	7	1	2		7		2	3	2	1		7		3	14	1	2	2	1	5		4	1	甕の蓋1		
3区41住			1		1										1							1	1			
3区42住																						1				
3区43住									2									1					1	1		
3区44住			1																							
3区47住	2							2	1												1					
3区48住			1		1				3			2			2							2				
3区49住												1			1							1				
合計	37	18	16	1	34	3	18	49	8	12	17	4	56	5	23	49	36	18	14	20	15	19	18	9	9	12

他の器種としては、3区40号住居66の天井部に貫通する孔を有する蓋、3区24号住居3の片口鉢、小型土器が出土している。小型土器には2区3号住居1に代表される成・整形の粗雑ないわゆる手捏ね様の資料と3区36号住居1のように小型ではあるが精美な仕上げを施したものがある。

## (3) まとめ

以上、器種ごとにそのあり方について述べてきたが、最後にこれら荒砥諏訪西遺跡の土器群に対する時間的な位置づけについて簡単にまとめておきたい。

今回報告した土器群には楊描文や縄文を施文する

資料は認められない。口縁部に輪積み痕を残し、他の器面は無文のものは平底甕あるいは壺の中に少量存在する。S字状口縁台付甕の特徴は田口一郎<sup>註1</sup>氏の分類中のⅢ-b類、Ⅳ-b・c類に相当するものと考えられる。Ⅳ類には一部刷毛目が粗雑となっているものがあるが、全体にヘラ削りを施すものは見られない。台付甕は多彩であるが3区33号住居24を除き、器面の調整には刷毛目、磨きが多用されている。器台は全て小型で、脚部が内湾するものはほとんど無い。高杯は3区48号住居9が屈折脚を思わせるものでその他には柱状の脚部を有するものは無い。丸底あるいは狭小な凹面を有する鉢cや増a・bが存在する。

これらの特徴から今回報告する土器群は田口一郎氏のおこなったS字状口縁台付甕の細分のⅣ・Ⅴ期、<sup>註2</sup>深澤敦仁氏の3・4段階、<sup>註3</sup>新潟シンボルの7から9期に対応すると考えられる。住居軒数、重複状況の事実からこれらの土器群のもつ時間幅も当然細分される可能性が高いと思われるが、今回、具体的な提示をすることは困難であった。

荒砥諏訪西遺跡の位置する赤城南麓地域における古墳時代前期の土器の様相については先学らによる研究が重ねられ、弥生時代後期の在在系土器の系譜を引く土器の展開と、広範囲からの外来系土器の受容とその定着化の動きの中で複雑な共存関係の土器群が形成されていることが指摘されている。そのことは本遺跡においても同様の傾向を壺、甕をはじめとした各器種にうかがうことができる。甕は6器種に細別可能であるが、それらが細別された器種ごとに住居別に採用されているわけではない。例えば、5軒の住居でS字状口縁台付甕とそれ以外の台付甕が共存している。本遺跡において、S字状口縁台付甕が甕全体の中で占める割合はけては主体的なものではない。3区36号住居からはS字状口縁台付甕とともに平底甕、甕S字状口縁台付甕、折り返し口縁台付甕が出土し、多彩な様相を呈している。

疑似S字状口縁台付甕は、東海西部地域から波及したS字状口縁台付甕が群馬県地域に波及したのと

異なり、東海西部地域から別地域に波及、変容した形状の土器の製作技法が群馬県地域に波及した。あるいは単純口縁台付甕が波及したところにS字状口縁台付甕の製作が波及、その両者が融合した結果と考えられないであろうか。

荒砥諏訪西遺跡出土の土器群の様相についての微細な検討も時間的な細分とともに今後の課題とした。

#### 註

1. 本報告のために復検する。
2. 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告X」1980
3. 田口一郎「S字状口縁台付甕の分類と編年」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会 1981
4. 註2文献
5. 深澤敦仁「上野における土器の交流と展開」『庄内式土器研究』XVI 1998
6. 日本考古学協会新潟大会実行委員会「シンボジュム2 東日本における古墳出現過程の再検討」1993
7. 小島敦子「2. 古墳時代初期出土土器について」『荒砥上ノ坊遺跡1』1995  
深澤敦仁 註5文献  
田口一郎「北関東西部におけるS字状口縁台付甕の波及と定着」『S字甕を考える』2000

#### 参考文献

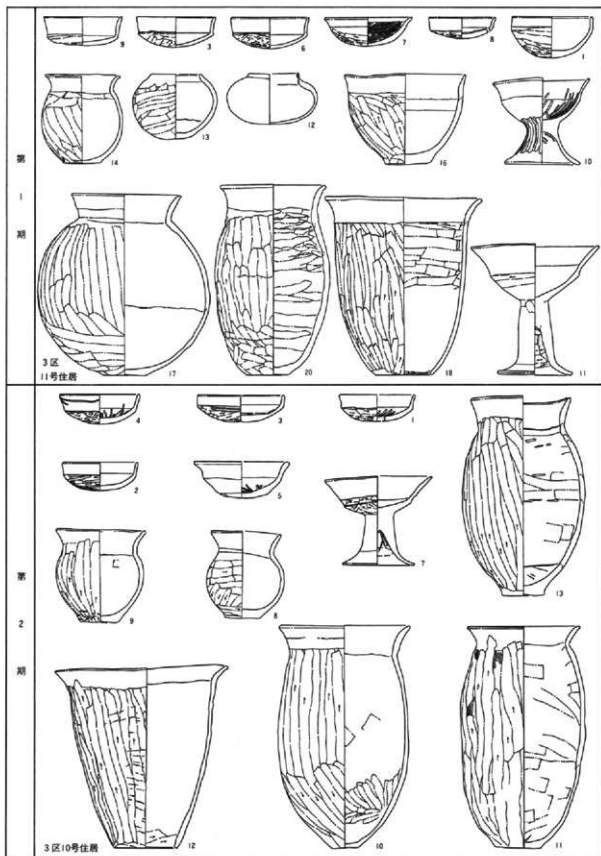
- 赤塚次郎「考察」『福岡遺跡』愛知県歴史文化財センター 1990  
北沢教育委員会「豊島馬場遺跡」1995

### 第3節 古墳時代後期の土器

荒砥諏訪西遺跡の調査においては甕を付設する竪穴住居17軒を検出した。これの竪穴住居のうち資料化するにたる遺物の出土が無かった3区20号住居・34号住居・45号住居の3軒を除く14軒の住居から出土した土器群については以下の特徴が認められる。

まず、組成の特徴であるが、出土土器は全て土師器で、須恵器の共存は全く認められなかったこと。土師器の器種が、杯、椀、鉢、高杯、甕、甗、手捏ね土器であり、その主体が杯、甕、甗であることをあげることができる。

次に、成・整形の特徴を列記する。杯は、須恵器杯蓋模倣の杯の占める割合が圧倒的に多い。内斜口縁の丸底の杯、半球形を呈し丸底の個体は、極く少



第160図 茨城県訪西遺跡古墳時代後期の土器 (1:6)

量の存在である。須恵器杯身模倣の形状を呈するものや、須恵器杯蓋模倣で、口縁部に段を有するものが認められない。内面の調整には棒状工具による磨きが多用されている。

壺は、胴部中に最大径を有するものが大半で、調整は縦方向のヘラ削りである。

甗は大型・小型の2種類がみられる。大型品は口縁部が緩やかに外反して立ち上がる形状を呈し、調整はヘラ削りが多用され、磨きは少なくなっている。

これらの土器群は、杯や甗の特徴などからさらに前後2時期に大別することが可能と考えられる。

第1期は、3区11号住居出土土器に代表されるものである。杯は、須恵器杯蓋を模倣したもので、口縁部が直立気味に立ち上がる個体が主体となっている。2区4号住居や3区30号住居出土の杯は口縁部の立ち上がりや先端の細部の形状にこの時期の特徴が見て取れる資料である。これらの他に内斜口縁や半球形の杯が若干ずつ認められる。高杯は柱状の脚部を有する個体と5世紀段階の形状の流れを受けた器高の低い個体がみられる。壺の大型品は長胴の個体が主体で、胴部中に最大径を有し、口縁部は緩やかに外反、あるいは屈曲し、外反ぎみに立ち上がる個体がみられる。客体的な存在として丸調の個体や小型品が併存する。甗は大型品がある。調整にはヘラ削りに縦方向の磨きが重ねられている。

この他の器種に碗、鉢が出土している。

2区4号住居、3区1号・11号・15号・19号・21号・26号・27号・30号住居出土の土器がこの時期に含まれよう。

第2期は3区16号住居出土土器に代表されるものでこの他の住居からはあまり良好な資料は出土していない。杯は第1期と比較して口縁部の立ち上がる角度が外反気味になり、底部も浅くなっている。

高杯は、器高が低く、柱状の脚部を有する個体が見られる。

壺は第1期と比較して極端な変化はみられない。長胴壺は胴部の張りやや細くなっている。3区23号住居2は上半部残存の資料であるが、これが壺で

あれば口縁部に器形の最大径を有する形状で、6世紀後半以降主体的になっていく個体である。小型品は頸部で屈曲、口縁部が緩やかに外反する形状である。

甗には大小2品がある。第1期と大きな変化は見られないが、3区16号住居12は胴部の張りがほとんど無くなっている。

2区6号住居、3区3号・13号・16号・23号住居出土の土器がこの時期にあたる。

これらの土器群については併存する須恵器もないことから年代の比定は困難であるが、周辺遺跡における土器群の検討の中で、荒砥三木堂遺跡出土土器に関する坂口一氏の編年研究の成果を参考にすると、第1期は北三木堂遺跡編年のV期の内容と共通している。第2期は同遺跡編年のVI期の内容に類似している。荒砥北三木堂遺跡V期の土器群はMT15型式の須恵器との併行関係にあることから6世紀第1四半期に位置づけられている。VI期はTK10型式と併行関係にあることから6世紀第2四半期に位置づけられている。このことから荒砥諏訪西II遺跡出土土器群のうち1期は6世紀第1四半期に、2期は6世紀第2四半期の所産と考えられる。

#### 注

1. 坂口一「荒砥北三木堂遺跡出土の土師器と須恵器の編年—農耕集落分析の基礎的作業—」『荒砥北三木堂遺跡1』1991

## 参 考 文 献

- 前橋市教育委員会「富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群」1979
- 前橋市教育委員会「富田遺跡群・西大室遺跡群」1982
- 前橋市教育委員会「鶴谷遺跡群発掘調査概報」1980
- 前橋市教育委員会「鶴谷遺跡群発掘調査概報Ⅱ」1981
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「横伏遺跡群Ⅰ」1990
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「横伏遺跡群Ⅱ」1991
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「横伏遺跡群Ⅲ」1991
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「横伏遺跡群Ⅳ」1992
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「柳久保遺跡群Ⅰ」1985
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「柳久保遺跡群Ⅵ」1988
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「柳久保遺跡群Ⅶ」1988
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「横伏遺跡群Ⅴ」1993
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「小稲荷遺跡」1987
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団「地田栗田遺跡」1994
- 大胡町教育委員会「天神風呂遺跡」1981
- 大胡町教育委員会「中川原遺跡群小林・山神・大畑遺跡」1992
- 大胡町教育委員会「中川原遺跡群上ノ山遺跡」1992
- 大胡町教育委員会「西小路遺跡」1994
- 大胡町教育委員会「上大屋南部遺跡群上大屋下組遺跡・上大屋中組遺跡・上大屋天王山遺跡」1999
- 大胡町教育委員会「茂木山神Ⅱ遺跡」2001
- 群馬県教育委員会「山崎遺跡・寺東遺跡・寺前遺跡・東前田北遺跡・東原西遺跡・新山遺跡」1984
- 群馬県教育委員会「堤東遺跡」1985
- 群馬県教育委員会「舞台・西大室丸山」1991
- 群馬県教育委員会「富士山Ⅰ遺跡1号古墳」1991
- 群馬県教育委員会「丸山・北原」1992
- 群馬県教育委員会「下境Ⅰ・Ⅱ」1996群馬県教育委員会「西大室丸山遺跡」1997
- 群馬県教育委員会「諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡」1998
- 群馬県教育委員会「上原西遺跡」1999
- 群馬県教育委員会「村主遺跡・谷津遺跡」2000
- 群馬県教育委員会「北田下遺跡・中畑遺跡・中山B遺跡」2001
- 群馬県教育委員会「山王遺跡・大道遺跡・阿弥陀井戸道上遺跡・元屋敷遺跡」2002
- 群馬県企業局「壹野・下田中・矢場遺跡」1991
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡」1985
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」1986
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥天之宮遺跡」1988
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「二之宮宮下遺跡」1988
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥北三木堂遺跡Ⅰ」1991
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「今井白山遺跡」1993
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥宮川遺跡・荒砥宮原遺跡」1993
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥大日原遺跡」1994
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「今井道上遺跡」1994
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「箕井八日市遺跡」1994
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「小島田八日市遺跡」1994
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ」1995
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「今井道上・道下遺跡」1995
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥下押切Ⅱ遺跡・荒砥中屋敷Ⅱ遺跡」1999
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥荒子遺跡」2000
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報19」2000
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報20」2001

# 写 真 图 版







京延路跡西遺跡の位置 (○印周辺)



1 1区全景(東から)



2 1区1号住居全景(北から)



3 1区2号住居全景(南東から)



4 2区1号住居全景(北から)



5 2区2号住居全景(北から)



6 2区2号住居遺物出土状況(北西から)



7 2区2号住居遺物出土状況(北から)



8 2区2号住居遺物出土状況(南西から)



1 2区3号住居全景(北から)



4 2区5号住居全景(西から)



2 2区3号住居遺物出土状況(西から)



5 2区5号住居遺物出土状況(東から)



3 2区3号住居遺物出土状況(東から)



6 2区5号住居遺物出土状況(北東から)



7 2区7号住居全景(東から)



8 2区7号住居遺物出土状況(北東から)



1 2区8号住居全景(西から)



2 2区8号住居遺物出土状況(南西から)



3 2区8号住居遺物出土状況(西から)



4 2区8号住居遺物出土状況(西から)



5 2区9号住居全景(西から)



6 2区9号住居遺物出土状況(北西から)



7 2区9号住居遺物出土状況(北東から)



8 2区9号住居遺物出土状況(西から)



1 3区調査区北半全景（北から）



2 3区調査区南半全景（北から）



1 3区2号住居全景（西から）



2 3区2号住居炉（東から）



3 3区4号住居全景（南西から）



4 3区4号住居遺物出土状況（南西から）



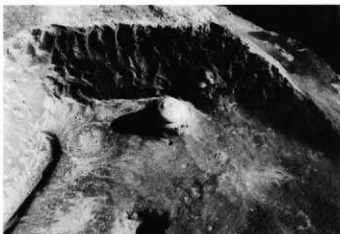
5 3区5号住居全景（東から）



6 3区5号住居遺物出土状況（東から）



7 3区6号住居全景（北から）



8 3区6号住居遺物出土状況（西から）



1 3区7・8号住居全景（西から）



4 3区8号住居遺物出土状況（西から）



2 3区7号住居遺物出土状況（南西から）



5 3区8号住居炉（北から）



3 3区7号住居遺物出土状況（西から）



6 3区10号住居全景（北西から）



7 3区9号住居全景（北から）



8 3区9号住居炉（東から）



1 3区12号住居全景（北から）



2 3区14号住居全景（西から）



3 3区14号住居遺物出土状況（南西から）



4 3区14号住居遺物出土状況（西から）



5 3区21・22号住居全景（西から）



6 3区22号住居窯（南東から）



7 3区22号住居遺物出土状況（西から）



8 3区22号住居遺物出土状況（北東から）





1 3区17号住居全景(北から)



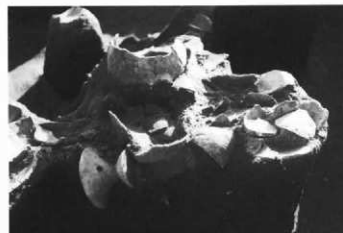
2 3区17号住居全景(北から)



3 3区17号住居遺物出土状況(北から)



4 3区17号住居遺物出土状況(南から)



5 3区17号住居遺物出土状況(北から)



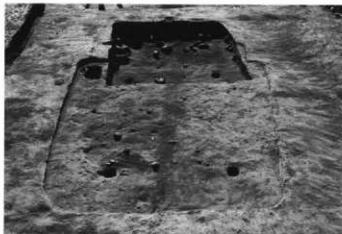
6 3区17号住居遺物出土状況(北東から)



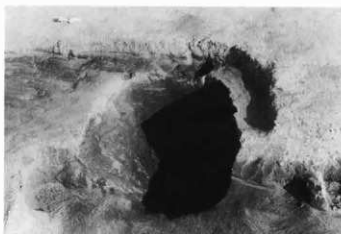
7 3区17号住居土層断面(西から)



8 3区17号住居炉(西から)



1 3区24号住居全景(北から)



2 3区24号住居貯蔵穴(西から)



3 3区24号住居炉(南東から)



4 3区28号住居全景(北から)



5 3区28号住居遺物出土状況(西から)



6 3区28号住居遺物出土状況(北東から)



7 3区28号住居遺物出土状況(西から)



8 3区28号住居炉(南東から)



1 3区25号住居全景(南東から)



2 3区25号住居遺物出土状況(北から)



3 3区25号住居遺物出土状況(南東から)



4 3区25号住居遺物出土状況(東から)



5 3区25号住居遺物出土状況(南東から)



6 3区25号住居遺物出土状況(西から)



7 3区25号住居窯(北東から)



8 3区25号住居遺物出土状況(北から)



1 3区29号住居全景(南東から)



2 3区29号住居全景(北西から)



3 3区29号住居遺物出土状況(西から)



4 3区29号住居遺物出土状況(南東から)



5 3区29号住居遺物出土状況(西から)



6 3区29号住居土層断面(南西から)



7 3区31・32号住居全景(北から)



8 3区32号住居遺物出土状況(南東から)



1 3区33号住居全景（東から）



2 3区33号住居全景（東から）



3 3区33号住居遺物出土状況（東から）



4 3区33号住居遺物出土状況（南東から）



5 3区33号住居遺物出土状況（東から）



6 3区33号住居炉（東から）



7 3区33号住居土層断面（南から）



8 3区33号住居柱穴4（東から）



1 3区36号住居全景 (南東から)



2 3区36号住居遺物出土状況 (南東から)



3 3区36号住居炉 (北から)



4 3区36号住居貯蔵穴 (東から)



5 3区35号住居全景 (東から)



6 3区37号住居全景 (南東から)



7 3区38号住居全景 (北から)



8 3区39号住居全景 (北西から)



1 3区40号住居全景（東から）



2 3区40号住居全景（東から）



3 3区40号住居遺物出土状況（南東から）



4 3区40号住居間仕切り溝（南から）



5 3区40号住居遺物出土状況（北から）



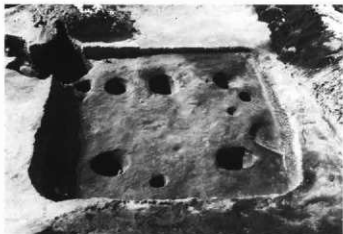
6 3区40号住居遺物出土状況（北東から）



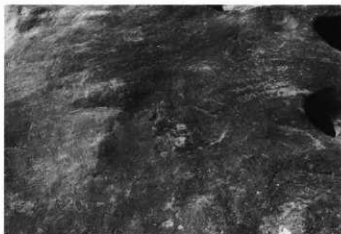
7 3区41号住居全景（北東から）



8 3区41号住居炉（北東から）



1 3区42号住居全景（北東から）



2 3区42号住居炉（北東から）



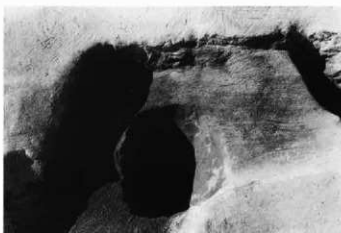
3 3区42号住居遺物出土状況（北西から）



4 3区46号住居全景（南東から）



5 3区43号住居全景（東から）



6 3区43号住居貯蔵穴（東から）



7 3区44号住居全景（西から）



8 3区44号住居貯蔵穴（北西から）





1 3区47号住居全景（北東から）



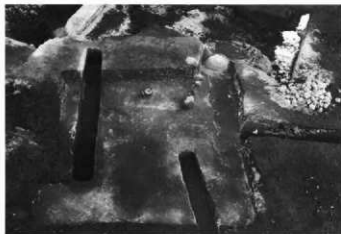
2 3区47号住居遺物出土状況（東から）



3 3区48号住居全景（東から）



4 3区48号住居遺物出土状況（南東から）



5 3区49号住居全景（西から）



6 3区49号住居遺物出土状況（北西から）



7 3区50号住居全景（北西から）



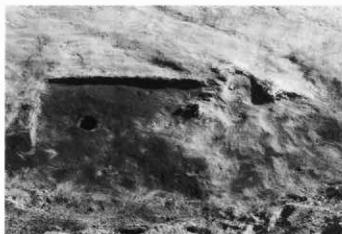
8 3区50号住居全景（北西から）



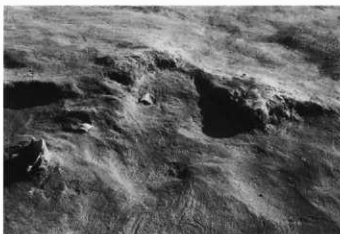
1 2区4号住居全景(西から)



2 2区4号住居(西から)



3 3区1号住居全景(西から)



4 3区1号住居(西から)



5 3区3号住居全景(南西から)



6 3区3号住居(南西から)



7 3区11号住居全景(西から)



8 3区11号住居(西から)



1 3区13号住居全景 (北西から)



2 3区16号住居全景 (西から)



3 3区16号住居窟 (西から)



4 3区16号住居遺物出土状況 (北西から)



5 3区15号住居全景 (西から)



6 3区15号住居遺物出土状況 (東から)



7 3区15号住居窟 (西から)



8 3区15号住居窟構築状況 (西から)



1 3区19号住居全景(東から)



2 3区19号住居遺物出土状況(北東から)



3 3区19号住居遺物出土状況(西から)



4 3区19号住居窟(東から)



5 3区21号住居全景(西から)



6 3区21号住居遺物出土状況(西から)



7 3区21号住居窟(西から)



8 3区26号住居全景(西から)



1 3区23号住居全景(西から)



2 3区23号住居窟(西から)



3 3区27号住居全景(西から)



4 3区27号住居窟(北西から)



5 3区30号住居全景(東から)



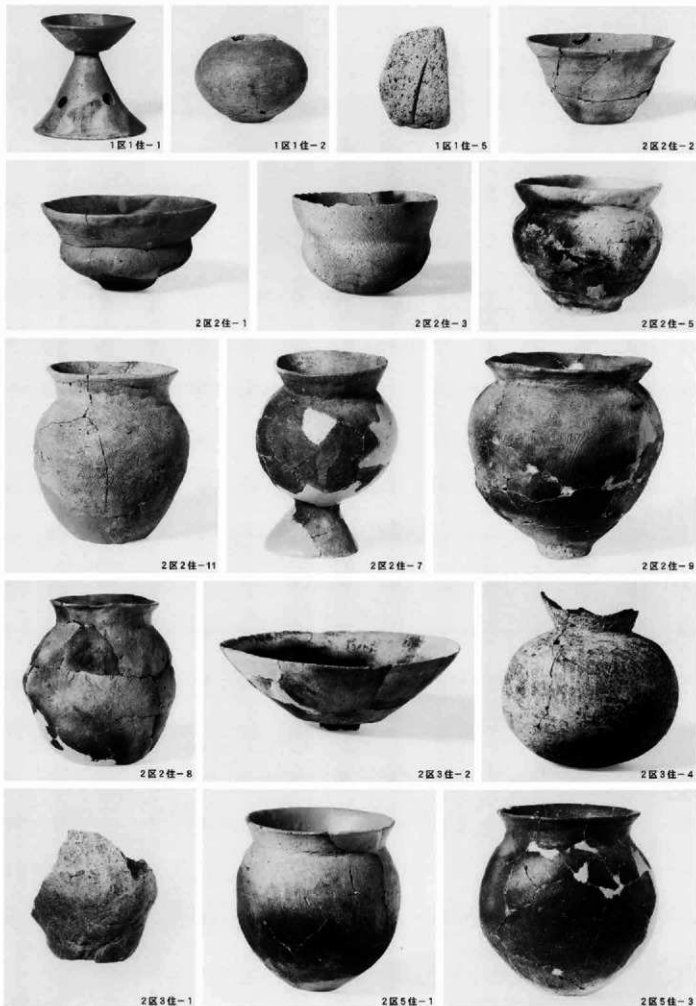
6 3区30号住居遺物出土状況(南東から)



7 3区34号住居全景(西から)



8 3区45号住居全景(北東から)



1区1号住居出土遺物、2区2・3号住居出土遺物、5号住居出土遺物(1)



2区5住-4



2区7住-2



2区7住-1



2区5住-6



2区7住-3



2区8住-3



2区8住-2



2区9住-5



2区9住-6



2区9住-1



2区9住-9



2区9住-8



2区9住-2





3区2住-2



3区4住-1



3区4住-3



3区4住-5



3区4住-2



3区4住-8



3区5住-1



3区6住-1



3区5住-3



3区  
5住-2



3区7住-4



3区7住-7

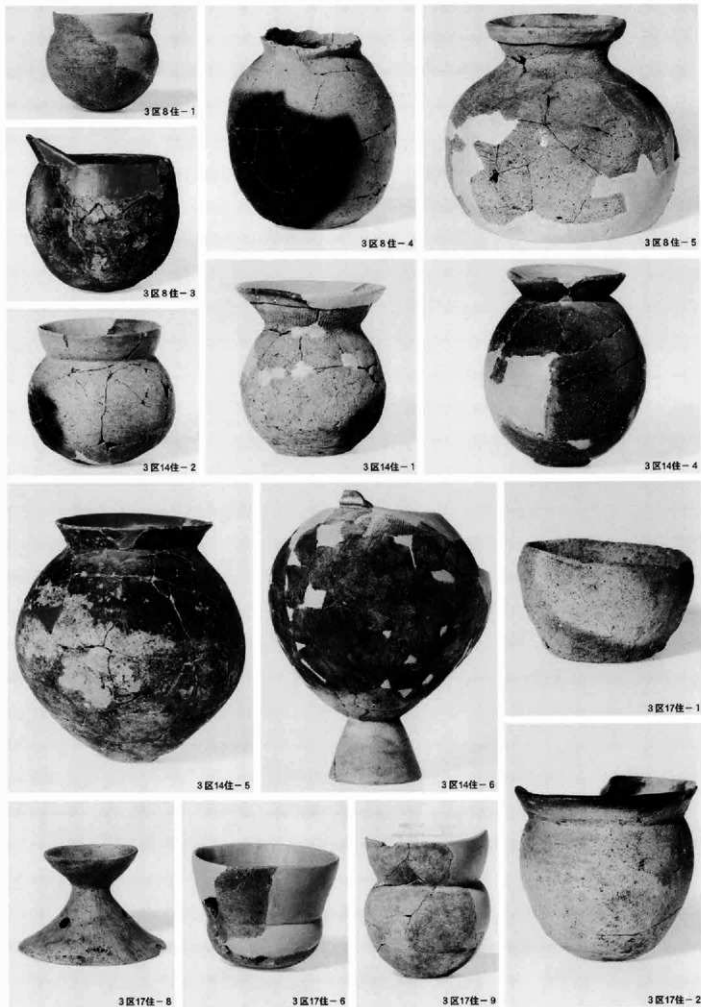


3区7住-8



3区7住-6





3区8・14号住居出土遺物、17号住居出土遺物(1)



3区17住-5



3区17住-15



3区17住-10



3区17住-3



3区17住-18



3区17住-4



3区17住-19



3区17住-42



3区17住-26



3区17住-22



3区17住-21



3区17住-29



3区17住-30



3区17住-31



3区17住-34



3区17住-32

3区  
17住-43

3区17住-13



3区17住-33



3区17住-37



3区17住-26



3区17住-24



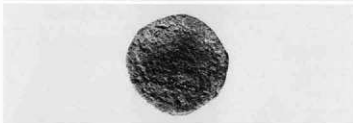
3区17住-14



3区17住-17



3区17住-25



3区17住-23



3区17住-27



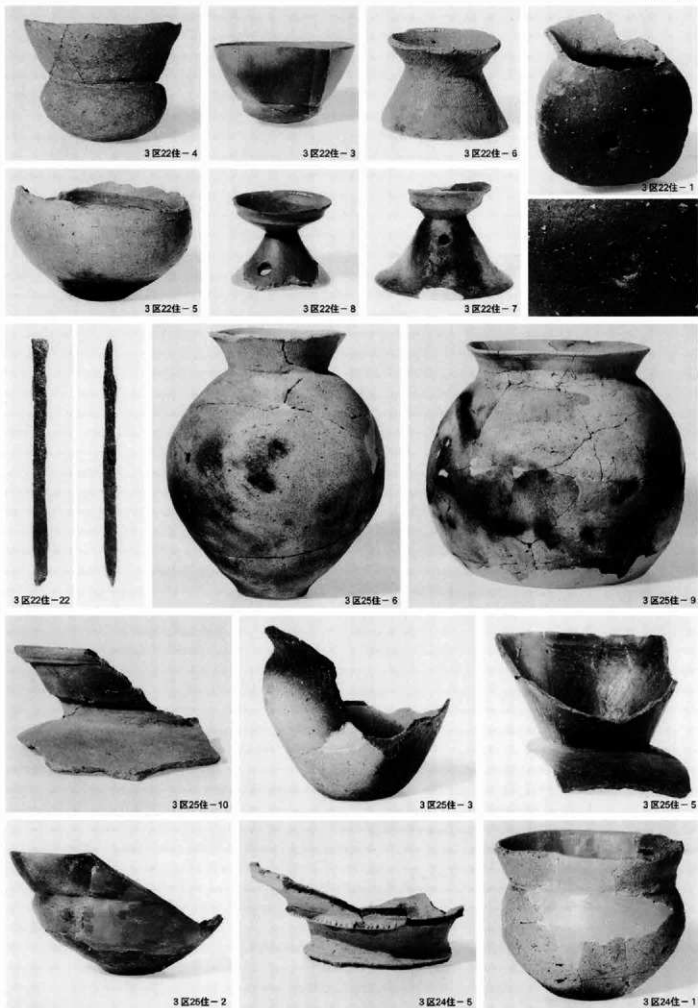
3区17住-36



3区17住-39



3区17住-41



3 区22・24号住居出土遺物、25号住居出土遺物(1)



3区25住-7



3区25住-8



3区25住-22



3区25住-21



3区25住-15



3区25住-18



3区25住-17



3区25住-16



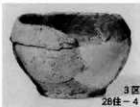
3区28住-3



3区28住-5



3区28住-2



3区  
28住-4



3区28住-6



3区  
28住-9



3区28住-8



3区28住-10



3区28住-1



3区28住-12



3区28住-11



3区28住-13



3区28住-15



3区28住-16



3区28住-19



3区28住-17



3区28住-20



3区28住-27



3区28住-25



3区28住-26



3区28住-34



3区28住-36



3区28住-38



3区28住-41



3区28住-39



3区28住-37



3区26住-31



3区26住-32



3区26住-33



3区26住-42



3区26住-49



3区26住-48



3区26住-47



3区26住-40



3区26住-45



3区26住-57



3区26住-43



3区26住-60



3区26号住居出土遺物(3)





3区28住-46



3区28住-54



3区28住-63



3区28住-55



3区28住-59

3区  
29住-56

3区28住-58

3区  
28住-63

3区28住-52



3区28住-64



3区28住-60



3区28住-66



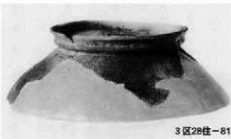
3区28住-62



3区28住-65



3区28住-67





3区29住-1



3区29住-2



3区29住-3



3区29住-4



3区29住-5



3区29住-8



3区29住-6



3区29住-7



3区29住-17



3区29住-16



3区29住-15



3区29住-14



3区29住-12



3区29住-10



3区29住-24



3区29住-26





3区29住-39



3区29住-51



3区29住-50



3区29住-38



3区29住-47



3区29住-48





3区29住-57



3区29住-58



3区29住-52



3区29住-71



3区29住-59



3区29住-64



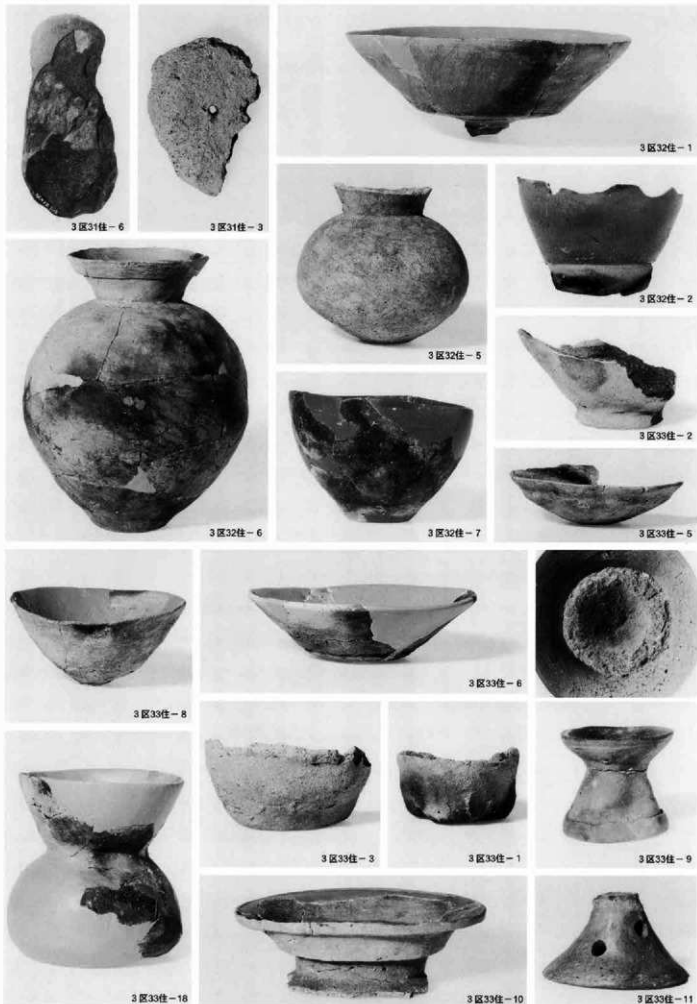
3区29住-55



3区29住-81



3区29住-80







3区33住-23



3区33住-28



3区33住-24



3区33住-33



3区33住-35



3区33住-31



3区33住-34



3区33住-17



3区33住-4



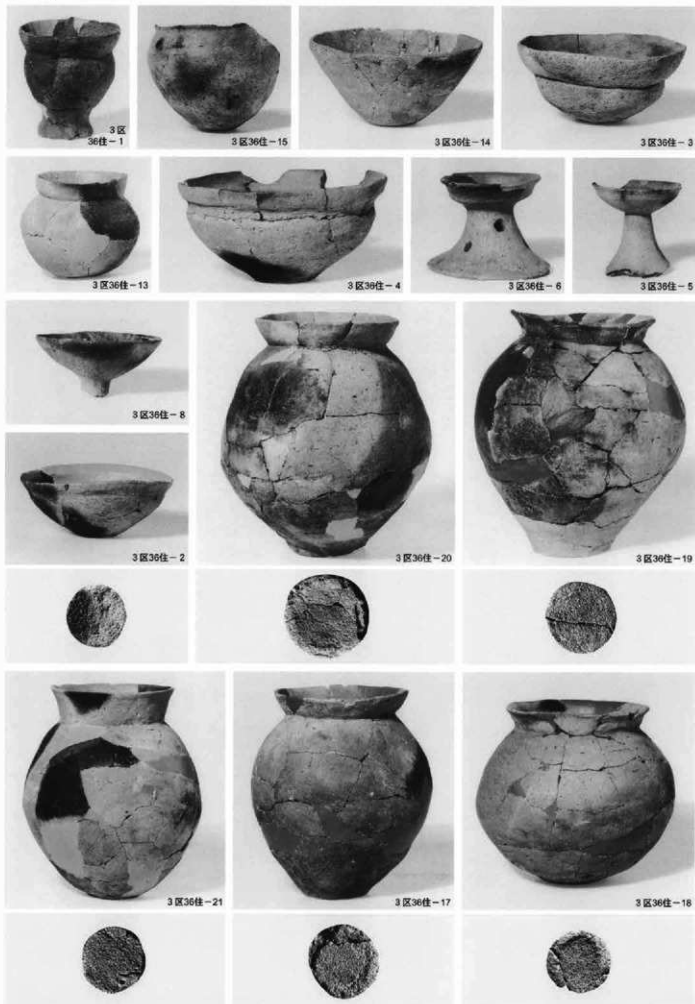
3区33住-32



3区33住-26



3区33住-42





3区36住-9



3区36住-12



3区36住-22



3区36住-10



3区36住-7



3区36住-11



3区36住-23



3区36住-27



3区36住-30



3区36住-28



3区36住-31



3区40住-5



3区40住-6



3区40住-4



3区40住-7



3区40住-1



3区40住-2



3区40住-8



3区40住-16



3区40住-12



3区40住-13



3区40住-24



3区40住-18



3区40住-14



3区40住-15



3区40住-25



3区40住-17



3区40住-23



3区40住-20



3区40住-33



3区40住-27



3区40住-21



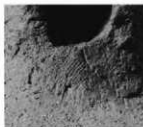
3区40住-29



3区40住-35



3区40住-28



3区40住-30



3区40住-40



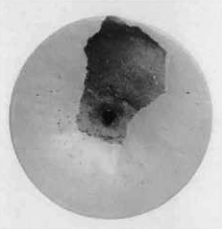
3区40住-96



3区40住-36



3区40住-39





3区40住-37



3区40住-49



3区40住-41



3区40住-48



3区40住-45



3区40住-47



3区40住-58



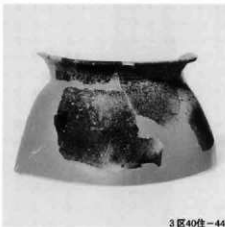
3区40住-54



3区40住-51



3区40住-53



3区40住-44



3区40住-11



3区40住-67



3区40住-68



3区40住-60



3区40住-64



3区40住-59



3区43住-1



3区41住-1



3区41住-2



3区41住-5



3区43住-4



3区42住-1



3区42住



3区43住-5



3区43住-2



3区43住-3



3区44住-1



3区44住-2



3区47住-1



3区47住-4



3区47住-3



3区47住-5



3区47住-6



3区48住-15



3区48住-11



3区47住-7



3区48住-3



3区48住-1



3区48住-2



3区48住-9



3区49住-2



3区49住-1





台付壺口縁部（S字状口縁）



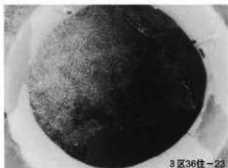
台付壺口縁部（軽S字状口縁）



台付壺口縁部（折り返し口縁）



台付壺胴部内面（S字状口縁）



台付壺胴部内面（軽S字状口縁）



台付壺胴部内面（折り返し口縁）



台付壺脚部内面（S字状口縁）



台付壺脚部内面（軽S字状口縁）



台付壺脚部内面（折り返し口縁）



台付壺（単口縁）刷毛目 1/2



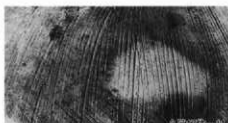
台付壺（単口縁）刷毛目 1/2



台付壺（単口縁）刷毛目 1/2



台付壺（S字状口縁）刷毛目 1/2



台付壺（S字状口縁）刷毛目 1/2



台付壺（S字状口縁）刷毛目 1/2



台付壺（S字状口縁）刷毛目 1/2



台付壺（S字状口縁）刷毛目 1/2



壺口縁部文様



3区1住-2



3区3住-13



3区3住-4



3区3住-5



3区3住-1



3区3住-6



3区3住-9



3区11住-7



3区11住-1



3区11住-8



3区11住-2



3区11住-3



3区11住-9



3区11住-4



3区11住-6



3区11住-5



3区11住-11



3区11住-10



3区11住-16



3区11住-15



3区11住-13



3区11住-14



3区11住-12



3区11住-17



3区11住-20



3区11住-19



3区11住-18



3区15住-1



3区15住-2



3区15住-6



3区15住-9



3区15住-4



3区16住-3



3区15住-5



3区16住-8



3区15住-7



3区16住-2



3区16住-4



3区15住-10



3区16住-3



3区16住-5



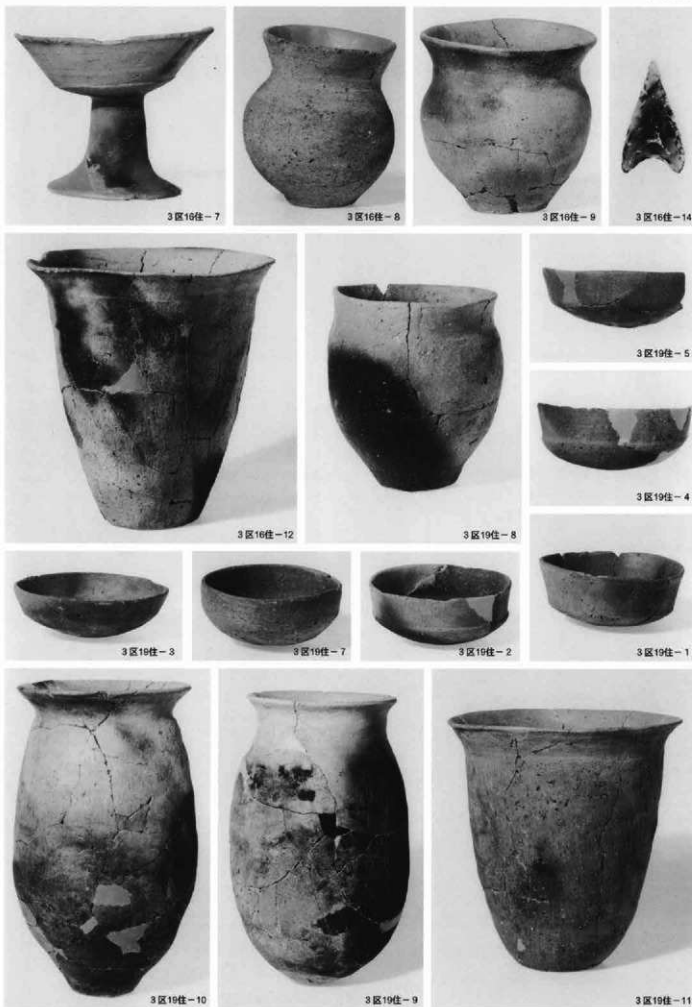
3区16住-10



3区16住-11



3区16住-13



3区16号住居出土遺物(2)、19号住居出土遺物



3区23住-1



3区23住-6



3区23住-4



3区23住-3



3区26住-1



3区26住-4



3区30住-1



3区27住-1



3区27住-3



3区30住-5



3区30住-4



3区27住-6

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	あらとすわにしいせき
書名	荒砥諏訪西遺跡 I
副書名	昭和58年度県営圃場整備事業荒砥北部地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第8集
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第304集
編著者名	中沢 悟・徳江秀夫
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字F箱田784-2 TEL 0279-52-2511
発行年月日	2002年10月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	期 間	調査原因 (㎡)	調査原因
		市町村	跡番号					
あらとすわにし 荒砥諏訪西	またびしあらくちまち 前橋市荒口町 899他	10201		36°23'00"	39°9'20"	1983年 10月1日 ～ 1984年 3月24日	30.920㎡	県営圃場整備事業荒砥 北部地区に 係わる調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
荒砥諏訪西	集 落	古墳時代前期 古墳時代後期	竪穴住居43軒 竪穴住居17軒	土師器 須恵器 砥石 紡錘車 土製勾玉	古墳時代各期の住居を検出、特に赤城山南麓地域の前期の良好な土器資料を出土した。





財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
調査報告書 第 304 集



**荒砥諏訪西遺跡 I (堅穴住居本文編)** 昭和58年度県営圓場整備事業荒砥北部地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年10月21日 印刷

平成14年10月27日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会

〒371-8570 前橋市大手町1丁目1番1号

電話 (027) 223-1111 (代表)

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 勢多郡北郷村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上毎印刷工業株式会社